

# 風を操る者

海虎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

息抜き作品の2つ目。

注意：誹謗中傷はおやめ下さい。自己満足100%。設定の改変や原作の改変がたくさんあります。駄文。これらが気に入らない方はブラウザバック推奨

# 目次

設定	1
阿知賀編設定（ネタバレ注意）	
4	
県予選編	
第一局	8
第二局	23
第三局	31
第四局	41
第五局	51
第六局	63
第七局	69
第八局	80
第九局	86
第十局	96
第十一局	111
合宿編	
第十二局	128
第十三局	133
第十四局	140
第十五局	148
阿知賀編	
第一局	155
第二局	161
第三局	167

番外編	I F	I F	番外編	第十二局	第十一局	第十局	第九局	第八局	第七局	第六局	第五局	第四局
思い出のペンダント	風越編①	誕生日プレゼント										
274	267	258	246	233	226	222	217	204	188	183	176	

全国編	過去編	第十局	第九局	第八局	第七局	第六局	第五局	第四局	第三局	第二局	第一局	風音過去編
	勧誘①											
	339	336	324	320	315	310	304	295	291	285	281	

第三局 第二局 第一局



357 352 345



# 設定

設定

福路 風音（ふくじ かぎね）

性別：男

年齢：16歳

身長：158cm

誕生日：7月7日

所属：清澄高校

好きな事・物：ゲーム、昼寝、アニメ鑑賞

嫌いな事・物：睡眠妨害、身長をいじった奴

性格：おだやか

能力

・風牌の支配

常に配牌の時点で自風牌の暗刻があり、場風牌をつもりやすくなる。自分の親番では自風牌が必ずドラになる。

(これらの能力は自分が場を完全に支配できていない場合、能力が弱体化する。例：暗刻が対子になったり、自分の親番で自風牌がドラにならなかつたりする)

・完全模倣

対局を見たことがある相手や自分の対戦相手の能力、技術を使うことができる。自分より実力の高い相手の対局を見ただけでは能力の半分のみしか発揮できない。1度でも対局した相手の場合能力もオリジナルと遜色なくはつきできる。(自分より実力が低い相手の場合見ただけでオリジナルと同等の力を発揮する)

男子個人のインターミドル3連覇を達成しているが団体戦の方には1年の時しかでない。高校1年の時に男子個人のインターハイで優勝している。1年の2月後半に車にひかれ4月まで入院していた。両親に優秀な姉といつも比較され続けられていたがそれが中学3年生の時に爆発し両親とはぎこちない生活を送っていたが高校入学時に学校が遠いこともあり1人暮らしをはじめ(両親も自分たちがおこなっていたことを反省し謝罪し和解している)。時々姉か母親が様子を見に来る。オッドアイの事をバレないように普段はカラコンを入れている。機械は姉と違ってちゃんと使える。1度対戦した相手を忘れないようにその試合の牌譜をファイルしてあり、注目した選手は徹底的に研究(情報を集める)をするようにしている。研究の成果が書かれているノート



は10冊を超えており現在も更新されている。小柄である為そをネタにいじられることがあるがいじった奴のことはそいつがしつかり謝罪するまで徹底的に無視をする。そして容姿が姉に似ているため間違えられる事や妹と勘違いされることが多くある。そしてかなりのオタクであるため1人暮らしの部屋はフィギュアや漫画などがかなりあり、ゲーム機も最新のものが完備されている。周りから見れば勉強はできる方に分類されるが自分自身は姉と比較されていた時間が長かった為頭が良くない方だと思っっている。姉と比較されていたが姉とは仲がいい。最近結構な頻度で姉が来る為少し面倒だと思っっている。趣味でイラストやマンガなどをかいてネットに上げている。

オリジナル設定（増えてきます）

風越は共学になつてゐる

## 阿知賀編設定 (ネタバレ注意)

名前：夢咲 桂馬 (ゆめさき けいま)

性別：男

年齢：15歳

身長：164cm

誕生日：12月4日

所属：阿知賀高校

好きな事・物：ゲーム、読書

嫌いな事・物：ゲームの妨害

性格：冷静

能力

強奪：対局中自分より場の支配が上回っていない対戦相手の能力を無効にしその能力を奪える。ただしその場にはいない選手の能力を奪うことはできないし何かを降ろす系の能力も奪うことはできても使えない (例、マホの模倣した選手の能力、神代小蒔の能力など)

阿知賀編の主人公の1人。中学2年生の時奈良県代表でインターミドルに参加。当時3年生だった福路風音とインターミドル決勝で対戦し敗れた。去年のインターハイにでた風音を見て再戦を目指して阿知賀高校の麻雀部に入部。強豪からのスカウトもあつたが遠いという理由で全て蹴り阿知賀高校に入学した。団体戦にはあまり興味がなかつた為どこに行つてもやることは変わらないというスタンスを取っている。学力も高いが中学校では問題児であつた。理由は体育以外の座学の授業でずっとゲームしているが毎回全てのテストで100点を取っており教師も文句を言えなかつた。：と  
言うより呆れられていた為放置されていた。戦力の分析などが得意な為部活ではその  
分析能力をつかつて女子に協力している。

名前：篠原 久美子（しのはら くみこ）

性別：女

年齢：17歳

身長：158cm

誕生日：5月24日

所属：阿知賀高校

好きな事・物：音楽、動物

嫌いな事・物：いじめ

性格：臆病

能力

ダイレクト：同じ対戦相手から3回連続で直撃がとれ尚且つ打点が上がっていく。1試合に1回だけ使える（1試合は半荘1回）。発動条件は最初に直撃を取った時点で発動する対象は最初に直撃を取った相手

回避：対戦相手がリーチをかけた場合自分は絶対によりチをかけた相手のロン牌をひかない。自分がリーチをかけていた場合は発動しない

阿知賀編のもう1人の主人公。中学3年までは長野に住んでいて風音と同じ学校に通っていた。風音とはクラスメイトで仲が良かった。彼女自身はかなりドジで臆病な性格だったので2年からいじめの標的にされていた。その時に風音もある事がきっかけで学校に居ずらくなっていた為2人でお互いを慰めあっていたが3年生の春に耐えられなくなった久美子が自殺をはかるが失敗し記憶を失う。そして両親が元々住んでいた奈良に引っ越して新生活を送っている。クラスメイトの松実玄とも仲が良く一緒に麻雀部の立ち上げに協力した。久美子が麻雀をやる理由は誰かとの約束に麻雀が関わっていた気がするからである。最近では忘れていた記憶をぼんやりとだが思い出している（主に風音との思い出）。

原作との変更点

阿知賀女子↓阿知賀高校

## 県予選編

### 第一局

p i p i p i

携帯のアラームがなっていた、それを寝ぼけながら止める。

風音「よく寝た。・・・はあ今日から学校かめんどくせーな。」

この少年福路風音は少し前まで車に轢かれ入院していたのだがその時の怪我も完治したので昨日退院していた。既に新学期が始まっているのでこれ以上授業に出ないわけにもいかなかった

風音「もう少し休んでいたかったけどこれ以上休むとやびいからなちゃんに行かないと」

制服に着替えてから朝食（カロリー〇イト）を食べ学校に向かった。

学校につき職員室に向かい教室を確認してそこに入った。もう既にクラス内にグループもできていたのでボッチが確定していた。

女1「あんな子うちのクラスにいたっけ？」

女2 「いなかったけどあつ今まで休んでた福路君じゃない？」

男1 「あの見た目で男なのか？」

女2 「そうなんだよ、女の子って言われても違和感ないよね」

男2 「でもどうして今まで休んでたんだけ？」

女2 「1年の最後の方に車に跳ねられたらしくてそれで入院してたっぽいよ」

女1 「なんであんたがそんな事知ってんのよ」

このようなやりとりがクラス中どこでも繰り広げられていた。この後教師がきてH Rをはじめたその時に俺の紹介がされクラスメイト達は納得したようだった

### 放課後

風音 「さてと行くか」

女1 「えつと福路君だよね」

風音 「そうだけどなんか用？」

男1 「これから遊びに行くんだけど思えも一緒にこないか？」

風音 「ごめんこれから部活があるんだ」

女1 「そつそうなんだ、ごめんね」

風音 「こちらこそ誘ってくれたのにごめん、じゃあ行くから」

素晴らしい風音は旧校舎に向かった

その頃旧校舎

久「そういえば今日だったわね」

まこ「何がじゃ？」

久「福路君が復帰する日よ」

まこ「そうじゃったのー」

咲「あの福路君って誰ですか？」

優希「知らないじえーのどちゃんは何か知ってるか？」

和「わかりませんね、どこかで聞いたことのある名前ですが。部長」

久「何かしら？」

和「さつき言っていた福路君とは誰なのですか？」

京太郎「俺も気になります」

うつていた1年生4人がこちらをむく

久「ふくじ」

コンコンとドアがノックされた

久「来たみたいね、どうぞ」



そう言われると扉が開いたそこには1人の男子生徒が立っていた

風音「福路風音！今日から復帰させていただきます、久しぶりです部長、あと染谷も」  
久「久しぶり少し痩せたわね」

まこ「あとは余計じゃ」

久「じゃあ1年生にも自己紹介してあげて」

風音「はい。福路風音2年よろしく」

久「それだけ？」

まこ「まあこいつはこういうやつじゃからのお」

風音「別に他に言うことはないでしょ・・・なら1年生なんか質問ある？そんなときに名前も教えて」

優希「はい、片岡優希だじえ。どうして今まで来てなかったんだじよ？」

風音「少し前に跳ねられてね、少し前まで入院してたんだじゃあ次は」

和「原村和です。私は特にはありません、ですが先輩の實力は知りたいです」

京太郎「はい須賀京太郎です。福路先輩はいつから麻雀始めたんですか？」

風音「小学6年くらいかな、最後は君か」

咲「みつ宮永咲ですよろしくお願いします。私も先輩がどれくらいの実力なのか知りたいです」

風音「へえ。宮永さん達が俺の実力を知りたがってるから打つてもいいかい？」

久「いいわよ。なら福路君、咲、和、優希で入ってもその試合が終わってからね」

咲、和、優希「わかりました（わかったじえ）」

そして試合が終わる

京太郎「部長俺は？」

久「須賀くんはたぶん相手にならないだろうから見学よ」

京太郎「そんな」

久「言い方が悪かったわね、1年生と言うよりこの部室の誰もたぶん相手にならないわ」

和「っ！」

優希「そんな強そうにはみえないじよ」

久「打ってみればわかるわ」

それぞれ卓につく

風音「じゃあよろしく」

風音の後ろから風がふくイメージが咲には見えた

咲（この人）

風音（オーラを出して反応したのは宮永さんだけか）

東一局

和親番

ドラ表示牌（九萬）

風音手牌

（一萬一萬一萬①⑤⑦一索一索一索五索六索北北北）

風音（なるほどこの卓には俺の支配をうわまわる人はいないってことか、それとも隠してるのか・・・どちらにしろ様子見だな）

4 順後

風音手牌

（一萬一萬一萬⑤⑥⑦一索一索一索五索六索北北北）

ツモ（一萬）

風音（あちゃー様子見のつもりだったんだけど仕方ないか）

風音「槓！」

咲（その牌は）

一萬子4枚を晒し嶺上牌をつもる

ドラ表示（九萬、南）

風音手牌

⑤⑥⑦一索一索五索六索北北北

（一萬裏裏一萬）

ツモ（七索）

風音「自摸！嶺上開花は4000、2000」

優希「咲ちゃんみたいだじえ」

和「たまたまです。」

咲（この感じ昔のお姉ちゃんよりもすごい）

風音「次行こうか」

東二局

和：21000

咲：23000

優希：23000

風音：33000

咲親番

ドラ表示牌 (⑤)

風音 (お次は片岡さんでいくかな)

風音手牌

(⑥⑥六萬八萬九萬五索六索七索東東西西西)

ツモ (七萬)

風音 「リーチ！」

(横六萬) 捨て

優希 「はい？」

咲 「ダブリー！」

和 「えっ」

和 「・・・」

(⑨) 捨て

咲 (これは危ない気がする)

引いた東を捨てずに和に合わせた

(⑨) 捨て

優希 「いくじえ！とおらばリーチ！」

(横南) を捨て

そして風音のツモ順

風音「自摸! 6000、3000」

風音手牌

⑥⑥七萬八萬九萬五索六索七索西西西東東

ツモ東 裏ドラ(一萬)

優希「そーゆーのうちのお株なんですけど!」

和「たんなる偶然です、その運もそろそろつきます」

咲(なんだろう今までの局、なんかすごい違和感がある)

東三局

和: 18000

咲: 17000

優希: 20000

風音: 45000

優希親番

ドラ表示牌(3索)

風音(原村さんの模倣といきたいとこだけ彼女のうちかたはスキがありすぎて宮永さんあたりにやられそう。今回も宮永さんの模倣でいくか)

## 風音配牌

①①③④⑤⑥⑧⑨二索九索南南南

風音（いい感じだ。）

数順後

和「リーチ！」

〔横南〕を捨てリーチをかける

風音「槓！」

手配の南を3枚見せてたおし嶺上牌を引く

風音手牌

①①②③④⑤⑥⑦⑧⑨

〔南南南横南〕

ツモ ①

風音「自摸！嶺上開花！8000の責任払い」

和「はい」

優希「咲ちゃんみたいだじえ」

咲（やっぱりこの人私の打ち方を模倣してる）

久「やっぱりこうなったわね」

まこ「あんたも人が悪いのお。あいつが何者なのか教えないとは」

京太郎「えっ？あの人なんかやったんですか？それにここまでの結果がわかってたみたいなの言い方して」

久「須賀くんもしらなかつたの？知ってるものだと思ってたわ」

京太郎「あとさつきから見えてて思ったんですけど福路先輩さつきから優希や咲きみたいな打ち方してません？」

久「気づいてたのね、対局が終わったら正体とか色々はなすわ」

そして3人は対局を見る

東四局

和：10000

咲：17000

優希：20000

風音：53000



風音親番

ドラ表示牌〔北〕

咲「あつあの」

風音「なんだい？」

咲「間違つてたらすいません。模倣してますよね」

風音「ふうん気づいたんだ。でも気づいた所で何も出来ないよ」  
 そういいオーラを放ち威圧する

風音手牌

〔③⑤⑥四索六索四萬五萬六萬白発東東東〕

ツモ〔④〕

〔③〕捨て

7順目

風音手牌

〔④⑤⑥四索六索四萬五萬六萬白発東東東〕

ツモ〔5索〕

〔横発〕を捨て

風音「リーチ！」

優希「はやいじえ」

8 順目

ツモ〔東〕

風音「槓！」

東を4枚倒し暗槓し嶺上牌をツモ切り

〔九萬〕捨て

ドラ表示牌〔北、北〕

咲「そんな」

優希「やばげだじよ」

10 順目

風音「自摸！16000オール」

風音手牌

〔④⑤⑥四索六索四萬五萬六萬白〕暗槓〔東裏裏東〕

ツモ〔白〕

裏ドラ〔7萬、①〕

和：16000 (トビ)

咲：10000

優希：4000

風音：101000

風音「原村さんのとび終了だね、部長俺そろそろバイトなんで帰りますね」

久「わかつたわじゃあね福路君」

風音「皆さんさようなら」

素晴らしい福路は帰っていった

京太郎「和がどばされるなんて」

優希「信じられないじよ」

久「言ったでしょここにいる誰も福路君には勝てないって」

咲「福路先輩は何者なんですか？」

久「彼は去年の男子個人のインターハイチャンピオンにして男子個人のインターミドルを3連覇した子よ」

京太郎「まっまじですか」

優希「すごいじえ」

和「だから福路の名前に聞き覚えがあつたんですね」

咲「全国のチャンピオン……」

京太郎「あとなんで福路先輩は優希や咲みたいな打ち方をしてたんですか？」

咲「それは私も思いました」

久「それは彼があなた達の打ち方を模倣してたからよ」

咲「やっぱり」

久「咲は気づいてたみたいね。彼は1度でも対戦を見た相手ならその相手の能力や打ち方、技術を全て模倣できるのよ」

和「そんなオカルトありえませんが、練習もせずに見ただけで真似できるなんて」

久「でも目の前で彼はやったじゃない」

和「それは」

優希「でもなんでそんな人がこの学校にいるのに有名にならなかったんだ？」

久「それは彼が取材拒否してるからよ、だからあんまり有名にならなかったのよ、まあ彼目当ての部員は何人かここに來たけどいい事が分かったら辞めていったわ」

咲「そうだったんですか」

久「ええ、じゃあ今日はもう遅いからここで部活を終わりにしましょうか」

そうして今日は部活を解散した。

## 第二局

風音が復帰した翌日、風音と染谷以外の部員が部室に集まっていた。

久「はいちゅーもーく。タコスくつてる子も寝てる子も集まれー」

ホワイトボードのに皆が集まっていく

京太郎「何そのペンギン？」

和「マイ枕です」

久「というわけで来月頭に県予選があります。これはルールと県強豪校の牌譜、パソコンにも入ってるから目を通しておくように」

優希「PC使うじえ」

咲「全員で10万点もち」

京太郎「5人で交代？なんだこれ」

久「質問は後で確認して置いて」

トントンとドアがノックされ風音が入ってきた

風音「部長遅れました。頼まれてた注目選手の情報です」

久「ありがとう。福路君の情報は信用出来るからね」

風音「褒めても何も出ませんよ」

優希「む・・・ちよっ訳わかんないんですけどけどこの人」

風音「どれどれ」

風音がパソコンをのぞき込む

風音「ああ・・・龍門渕の天江さんね」

久「そんなに驚かないのね」

風音「まあ去年東京で打ってますから、お互い本気で打ってはいませんが」

久「そうだったの」

風音「その時の牌譜もファイルの中に入ってますよ」

優希「咲ちゃんより変だじよ」

風音「たしかに去年の県予選でねえ・・・6年連続県代表の風越高校が去年は決勝で

龍門渕に惨敗したからな」

優希「だが今年はのどちゃん擁するうちの1年がそいつらを倒す」

京太郎「咲もいるしな」

風音「・・・」

京太郎「そういえば染谷先輩は来ないんですか？」

風音「あー忘れてた」

久「まこの家は雀荘なんだけど今日はバイトが病欠で人手が足りないらしいのよ」

風音「とうわけで、宮永さんと原村さんで行ってきて」

京太郎「部長と先輩は行かないんですか？」

風音「少し用があるから」

久「学祭の準備とかあるから」

風音「宮永さん達も部員以外の打ち方を見るのも勉強になるから」

久「県予選に向けての特訓ってことで」

咲と和が雀荘に向かってしぼらく経った

京太郎「はああいつら大丈夫かな」

風音「なに？宮永さん達のコスプレが見たかったのか」

優希「まあ心配ごむようだじえ、あの二人なら雀荘でも勝ちまくってるじよ」

京太郎「だな」

風音「それはどうかな」

久「それじゃ特訓にならないでしょ。知り合いのプロがああ雀荘の常連でね2人をへ

こませてっつてお願いしてるの」

風音「まあそういう事だあの二人はたぶんボコボコにやられてるんじゃないかな」

京太郎「そんな」

風音「それに部長には悪いですけど今のままじゃ県予選の決勝までに行けたとしてもそこで負ける」

優希「そんなのやってみなきゃわかんないじえ」

風音「わかるよ、去年だけど決勝に来そうな学校のエース達と打った。それから今までの時間で成長したと考えるとうちが勝つのは少し難しいかな」

京太郎「今のまま行ったらどうなると思うんですか？」

風音「そうだな・・・今うちで対抗できるのは少なくとも3人、部長、染谷、宮永さんかな片岡さんも当たる相手によっては封殺される」

優希「のどちゃんは？」

風音「本人には言わないで置いてね。今の彼女は打ち方が中途半端すぎてスキがありまくりなんだよ。昨日初めてあつて対局した俺でも分析できたくらいに」

久「勝てないのは今のままならつてことでしょ」

風音「そうですね。それに少ないですが時間はありますしね」

久「なら勝てないと決まったわけじゃないわ」

風音「そうですね。俺もできる範囲で協力はしますよ」

風音「用を済ませてきます、終わったら戻ります」

久「よろしくね」



風音が部室を出る

京太郎「福路先輩って結構きついこと言いますね」

久「まあ彼はああいう性格の子だから」

優希「でも部長よくあれだけ言われても怒らなかつたじえ」

久「確かに普通の子が言うなら怒ってたからもしれないけど全国を4回制してる彼が言うことだもの悔しくて納得してしまうわ」

京太郎「そういえば福路先輩、情報を持ってきたって言ってましたけどそこに決勝に来そうな学校の選手も載ってるんですか？」

久「ええさつき軽く目を通したけど流石と言った感じだったわ」

優希「そのファイル見てみるじよ」

京太郎「俺も見る」

久「そのファイルに書かれている決勝予想にはうちを含めた3校の名前がある1つ目は龍門渕高校、2つ目は風越高校、だけど決勝の最後の相手は確定ではないけど候補に鶴賀学園って所が筆頭みたい」

京太郎「なんでそんなに分かってるのですかね」

久「福路君の分析能力はすごいからね」

優希「おー風越の福路って人福路先輩にそっくりだじえ」

久「どれどれ・・・わっほんとにそっくりね姉弟なのかしら」

京太郎「横に並んで姉妹って言われても不自然じゃないですよ」

優希「そういえば福路先輩って女子みたいな顔してるじゃえ」

京太郎「あと身長が低いからな」

久「それ本人の前でぜつたい言っちゃダメよ。前に1度言ったことがあるんだけど物凄いで睨まれて私がちゃんと謝罪するまで口も聞いてくれなかったわ」

京太郎「そつそんなんですか」

久「普段怒らない人って怒るとものすごく怖いのよ。あの時の目は忘れられないわ」  
京太郎「あつもうこんな時間だ。俺今日は帰りますね」

優希「部長さよならだじゃえ」

久「気をつけて帰るのよ」

しばらくすると部室のドアがあいた

風音「部長用を済ませてきました」

久「ありがとう福路君。そういえば福路君ってお姉さんいたりする？」

風音「いきなりどうしたんですか？ああそういうことですねいますよ風越に」

久「やつぱりでもどうして風越に行かなかったの？スカウトもきてたんじゃない？」

風音「スカウトは来てませんよ、中学では評判悪かったですから俺は」

久「そうだったの今のあなたからは想像出来ないわ」

風音「別に不良だったわけじゃないですよ。監督が変わってからやり方がめちゃくちゃ気に入らなくて反発してたら干されたんですよ」

久「意外ね、じゃあそれが原因で風越に行かなかったの？」

風音「それもありますけど一番は姉と比べられることに嫌気がさしてたんですよ……でも勘違いしないでくださいね姉とは仲はいいんです」

久「周囲の人の影響ってわけか」

風音「それで両親も俺と姉を毎回比べて来たんで中学最後に爆発して反発して大喧嘩したんですよ。それで高校進学と同時に一人暮らしをはじめたんですよ」

久「それで御両親とはどうなったの？」

風音「今日はめっちゃくちや聞いてきますね。まあ和解しましたよたまたまに母が様子を見に来ます。」

久「聞いた理由としては知りたかったからかな」

風音「知りたいとは？」

久「だって福路君自分のことは全く喋ってくれないんだもの」

風音「なるほどまあこれ以上は話しませんけどね」

久「えーいいじゃない」

風音「喋ってもらうにはまだ好感度が足りてませんね」

久「好感度ってほんとにゲームが好きね」

くだらない談笑を部長していると部室のドアが勢いよくあいた

久「おっ雀荘から直帰しなかったの？」

和「部長・・・強化合宿をやりましょう」

久（そうくるとおもったよ）

風音（そこまでよめてたのか部長）

久「合宿ねえそんなこともあるのかと・・・合宿棟を押しえておいたわ」

風音「押さえに行つたの俺ですけどね」

久「そこはかっこつけさせなさいよ」

和（先輩達には私達の考えが読まれていた）

## 第三局

合宿当日移動中のバスの中で風音は自分の個人戦に向けての準備をしていた、男女問わず有力な選手の模倣をする為に牌譜を見ていた。

風音（個人の県予選の一日目なら片岡さんの模倣だけでなんとかなるかな）

咲「福路先輩」

風音「何？宮永さん」

隣に座っていた宮永さんに声をかけられる

咲「さつきからずっと何見てるんですか？」

風音「これ？これは俺がまだ戦った相手の牌譜をまとめたノートだよ」

咲「へえー、いつも牌譜見てるんですか？」

風音「そうだね、一応自分が打った対局はできるだけ全部牌譜にしてるよ」

咲「見てもいいですか？」

風音「良いよちょうど読み終わった所だしね宮永さんにも有益な情報があると思うよ」

咲は受け取ったノートを見ていくと自分の名前と姉の名前があることに驚いた。

咲「えっ？」

風音「どうしたの？ああ自分のページがあったことに驚いたのか」

咲「はい。はじめて打ったあの日から何回か打ってましたけどいつも先輩には勝ててなかったのよ」

風音「勝った負けたではそのノートには入れないよ。それはあくまでも自分が模倣するかもしれない選手の情報がまとめてあるからね」

咲「それって」

風音「俺が模倣するのはそれを使えば自分の勝率が上がるとおもった相手しか模倣しないからだから自分の打ち方に自身を持っていいよ」

咲「ありがとうございます。あと私の前のページの」

風音「ああ宮永照さんか」

咲「先輩はお姉ちゃんと打ったことがあるんですか？」

風音「あるよ去年のインターハイの団体を見に行つた時にね白糸台から練習試合の申し込みが俺個人にあつたんだ」

咲「お姉ちゃんどうでしたか？」

風音「とつても強かつたよ、今まで戦ってきた中で一番とっていいほどに・・・なるほど宮永さんあの人の妹だったのか」

咲「はい・・・たぶん嫌われてますけどでも麻雀を通してならお姉ちゃんと話せる気がするから」

風音「なるほど仲直りできるといいね。なおさら県予選頑張らないとね」

咲「はい」

風音「ほら合宿着いたよ」

バスが泊まり皆部屋に荷物を置きに行った

男子の部屋は俺と須賀くんのみ

風音「じゃあ須賀くん下いくよ」

京太郎「えっ？なんでですか」

風音「雀卓運ばないと・・・それともあんな重いもの女子に運ばせんのか？」

京太郎「いいえ」

そっくり2人で下にいき雀卓を協力して運ぶ

京太郎「そういえばバスの中で咲と何話してたんですか？」

風音「ああ麻雀についてかな俺のノートを見せてそれについての質問とか色々ね」

少しばかり教えてた

京太郎「そうだったんですか。あと俺にもそのノート見せてもらってもいいですか？」

この前の先輩のファイルの情報すぐくわかりやすかったんで」

風音「別にいいよ」

京太郎「ありがとうございます。福路先輩」

風音「ほらもうすぐ部屋つくぞ」

そして部屋に雀卓を置いて一息つく

久「ありがたいね二人とも、それじゃあ合宿所に着いたことだし」

優希「さつそく特訓打ちか？」

久「まずはやつぱり温泉よねー」

まこ「誰にいつとるんじゃ」

久「須賀くと福路君には悪いけどここに混浴はないわ」

風音「期待してませんよ」

京太郎「混浴・・・グヘヘ」

隣で京太郎が気持ち悪いにやけ方をしていた

風音「じゃあ部長行つてきますね、行くぞ須賀くん」

京太郎「はっはい」

風音（風呂気持ちよかつたなー）



部屋に戻ると宮永さんと部長がいた

風音「皆は？」

久「まだ入ってるわよ。福路君その目」

咲「先輩目が」

風音「目？ああカラコン入れ忘れてた」

久「カラコン？」

咲「どうしてカラコン入れてたんですか？」

風音「まあオツドアイなんてあんま見ても見られてもいい気はしないからな普段はカラコンで隠してるんだ」

咲「でも先輩って目綺麗ですよね」

風音「そうかな」

咲「はい、はじめて見ましたけど吸い込まれそうなくらい澄んだ青で綺麗です」

風音「あつありがとう」

久「これだと宮永さんが福路君を口説いてるみたいね」

咲「わつ私はそつそんなつもりじゃ」

風音「部長あんまりからかつちやダメですよ。皆ももうそろそろ来る頃ですし準備しますか」

久「そうね」

そして部員の全員が部屋に集まった

久「今回の合宿のテーマは新一年生の実力の底上げ。あなた達には今度の大会で活躍してもらうためよ」

風音「まずは片岡さんにはこれ」

優希「なにこれ」

風音「算数のドリルだよ」

優希「ええー」

風音「これを1日1冊解くこと」

優希「えーなんでこんなの」

まこ「あんた点数移動計算ダメすぎるけんね」

久「団体戦では互いの点数の把握が重要だからね」

優希「わかったじよ」

久「次は和ね」

久「あなたはネット麻雀では長期スパンで高いトップ率を取る理詰めの打ち方ができてるわ。でもリアルでの対局ではネットほどの成績を出せていない。その場の勢いに流されたり、ミスが目立ったり」

まこ「この前の雀荘でもそうじゃった、プロが相手でも本来のわれの實力ならもつと前線できたはずじゃ」

久「これは私の推測だけど、ネットにはないリアルな情報に惑わされてるのかも」

和「情報ですか」

久「咲や福路君の存在とか」

和「なっ」

咲「？」

久「リアルにしかない動作や情報に耐性を付けるのはどう？例えばツモ切りの動作。ゲームにはないその動きだけでも思考が鈍っているのかもしれないそれらの動作を無意識にできるようになるまで特訓してみるとか」

和「わかりました」

久「逆にリアルな情報から読み取るからこそ強い人もいるわ宮永さんや福路君はたぶんそうね。普通じゃ見えてないものが見えてそう。」

風音「まあそうですね」

久「宮永さんは逆にリアル牌を使わないネット麻雀で色んな人と打ってみなさい」

咲「ネット？わっ私パソコンとか持つてなくて」

京太郎「マジで」

久「風音君持ってきてくれた？」

風音「はい昨日突然使ってないノートパソコン持ってきてって言われた時はびっくりしましたよ」

久「福路君が持つてきてくれたパソコンを使うといいわ福路君教えてあげて」

風音「わかりました」

久「じゃあはじめましょうか」

京太郎「おっ俺は？」

久「須賀くんは特にないわ」

まこ「おんしはまだ下手でめっちゃくちゃなんじゃ」

風音「強いて言うなら合宿中は打ち続けることかな」

京太郎「はい」

こうして合宿がスタートした

### 合宿2日目夜

久は夜道を散歩していた。そこで風音が1人で歩いてるのを見た。少し風が吹いていたので風音の金髪がや揺れており月明かりに照らされていた。

風音「あれ？部長どうしたんですか？」

久「散歩してたのよ、福路君は？」

風音「俺も散歩ですよ」

久「なら一緒に合宿所に戻りましょうか」

風音「そうですね」

2人で合宿所の方に歩き出す

風音「良かったですね」

久「なにが？」

風音「有望な1年生が入ってくれて合宿の効果もあつて皆レベルアップしているし」

久「ここら辺で麻雀やる子はあなた目当てでここに入るか風越か龍門渕に行くからねえ。今年も期待してなかったんだけど」

久「4人も入ってくれた。」

風音「今の1年生3人だけでも確実に県ベスト8には行けますから」

久「何言ってるの、私は今年が最後・・・負けたら終わり全国優勝の夢くらい見させてよ」

風音「そうでしたね。チームで全国に行く事の素晴らしさを俺に教えてくれるんでしたね」

久「そうよ、今年はおなただけじゃなくて皆で全国に行くんだから」

話しているうちに合宿所の部屋の前まで来ていた

風音「では部長おやすみなさい」

久「福路君もおやすみ」

## 第四局

県予選前日の夜

携帯がなった

風音「もしもし」

美穂子「もしもし風音の携帯ですか？」

風音「俺の携帯にかけてきたんだから俺しか出ないだろ姉ちゃん」

美穂子「それもそうだね」

風音「それでなんか用」

美穂子「最近そつちに行けてなかったから元気かなって思ってた」

風音「元気だよ、それに姉ちゃんにとっては最後のインターハイだろそつちを優先し

てもバチは当たらないよ」

美穂子「ありがと風音」

風音「まあ俺が言うのも変だけど頑張ってた」

美穂子「風音も個人戦頑張ってたね、それじゃあおやすみなさい」

風音「おやすみなさい」

そういう電話を切った

風音「悪いけど姉ちゃん……姉ちゃんのインターハイは長野で終わるよ」  
そう眩き眠る

翌日県予選会場

和「いつも時間を守ってる先輩が珍しいです」

優希「きつと寝坊だしえ」

まこ「たぶん優希の予想が当たつとるのお」

久「彼かなり朝弱いのだよ。まあ自分の試合なんかの時は絶対寝坊しないのよね」

まこ「軽くタチが悪いからのお」

京太郎「あつ風音先輩からLINEだ」

風音「電車の遅延にあい今会場近くの駅についた」

京太郎「遅延だそうです」

久「須賀君いつ福路君のLINE貰ったの？あと名前呼びして」

優希「怪しいじえ」

京太郎「合宿の時ですよ同じ男子同士ですし苗字呼びはなんかやだったんで」

久「確かに2日目から名前予備だったような」



まこ「それに練習時間外にあいつと練習しとったしなあ」

京太郎「その成果は個人戦で見せますよ」

入口近くが騒がしくなる

モブA「風越高校だ！」

モブB「去年は県予選準優勝」

モブC「部員80名を擁する強豪！」

モブD「キャプテンの福路美穂子だ、去年の汚名返上できるのか」

美穂子「いつまで言われるのかしら、あら？」

風越が来た時よりも歓声が大きくなる

モブA「龍門渕高校が来たぞ」

モブB「去年の県予選優勝校！」

モブC「井上 純！」

「沢村 智紀！」

「国広 一！」

「龍門渕 透華！」

優希「すごい歓声だじえ」

久「そうね」

まこ「それにしてもあれがあいつの姉かあすごい似とるのお」

優希「そうだじえ」

久「それに福路君も着いたみたいよ」

長野2 トップの登場で会場で歓声が上がっていたが次第にかかるくざわつきはじめた

モブA「あれって確か」

モブB「去年の男子個人インターハイ覇者」

モブC「福路風音！」

モブA「でもなんで福路が女子の会場にいるんだ？」

風音が歩いていると姉と目があつた

風音「久しぶり姉さん」

美穂子「久しぶりね風音」

風音「じゃあ行くから」

美穂子「そうねまた今度」

風音は皆がいる所に急いだ

風音「すいません遅れて」

久「珍しいわね寝坊以外で遅刻なんて」

風音「少し記者に絡まれました」

和「そうだったんですか」

風音「そういえば宮永さんは？」

京太郎「咲は迷子です」

風音「当たり前前みたいに言うね、じゃあ探してきます」

久「ありがとうよろしくね福路君」

風音は咲を探しに行った

透華「風音さん私たちよりも目立ってますわ」

一「まあ風音君は色んなことで有名だから仕方ないんじゃない？」

純「そんな事より衣はどうしたんだ？俺昨日あいつの部屋に目覚まし5つもセットしてきたんだぞ」

一「うわあ」

龍門渕の4人の前を清澄の迷子が横切ると4人は自分の学校のエースと同じ感じがしたので振り向く

智紀「清澄高校の制服」

純「清澄って風音がいる所かってことはあれが原村和か？」

透華「いえ原村和はもつと胸のあたりに無駄な脂肪がついた感じですよ」  
一「衣に似た空気を感じたよ」

純「・・・まさかな衣みたいのが他にいてたまるか」

透華達が歩き出してしばらくしたあと声をかけられる

風音「お久しぶりです皆さん」

透華「久しぶりですわ風音さん」

風音「すいませんがうちの女子がこつちを通りませんでしたか？」

純「清澄の女子ならさつきあつちに向かつていったぜ」

風音「ありがとうございます、天江さんは？」

透華「衣なら寝坊ですわ」

風音「そうですか、天江さんにもよろしくと伝えて置いてくださいそれでは」

純「なあ風音質問いいか？」

風音「なんですか？」

純「さつきすれ違った奴は一体なんなんだ」

風音「えつと長野で天江さんに最も近い存在の女子ですかね」

風音から言われた一言で龍門渕のメンバーに電流が走った

風音「質問はそれだけみたいですね、それでは」

お辞儀をして風音は去っていった

咲が行った方向に足を進めていると咲が皆と合流していた

風音「宮永さん戻ってたんですか」

久「あつ福路君ありがとね」

咲「ごめんなさい福路先輩」

風音「いや別に構わないけど」

久「心配したわ女装した福路君か須賀君を出すことになるかと思つて」

まこ「福路の女装なら大丈夫じやろうが須賀の女装には無理があるのお」

咲「あれ？原村さんは？」

和「やつと解放されました」

咲「すごいよ原村さん強そうな人達がいっぱいいてワクワクするよ。早くあの人たち

と打ちたい」

風音（その殆どが強そうに見えるのだけって言うのは黙っておくか）

久（みたいなこと考えてる顔してるわね福路君）

久「全国制覇に向けてこれが最初の試合です気合い入れていきましょう」

一同「はい」

風音「じゃあ登録しだオーダーを発表するよ」

「先鋒・片岡優希」

「次鋒・染谷まこ」

「中堅・竹井久」

「副将・原村和」

「大将・宮永咲」

咲「わつ私が最後ですか？」

久「合宿の結果とか色々含めてシミュレーションした結果私も福路君もこの順番しかないと思ったのよね」

風音「まあ後半になるほど点差のせいで自由に打てなくなるけど、トビ終了もあるから」

風音（あからさまに落ち込んでるな）

優希「てことは先鋒に強い選手を置くのがセオリーすなわち我最強」

風音「片岡さんは点数計算が出来ないからだよ」

風音「今日の午前には58校が16校に絞られ午後さらに4校に絞られる、そして明日が決勝というわけ」

咲「たくさんいるねー」

和「中学の時よりずっと多い」

まこ「激戦区の大阪に比べれば3分の1もないがのう」

「1回戦の相手ぬるいな」。清澄・東福寺・千曲東だつて」

「らくしよーじゃん」

咲・和「!」

「清澄つてあれでしょ福路風音と原村なんかの!」

「結局は福路風音しかない学校でしょしかも福路は男子だからこの大会には出れないし。さつき原村が記者相手に全国優勝とか言つてたの見た」

「ありえないつて!ちよつと胸が大きいからつてチャホヤされてるだけでしょ」

咲「原村さん……」

風音「結構なこと言つてくれるね彼女達」

咲「福路先輩まで」

風音「それで原村さんどうする?」

和「大丈夫ですよ……1回戦頑張りましょう」

咲「う……うん」

アナウンス「あと10分で1回戦が始まります各校の先鋒は対局室に入室してください」

優希「ついに主役のでばんだじえ」  
そうして県予選が始まった



## 第五局

1回選が終わり清澄のメンバーは昼ごはんを食べに食堂にきていた。席は俺と京太郎がとつておいた。

久「1回戦突破を祝してそして2回戦目指して乾杯！」

一同「乾杯！」

優希「しかし咲ちゃんにはおったまげだじよ東福寺をトバして終わらせちゃうなんて」

咲「皆がたくさん削ってくれたから」

和「大将戦開始時、東福寺の点数は46800点残ってました。」

咲「あははは・・・」

風音「お疲れ様」

京太郎「さすが咲だな」

咲「今日は知らない人打ってていっぱい緊張したけどホントに楽しいよもっと強い人と打ちたい」

清澄が昼ごはんを食べている所に1人でやってきた

藤田「やあ2回戦進出おめでとう」

まこ「藤田プロ！」

モブA「おいあれ藤田靖子じゃねえ」

モブB「おつまじだ」

モブA「藤田プロが話し掛けてるのって・・・清澄高校！」

咲「カツ丼さん」

和「いつか倒します」

久「有名人がこんなところで油売ってていいの？」

藤田「そこのお二人さん雀荘の時と違いすぎるまるで別人10日間でどんな魔法を

使ったんだ？」

久「はてさて・・・誰かさん達にヘコマされたのが余程聞いたんじゃない？」

藤田「達？・・・だが午後の2回戦に勝って決勝に進出しても龍門渕と風越にあたる。

天江は強い・・・風越も今年はベストメンバーだ初戦のようには行かないだろう」

咲「そんなに手強いんですかその2校」

風音「宮永さん落ち着いて」

咲「はい。すいません」

藤田（この娘）

アナウンス「まもなく2回戦を開始します。各校のせんさは・・・」

久「よし、いこうか」

一同「はい」

咲「失礼します」

藤田「久福路君を少し借りてもいいか？」

久「いいわよ」

藤田「少し話をしないか福路君」

風音「いいですよ」

藤田「彼女が大将なのが残念だ・・・決勝で天江に壊されかねない」

風音「そこは大丈夫だと思いますよ・・・まあ壊されたらそれまでの選手だったって

ことですし」

藤田「チームメイトだろう心配はしないのか？君も分かっているんだろう」

風音「心配はしてませんよ、以前の宮永さんなら壊れてたでしょうけど今の宮永さんなら大丈夫ですよ」

藤田「理由はあるのかい？」

風音「俺と打つてても壊れなかったからですかね・・・まあ本気は出してませんが」

風音はオーラをだして言った

藤田「・・・そういうことか確かに君クラスの選手と打っているなら耐えられそうだもうこんな時間かすまないひきとめたりして」

風音「大丈夫ですよ、では失礼します」

藤田（やはりすごいな風を操る天才、100の技をもつ男と言われるだけある）

4時間後

実況「2回戦H卓終了！」

「圧勝！風越高校！」

「伝統の風越がかえってきた!!」

「風越すげー!!去年3位の城山商業に快勝だ！盤石鉄板!!」

池田（もつといつてもつと）

「この5人は歴代最強かもしれない！今年は龍門瀧もあぶねーぞ」

美穂子「明日も今の調子で頑張つてね」

池田「はい」

5人は控え室に向かいミーティングをする

そこで美穂子がコーチに平手をくらい叱られていた。

久保「なんださっきの試合はキャプテンのお前が生ぬるいから下があんな打ち方する

んだ!!」

ざわざわ

久保「池田アアツ」

池田「はっはいっ」

久保「てめえさっきの(⑦)はなんだ!!相手がちよろかつたから良かったものあのあんな腑抜けた打ち方が全国で通用するわけねーだろ!!」

池田「うう」

久保「おまえ去年もそれでシクつたよなア?お前が倍満振り込んで風越の伝統に泥塗つたの忘れたのかよ」

美穂子「やめてください」

久保「ああ?」

美穂子「彼女のミスは私の責任です。殴るのは私だけにしてください。」

池田(キャプテン)

美穂子「池田は校内ランキング2位OBとの練習試合でもトップ率31%を出しています、先程の打ち方も点差を考慮すれば最善かと思われまます。彼女は1年間自分を責め続けてきたはずですよ。私はこの子を誇りに思ってますから」

久保「ちつ帰ったらみつちりミーティングだからな」

池田「キャプテン！」

池田が美穂子に抱きつく

美穂子「……他の3校は？」

吉留「え……」

美穂子「他の3校は決まった？」

吉留「あつはい龍門渕は副将戦で篠ノ井西をトバして勝っています、あと上がったのは鶴賀学園と清澄高校というところですよ」

美穂子「龍門渕は勝ったのね良かった」

吉留「良かった？」

美穂子「龍門渕が勝ち上がってくれないと直接リベンジできないでしょう。コーチにも龍門渕にも見せてあげましょう。私達が最強だということよ」

美穂子「すごいわね……」

池田「何がですか？キャプテン」

美穂子「えつとねこの結果を私ずっと前に聞いてたのよ」

池田「どういうことですか？」

美穂子「決勝に何処がくるかの予想を弟に聞いたのよ……弟が言った通りになつたわ」

吉留 「キャプテン弟さんいたんですね」

池田 「その弟って朝話してた。福路風音ですよ」

美穂子 「ええそうよ、あの子のいる学校が決勝にくるとは思ってたけどもうひとつの  
枠まで当てるとは思ってなかったの」

吉留 「すごいですね」

美穂子 「だから風音にも教えてあげてるの私達が最強だということ」

池田 「そうですねキャプテン！」

美穂子 (風音悪いけどあなたの予想はここで外れる、いや外させてもらう)

とあるラーメン屋台

「ほいチャーシュー」

久 「私の奢りだから決勝に備えてたつぶり食べてね」

咲 「いただきます」

和 「・・・」

優希 「美味しそうじゃー。のどちゃんはラーメン初めてか？」

和 「ら・・・ラーメンくらい知ってます」

優希「おやじおかわり！」

和（おいしい）

まこ「みんな思うたより緊張しとらんのお」

風音「そうですね」

久「今はね、私は今夜あたり部屋の隅で膝を抱えて震えるわ」

風音「想像できませんね」

久「あらこれでも繊細な女の子なのよ」

風音「そうでしたね」

久「あらか言いたそうね」

風音「いえ別に」

優希「おやじ！タコスラーメンを作れ！」

「タコはねえなあ」

そうして部長奢りの夕食会は終わった。

久「じゃあ私たちはこっちだから」

風音「皆さんまた明日」

まこ「きいつけてかえりー」

優希「部長送り狼には気おつけるじえ」



咲「さようなら」

和「さようなら」

そうして2人は別れた

咲「部長と福路先輩って仲いいよね」

まこ「なんじゃあ咲われ福路のこと気になつとるんか？」

和「そうなんですか？宮永さん」

優希「顔が赤いじえ」

京太郎「どうなんだよ咲」

咲「そつそんなことないよ……でも福路先輩って部長といる時なんか雰囲気違うつて言うか」

まこ「まああの2人は色々あつたからのお」

和「そうなんですか？あんまり2人はの間で問題なんて起きそうにないですけど」

まこ「福路は一年前は今よりとつつきにくかつたからのおそんな色々あつたんじゃ」  
優希「今よりとつつきにくいつて想像できないじよ」

京太郎「何があつたんですか？」

まこ「わしは詳しいことはわからんから本人達に聞いてくれ」

咲（福路先輩と部長が仲良くしていると時々なんかモヤモヤするよ……なんでなんだ

ろそれに何があったか気になるし)

その頃別れた2人

久「そういえば合宿の時宮永さんに何か教えてなかった？」

風音「ええ、教えましたよ」

久「何を教えたのかしら？」

風音「まあどうしてそんなに強いのかと聞かれたので」

久「なんて応えたの？ 福路君は」

風音「わからないと応えましたね」

久「わからないって？」

風音「自分の能力に気づいたのが中1になってすぐでした、でも俺の中ではあまり強いと感じたことがないんですよ」

久「福路君がやってることはすごい事だと私は思うけど」

風音「すぐくなんかありませんよ。所詮俺のやってることは猿真似なんですよ、自分の力じゃないそれをいくら重ねても何も感じないんですよだから」

久「わからないと応えたのね、それに男子で福路君に着いていける選手がいらない」

風音「良くわかりましたね次の言葉が」

久「1年間一緒にいたんですもの少しは考えくらい読めるわ、それに私はあなたの能

力をただの猿真似とは思ってないわよ」

風音「えっ」

久「もうひとつの能力を入れなくても、あなたがやる模倣はオリジナルの技に何かを加えることで昇華させてる。それはもうあなたの技だといっていいんじゃないかしら」

風音「そうですか」

久「ええだから私があなただつたらこう応えるわ模倣したものをそのままにせず自分の技術を加えて昇華させてるから今みたいになつたつてね」

風音「・・・」

久「あなたが少しネガティブ思考なのはわかってるからこの考えを押し付ける気はないけどね」

風音「ありがとうございます部長・・・宮永さんに言われて少し考えていたので少し楽になりました」

久「そう？なら何かお礼が欲しいわね」

風音「そうですね、今度何かご馳走しますよ」

久「期待してるわね」

そして2人が別れる場所に差し掛かる

久「私はこっちだからじゃあね福路君」

風音「はいまた明日」  
そして2人は別れ帰宅していった

## 第六局

県予選決勝がはじまった。試合前に純さんが片岡さんのタコスを食べてしまい姉ちゃんが弁当をあげていた。現在は前半戦が終わった所だ。

風音「やっぱり片岡さんは鳴きに弱いですね」

久「龍門渕の先鋒の不可解な鳴きは優希の流れを止めるためだって言うの？」

和「流れなんてそんな非科学的なものある訳ありません」

風音「確かに原村さんはそう思ってるのかもしれないけどそれを信じてる人もいるから」

和「そうですね、言いすぎました」

風音「今後の課題ですね、それに京太郎のタコスが間に合ったみたいですし。」

咲「これでなんとかなるかも」

風音「たぶんそうはいきません。」

咲「えっ？」

風音「あの卓で一番注意しなくてはならないのは片岡さんでも純さんでもない……風越の福路つまり俺の姉です」

久「と言うと後半に仕掛けてくるってことかしら？」

風音「はい。たぶん優希を使って龍門淵をけづり最後の最後で捲るつもりでしょうね。軽く助言はしましたがたぶん忘れてるでしょうし」

### 対居室

優希（京太郎のタコスのおかげでパワー全快だしえ、前半戦はいいようにやられてたけど後半はそうはいかないじえ）

アナウンス「後半戦を開始します」

優希（いくじえ）

### 控え室

咲「優希ちゃんが東場で全く上がれないなんて」

風音「完全に純さんに流れを持っていかれた感じだね」

そして南場に入った時、片岡さんが椅子で一回転した

風音（気合いでも入れ直したのかな）

そこから優希はあがりはじめただがそれは風越のアシストがあったからだ、そして風越もいい感じにあがり点数を稼いでいる。

風音「片岡さんそろそろ気づかないと、そこに味方はいないことに」

その風音の願いも虚しく最後は風越に3校は大差をつけられ先鋒戦が終了した。

風音（くなり悔しいだろうな）

風音「宮永さんと原村さんの出番はまだかなり後だから仮眠室で休んだ方がいい」

和「先輩達の試合があるのに私達が寝てるなんて」

久「いや眠い状態で腑抜けた打ち方されるよりはマシよ、それに私達に任せておきなさいって」

控え室に片岡さんが入ってきた

和「・・・宮永さん行きましょう」

咲「はっ原村さん？」

2人は仮眠室に向かったその道中

咲「どうしたの原村さん突然行こうなんて言い出して」

和「あそこに私達がいれば優希は泣けない、優希は気が強い子だから。私達があの部屋からであればあそこには先輩しかいなくります」

咲「だから部長も福路先輩私たちに言ったのかな」

和「たぶんそれもあると思います」

そして仮眠室につき仮眠をとった

控え室では

風音「じゃあ俺も出ますね、少し風にあたつてきます」

久「わかったわ」

風音も控え室からでていった

風音（部長達が少し羨ましいな、もしあの事が起こる前に部長達と逢えていたなら変わつのかもな）

風音が感傷にふけていると何回か名前が呼ばれた

「風音君」

風音「ん？桃か」

桃子「ひどいっすよ、風音君さつきから声掛けてるのに気づいてくれなくて」

風音「悪い悪い少し考え事しててな」

桃子「そうなんすか、珍しいっすね風音君が考え事なんて」

風音「失礼だな、俺にも考えることくらいあるよ」

桃子「何考えてたんすか？まあだいたい想像つくっすけど」

風音「まあ今考えてることはifだから考えるだけ無駄だからな」

桃子「そうすっね、結局それを考えた所で何か変わる訳じゃないんですから」



風音「そうだな、それにしても久しぶりだな」

桃子「そうっすね、1年ぶりくらいっすよ。それに風音君が麻雀まだやってるって知って嬉しかったっす」

風音「俺はお前がここに居るのが驚きだよ、俺以外に桃をみえる奴がいたとはな」

桃子「今の部長が私を見つけてくれたんっす」

風音「良かったな」

「桃待たせて悪いな行くぞー」

遠くから桃が呼ばれていた

桃子「はいっす、じゃあね風音君」

桃は自分を読んだ先輩の元にかけて行った

風音「さてと俺も戻りますかね」

控え室に向かつて歩いていったその途中にアナウンスがなる次鋒後半戦終了です

風音「かなり終わるのがはやいな」

掲示板を見て清澄の順位を見る

風音「最下位だと・・・鶴賀か」

風音は中堅戦が始まる前に対局室に急いだ

久「さて皆に任せてと言ったからには頑張らないとね」

風音「部長！」

久「あら福路君どうしたのあわてて」

風音「いや部長には何も言つてなかつたんで」

久「あらなにをいつてくれるのかしら」

風音「部長！あんまこういうこと言うの柄じゃないけど絶対1位で戻つてきてください！待つてますから」

久「嬉しいこと言つてくれるじゃないじゃあ頑張つてくるわね」

風音は部長を見送った

## 第七局

風音（さてと姉ちゃんももうそろ気づいたかな・・・うちの中堅が3年前のインターミドルで自分を苦しめた上埜久だってことに）

同時刻

文堂を送り出した控え室

美穂子「清澄の竹井久って・・・上埜さん！」

吉留「？」

美穂子（やつぱり！苗字は変わってるけど間違いないわ。3年前のインターミドルで私を苦しめた人）

美穂子「この事を言っていたのね風音は」

美穂子（文堂さん・・・彼女とまともにぶつからないで！）

対局室

久（さてと福路君にもああ言っちゃったしみんなの為にも頑張りますか）

県予選決勝中堅戦前半戦

東一局

親番蒲原

ドラ表示牌（九万）

蒲原：112000

竹井：69400

国広：77800

文堂：140800

久手配

（二万五万三索八索九索九索①④④⑦⑧発北）

ツモ（⑤）

久（微妙な手・・・配牌五向聴から和了れる確率はどれくらいだったかな）

〔北〕捨て

久（和ならそういうの効率よく打てたり考えたりできるんでしようけど・・・私らしくないな自分のやり方で自分らしくいきましよう！）

7 巡目

久手配

（五万三索八索九索九索九索④④④⑤⑥⑦⑧）

ツモ (三万)

久 (二万) そばの (二万) 切っちゃってるし・・・これで (一万引いたらなくわね)

(三索) 捨て

8 巡目

久手配

(三万五万八索九索九索九索④④④⑤⑥⑦⑧)

ツモ (二万)

久 (ドラ・・・完全に裏目った! いやこのツモに意味があると考えましょう)

(八索) 捨て

9 巡目

久手配

(一万三万五万九索九索九索④④④⑤⑥⑦⑧)

ツモ (四万)

久 (きた!)

久 「リーチ!」

(横⑧) 捨て

透華「なっ」

純「五門張を捨てて単騎かよ」

美穂子（自ら悪い待ちにする打ち筋・・・変わってないわ）

実況「清澄高校竹井久！中堅戦最初の先制リーチです！」

風音（部長がリーチをかけたかあの中で振り込まなさそうなのはいいかなまあ後半戦はわからんけど）

文堂（聴牌！（一萬）切りで追っかけリーチをかければ安めで5200・・・捨牌か  
らしてあるとすれば単騎待ちしかも地獄単騎!!）

文堂（この人はわざと悪い待ちにする局面が多かった・・・いや他にも悪い待ちはた  
くさんある!）

文堂「通らばリーチ!!」

（横一萬）捨て

美穂子（ダメ）

久（通らないなロン）

裏ドラ（九万）

久「リーチ1発ドラ4 12000」

蒲原「その手で⑧切りリーチで」

一（なんだこの人・・・バカなのかそれとも衣に近い生き物なのか？）

その頃

藤田から和のペンギンを受け取った衣は走っていた

衣「もーすぐお前のご主人様の所に連れてってやるからなー」

衣（衣もきつとすつごく褒められるまさに一石二鳥）

衣「それがきつかけで友達ができたりして」

衣はエトペンをもってかけていく

「いた」

「ちよつとそこの子供」

衣「？」

衣「子供じやない衣だ！」

「ん？ああはい」

(なんか見たことあるなこの生き物)

「なあそのペンギンなんだけどうちのなんだ返してくれないかな？」

衣「えーこれはハラムラノノカのだって聞いたよ」

「さつきうちらがそれ落とすとこ見てなかった？」

衣「・・・？」

「いいから貸させて！」

衣「なにすんのー！離しなさいよこの空気頭！これは衣が持つてくつて決めたんだから」

「よこせて」

風音「やめたらどうですか？」

風音が久の見送りの帰りに通りかかり辞めるように声をかけた

「お前は」

「清澄の福路風音！」

風音「傍から見たら2人がかりで小さい子からぬいぐるみを撮ろうとしているようにしか見えないぞ」



衣「あつ風音！」

風音「久しぶり天江さん・・・どうして天江さんが原村さんのペンギンをもってるの？」

衣「藤田と話してたらこの2人がぬいぐるみを落としてったからそれが藤田が言うにはハラムラーノカのらしいから衣が届けてるんだ」

風音「・・・そうだったんですか。そこのお二人さんはたしか昨日の1回戦でうちにボコボコにされた今宮の方々」

「くっ」

風音「自分達は何をしたか理解してるならさっさとやることをやってきたらどうですか？」

「ああ」

「わかりました」

2人は去っていく

風音「さてと原村さんに渡しに行きますか天江さん」

2人で和を探して歩き回っていた

数分後

衣「ハラムラー！どこだー」

衣が転びペンギンが転がり和の所にわたった

和「エトペン！」

衣「！お前がハラムラノノカだな。風音がピンクの髪の子と言ってたからすぐにかつたよ」

和「福路先輩？聞いていた通り届けてくれてありがとうございます」

衣「え・・・」

和「さつきこのペンギンを盗んだ2人が謝りに来てその時に教えてくれたんです」と後ろから早い足音が聞こえてくる

風音「天江さん突然走ったら危ないだろ少し探したよ」

実況「中堅戦前半戦終了！中堅区間の獲得点数は清澄高校の圧勝だと思われましたが龍門渕高校が少しずつ追い上げ現在4校の点数はほぼ平の横並び！試合はまるでフリダシに戻されたかのようです。」

アナウンス「5分の休憩の後、後半戦を開始します」

風音は衣達と別れ部長の所にいった

風音「部長いい感じですね」

久「そうですねでもそれだけ言いここに来たわけじゃないんですよ」

風音「ええ、後半戦は出和了りしにくくなるので前半戦のこれを生かして威嚇してみるのもいいかもしれません」

久「・・・そうね参考にしておくわ」

風音「じゃあ時間ですのでいきます」

控え室への帰り道

風音は美穂子の前を通り過ぎた

美穂子「風音」

風音「なに姉ちゃん？」

美穂子「風音は竹井さんが上埜さんだってこと知ってたの？」

風音「知ってたよ。入部した時から」

美穂子「そうなの」

風音「姉ちゃんが部長のこと探してたのは知ってたけど当時はそんな話を話す心の余裕もなかったから」

美穂子「そうね・・・でもたとえあなたや上埜さん達が相手でも勝つのは私達よ」

風音「珍しい姉ちゃんがそこまで言うなんてでもねこれだけは言っとくよ悪いけど姉ちゃんの団体は県予選で終わる」

美穂子「……」

風音「勝つのはうちだとはつきり言えないところがあるけど俺が予想している優勝校の中に風越は無いよ」

美穂子「ならその予想を外してあげるわ」

風音「そうそれだけならいくね……まあ少し言い過ぎたよ」

美穂子（昔から風音は一言多いところがあるからねえ。気にするなら言わなければいいのに）

そう言つて風音は控え室に急いだ

風音「ただいま戻りました」

まこ「お前どこ言つとたんじゃ？」

風音「まあ色々とあつて」

中堅戦後半戦はほとんど点数が動かず流局や安手で進んでいったそしてオーラス  
久「リーチ！」

部長がリーチをする場面をモニターでながめる

京太郎「空聴リーチじゃん」

優希「ぶちよー何やつてんだじえ」

風音「部長がそんなミスするわけないだろ。あれは威嚇だよ」

京太郎「威嚇？」

風音「そうあれは和了るためのリーチじゃない！前半戦でやった和了りを利用した威嚇」

まこ「部長が先制リーチをかけたらスジとか字牌が関係なくなるからのお」

そして流局した

実況「中堅戦開始時の順位とはまるで真逆上位と下位の交代劇！特に清澄高校竹井久の活躍には見に見張るものがありました」

和（今から私はあそこに行く）

実況「全国高校生麻雀大会県予選女子団体決勝・・・ついに副将戦を迎えます。まもなく試合開始です」

## 第八局

和が控え室から対局室室室に向かうのを見送った

まこ「和にはなんか言ってやらんのか？」

風音「原村さんには俺の助言は必要ないですよ」

まこ「なんでじゃ？」

風音「今の原村さんの打ち方なら大丈夫だからですよ副将戦の卓にはデジタル打ちの選手しかいませんし彼女には周りに干渉する能力がききませんから」

久「なるほどね。いつも通りに打てば負けないうってことね」

風音「ええ。それに原村さんが自分の試合を見てほしいと思ってるのは宮永さんでしようし」

久「ならなんで私の時にはきたの？まこの時はいつてないじゃない」

風音「染谷が普通に勝てると思ってたんですよ、ですがあそこでやられました鶴賀の次鋒だけはデータがなかったのでそこをつかれました」

久「別にそこつくって鶴賀は自分達が調べられている事を知らないと思うけど」

風音「……」。部長の時はなんか行かないとって思ったんですよ何故か知らないです

けど」

久「・・・」

まこ「ほお」

優希「これは」

まこと優希は2人を見てニヤニヤする

久「何よ2人とも」

まこ「別に」

優希「なんでもないじよ」

そこに咲が戻ってきた

京太郎「おっ咲戻ったのか」

風音「見送りは出来たのかい？」

咲「なんで福路先輩わかるんですか？」

風音「勘かな」

そしてモニターに視線をうつす

風音（この中で注意しなければならぬのは透華さんだ！あの人じゃ覚醒したら手がつけられなくなる・・・目覚めさせる前に終わられてくれよ）

咲「そういえばさつき戻ってくる時に記者の人が風音先輩を探してました」

風音「そうなんか言ってた？」

咲（ん？なんか冷たくなつたみたい）

咲「いっついえ特には何も」

風音「そうありがとう伝えてくれてまあ受ける気は無いんだけどね」

その時モニターごしの対局室では和のパーフェクトゲームを抑える為に透華が動こうとしていた

透華「リーチですわ！」

風音（透華さんがリーチだとデジタルは11600が確定してたらダメにするはず・・・まさか目立つ為にデジタルを捨てたつて言うのか）

1 巡後

透華「いらつしやいまし！ツモ」

風音（あの人らしいでもその卓にはまだ潜んでいるのがいるんですよ）

副将戦前半戦オース透華が桃のリーチに振り込んだ。



優希「なんで龍門渚の副将は危険牌をきってるのにびっくりしてるんだじよ」

風音「普通はそう思うよな」

久「それってどういうこと？」

風音「単純に気づいてなかったんですよ鶴賀がリーチをしたことに」

優希「リーチに気が付かないなんてそんなのありえないじえ」

風音「後半戦も見てればわかるよ」

そして後半戦がはじまるが風音の言っていたように風越と龍門渚がリーチに気づいてないように振り込んでいた。

風音「ああなった桃を止められるのは少ないですよ何せあそこにいる誰にも見えてないんですから」

久「どういうこと？見えてないって」

優希「のどちらじゃないけどそんなオカルトありえないじえ」

風音「でも実際に振り込んでいる。それに彼女は極端に影が薄いそれが麻雀に影響してるんでしょう。これは俺にも模倣できないですよ。」

優希「じゃあのどちらさんもいずれ」

風音「それはないと思うよ。今の原村さんにオカルトは聞かないからたぶん俺達がモ

ニター越しに見てるみたいに原村さんには卓がデジタル麻雀みたいに写っていると思うから」

優希「それなら」

風音「原村さんが振り込むことは限りなく0に近い」

そう言っているとは鶴賀が和の危険牌を切り和に出和了されていた。桃はかなり驚いていた

桃「なんで・・・見えてないんじや」

和「見えるとか見えないとかそんなオカルトありえませんか！」

桃（この人とはガチ麻雀ですか・・・面白くなってきたつす）

風音「宮永さん対局室に向かうかその時に少し話があるんだ」

咲「はい！」

風音と咲は対局室に向かう

実況「副将戦終了!!後半は鶴賀の東横と清澄の原村!その2人の一騎打ちの様相を呈

していましたが終盤近くに龍門淵と風越を応戦！圧倒的な点差がつくまでには至りませんでした」

対局室に向かう途中

和と会い咲と和はお互いの手を合わせたそれを影から風音は見ている

咲「行ってきます」

実況「大将戦！鶴賀学園からは3年生の加治木ゆみ！現在トップの清澄高校、原村和からのバトンを受けるのは同じく1年生 宮永咲！昨年に引き続き名門校の大将を務めるのは風邪高校2年池田華菜！そしてその池田選手の因縁とも呼べる相手がいます  
そう・・・」

ぞわっ

咲「！」

和「またこの感じ!!」

風音「きたか」

実況「龍門淵高校2年神がかりな鬪牌を見せる前年度のMVP！インターハイ最多得点数記録保持者!!天江衣！大将戦の幕が今開こうとしています！」

風音「見せてもらうよ宮永さん君の鬪牌を」

## 第九局

大将戦が始まった。

純（やっぱあの短髪が清澄の5人目）

美穂子（あの上埜さんがアンカーを任せる選手・・・）

部員が集めてくれた咲の牌譜を見る

美穂子（ひとりじゃない・・・華菜2人いるわ卓に魔物は2人いる!!）

そして咲が嶺上開花で和了る、その後もう一度嶺上開花であるがその後には鶴賀に槍槓をくらっていた。

風音「鶴賀の大将すごいですね」

和「あれは単なる偶然です」

風音「そうかな俺は鶴賀の大将は宮永さんの打ち方をあの2回で見抜いたんだと思うよそれに今の鶴賀の手牌・・・あれは暗槓でも槍槓ができる」

和「そんな」

風音「まあ宮永さんも気づいたみたいだからこれには振り込まない」

対局室

加治木「聴牌」

咲（やっぱり国士！）

咲「ノーテンです」

衣「無聊を託つ清澄の大将は厄介だと聞いてうきうきしていたけど……」

衣「乏しいな關乏したよそろそろ御戸開きといこうか」

咲（この感じ！やっぱりこの子だったんだ）

池田「今年も勝てる気でいるのか？」

衣「去年の衣と戦ったのか忘れてくれ去年は本調子ではなかった」

池田「なっ」

衣「あの時はまだお前たちと同じヒトの土俵に立っていたよ」

池田「ヒトじやなきやなんなんだ」

衣「その身で確かめよ」

海底で衣があがる

風音「たしかに去年の天江さんとは比べ物にならないくらい強いね今日の天江さん

は」

久「なんでわかるの？」

風音「去年東京で1度対局しているんですよその時に聞いたんですよ本人から……満月の時が1番力がでると」

和「満月かどうかで強さが決まるなんてそんなオカルトありえません」

風音「……まあ話続けるよ、その時は今日程のオーラが出ていなかったからそれにあまり海底では上がっていなかったんだけど彼女が言うように満月が関係しているなら海底を確実にあがる！それに今日の天江さんには俺も勝てるかわからない」

久（福路君が勝てるかわからないって……）

久「でも私たちは咲が勝つことを信じるわよ」

風音「そうですね」

そして衣が2連続で海底をあがった

優希「ここまでリンシャンリンシャンチャンカンハイターハイターだじよ」

和「偶然にしてもひどすぎます」

優希「エニグマティックだじえー」

久（嶺上の花が咲き海底の月が輝くか……）

久「花天月地ね」

そして前半戦は南一局鶴賀が咲に振り込み衣の親をながしたそして南二局鶴賀が風越から直撃をとる。その直後衣から凄まじいオーラがとばされた

加治木（な・・・なんだ今の圧迫感は！）

咲「これくらになると気づく人もいるんだ・・・これちっちゃい頃のおねーちゃんよりもひどいもん・・・勝てるわけないよ」

そして残りの局も衣があがり前半戦が終了した。そして原村さんが宮永さんの元に向かった

風音「部長飲み物買ってきます」

そして自販機につきカフェオレを買い飲みながら考える

風音（宮永さんが勝てないと思いつけてるようなら清澄に勝ちはないだがあの時の宮永さんを取り戻せれば・・・）

衣「あつかザネ！」

風音「天江さんですか」

衣はいちごオレを買い飲む

衣「にゅフジタ」

風音「藤田さん」

藤田「今年も調子良さそうじゃないか」

衣「調子良し悪し以前にあいつらごときが衣に勝てるものかあと小半時もすれば日降ちだから尚更だ！」

風音「やっぱりか」

藤田「日没とか関係あるの？相変わらず面白いなお前は」

衣「なんならこの後フジタとカザネも相手してやる」

藤田「お前さそろそろ麻雀を打てよ」

衣「今打つてるよ」

藤田「お前のは打つてるじゃない打たされてるんだ・・・」

衣「だったら見せてやろう！有象無象を衣が討ち果たすところを」

そう言い衣は対局室に戻っていった

藤田「君はいいのかここにいて行かなくていいのか？」

風音「まあ俺が行くよりも原村さんが行った方がいいですからそれに俺が言ったのは試合前に自身を持って打てと言ったので充分ですよ。それに前半戦の終盤宮永さんの心が折れかけていたそんな相手に声はかけませんよ」

藤田「そうか・・・私もそろそろ戻る」

そして後半戦がはじまった。はじまると同時に控え室に戻った風音はモニターを見る



風音（原村さんがうまくやってくれたみたいだな、今の宮永さんなら大丈夫かな）  
そして試合が進んでいくが衣が遊びをし風越の点数を0にした。

風音「今回は天江さんの遊びに感謝しなくちゃね」

優希「でも咲ちゃんはずもあがりを封じられてるじよ」

風音「大丈夫だよほら宮永さんの顔を見てみて」

和「なんだか一瞬笑っているように見えました」

風音「大丈夫だよ宮永さんにしかできない方法でこの状況を打破できる」

風越の当たり牌を咲がポンで鳴きその後の巡で槓をしたが嶺上開花ではあえて上  
らず槓をし風越に槍槓で上がらせた

風音「さすが宮永さん」

和「今のが故意だと言うんですか？」

風音「そうだよ」

和「たしかに宮永さんならできそうですね」

風音「あれ？ 嘯み付いてこないねめずらしい」

その後今のあがりで流れがのり風越が数え役満をあがり、それに続いて鶴賀もあが  
る。その後咲が靴下を脱いで試合が再開された

風音「そろそろ宮永さんも動くよ」

咲「ツモ500 800です」

加治木（血迷ったかこの点差だぞ）

透華「原村のチームメイトあんなことでよろしいのかしらわたくしたちを勝利に近づけるだけだというのに」

純「どうかな点差に縛られていたら衣の支配からは逃げられないもしかしたら清澄の大将には違うものが見えてるのかもしれない」

その後咲は安い手であがり続け南三局

純「清澄の5人目安和了とはいえ3連続まるで肩慣らしだな」

透華「あれがウォームアップ？」

純「今までのがジャブだどしたらそろそろか」

智紀「高いのが来る」

風音「ウォームアップは終わったみたいだね」

久「何か言った？福路君」

風音「いや別に」

そしてこの局は咲が倍満を和了し清澄が2位になるも次の局衣にあられてしまうその後停電になり試合が中断されるが数分後に復旧された。そして勝負はオーラス

加治木（さあラス親だ！役満直撃でまくることができただがとにかくまず和了ることだ和了り続ける限り負けはない！）

池田（このどん詰まりあたしのすべきことは何かとにかくひたすら聴牌して流局それを30回くらい繰り返す！その後役満和了ればほら華菜ちゃん奇跡の逆転優勝だし）

数巡後

池田（はあ今くんなよ・・・出直してきな！今役満和了っても逆転できないんだまたあとでなあたしは勝ちをあきらめない！）

衣（風越が和了らないとはあにはからんや（5万）じゃない？清澄！掴まされた如何にせん）

風音（天江さんが迷っている・・・ようやく打ち出したのか麻雀を！）

衣（12000程度かならば振り込んでも仔細なし今までこの感覚通りに打って負けたことはないしかしやつは前々局2000を一瞬で24000にしてきた・・・もう一人いた！感覚通りに打っても負けるかもしれない相手！）

咲「麻雀つて楽しいよね今日もいろんな人と打ってホントに楽しいよ」

衣「楽しい？衣と麻雀を打つてて楽しい？」

咲「うん一緒に楽しもうよ！」

風音「すごいな宮永さんはあんな状況でも麻雀を楽しむことができるなんて俺にはできないな」

風音（宮永さんを少し過小評価してたみたいだ俺もまだまだだってこと・・・宮永さん君が決めるんだ！）

衣「和了るか？」

咲「ううんそれでロンしたら私の負けでも・・・カン」

透華「跳満は当然和了らないにしても大明槓って・・・大明槓!!」

咲「もう一個カン」

池田（また連続カン？）

咲「もう一個カン」

衣（衣は今までの自分と同じ打ち方を選んだでもこれでこの自分が敗北するようなことがあるのなら衣は生まれ変われるのかもしれない）

咲「ツモ！清一対々三槓子赤1嶺上開花32000です」

実況「かつ数え役満!! 県予選決勝2度目の数え役満! しかもまた嶺上開花! 県予選団体戦はこれで完全決着! そして試合の最終結果は清澄高校の逆転優勝です!!」

## 第十局

女子団体県予選が終わり数日があった。清澄高校のメンバーはまた県予選の会場にいた。

久「みんなわかっていていると思うけど今日から2日間個人戦です。みんな全力をだしましょう。」

一同「はい！」

男子と女子の会場は近いが別の会場なので別れる。

風音「行くよ京太郎」

京太郎「はっはい風音先輩」

2人を見送る女子部員

咲「京ちゃん大丈夫かな？」

和「合宿以前の須賀君ならともかく今の彼なら大丈夫なのでわ？」

久「いや咲が言いたいのはそういう事じゃないと思うわよ」

和「？」

久「この前の県予選で私達が優勝し、もう一人の男子部員の先輩は全国覇者それに彼

にとつては初めての試合だものプレッシャーはすごいかかっているとと思うわ」

和「そういうことですか」

久「私達も行きましょう」

そして女子も県予選の会場に入っていく

風音達が会場につき入ると凄まじいシャッターの音やギャラリーの声が聞こえた

「きたぞ」

「福路風音・・・去年の全国覇者」

「去年のみたいな期待してるぞー」

「福路君ーこっち向いてー」

「福路選手！個人戦への意気込みを！」

それらの殆どを無視し進んでいく

京太郎「良いんですか？何も応えなくて」

風音「ああ俺記者嫌いだからあんまり応えたくないんだ」

京太郎「それに女子がいたのが意外でした」

風音「そうか？いろんな人が見に来るんだから当然だろ」

京太郎「みんなの足引つ張らないように俺も頑張ります」

風音「・・・京太郎お前誰かの為に麻雀打ってんのか？」

京太郎「えっ？」

風音「確かに俺や部長達には成績があるけど別にお前がきにすることじゃない・・・気にしてたらキリがないからな」

京太郎「でも俺だけ負けて清澄の男子は風音先輩だけって言われるのは」

風音「そんな考えだったらお前は予選負けだよ」

京太郎「！」

風音「だけどな俺はお前に勝ってもらいたいと思ってるよ、部活でも毎日負け続けているお前は麻雀の本当の楽しさを知らないだからこの予選で勝って楽しめ」

京太郎「先輩・・・」

風音「それに俺はお前をこの県予選で勝てるように合宿の時から教えてきたんだ。くだらないことを考えてないで試合に集中しろ」

京太郎「はい！俺も全国に行けるように頑張ります」

風音「それだけ言えれば大丈夫だろ」

アナウンス「県予選男子個人戦第1試合を始めます。選手は指定の対局室に移動してください」

風音「じゃあ頑張れよ」



そういう風音は対局室に向かった。対局室には既に3人集まっていた。

風音「よろしく」

風音：250000

モブA：250000

モブB：250000

モブC：250000

東一局

風音親番

ドラ表示牌〔北〕

1巡目

風音手牌

〔二万二万二万二万三万④④④⑤⑤東東東北〕

〔横北〕捨て

風音「リーチ！」

実況「清澄高校、福路風音先制リーチです」

3巡目

風音手牌

〔一万一万一万二万三万④④⑤⑤東東東〕

ツモ〔二万〕

風音「これでも確かに上がれるだが」

風音「カン！」

〔裏一万一万裏〕

ツモ〔東〕

新ドラ〔北〕

風音「もう一個カン！」

〔裏東東裏〕

ツモ〔4万〕

新ドラ〔⑤〕

風音「ツモ！」

裏ドラ〔西中④〕

風音「ダブルリーダブル東嶺上開花ツモ三暗刻ドラ10・・・160000オール！」

実況「福路風音！開幕戦で数え役満を和了ったー！」

風音「悪いけど早く終わらせるこの試合東二局はこない！」

東一局一本場

風音親番

ドラ表示〔北〕

風音：73000

モブA：90000

モブB：90000

モブC：90000

風音手牌

〔二万二万⑤⑧二索四索六索七索八索発発発東東東〕

〔⑧〕捨て

5巡目

風音手牌

〔二万二万二万四索六索七索八索発発発東東東〕

ツモ〔三万〕

〔横四索〕捨て

風音「リーチ！」

モブA（はやすぎだろ）

6巡目

風音手牌

〔二万二万二万三万六索七索八索発発発東東東〕

ツモ〔東〕

風音「カン！」

〔裏東東裏〕

新ドラ〔北〕

モブA〔またかよ〕

モブB〔これだとまた〕

ツモ〔四万〕

風音「ツモ嶺上開花！16100オール」

裏ドラ〔⑤五万〕

実況「試合終了！福路風音が役満を2連続であがり3人同時にトバして個人戦予選の最短試合記録を達成しましたー」

風音が対局室から出ようとした時

モブA「楽しいよな」

風音「何が？」

モブA 「対戦相手を完膚無きまでに叩きのめす事が出来るんだから」

風音「・・・」

モブB 「確かに気分いいだろうなそれでどうなの？」

モブC 「・・・」

風音「なんだ僻みか」

モブA 「なんだと」

風音「ただの負け犬の遠吠えにしか俺は聞こえないな。それともなにか手加減でもして欲しかったのか？」

モブB 「そんなことは言っていないだろ」

風音「そうかならお前達の質問に答えてやる・・・つまらないに決まってるだろお前らみたいな雑魚の相手して試合後に嫌味や僻みを言われなきやならないんだから」

そう言い残し対局室をでた

そして午前の部が終わり女子達と合流して昼ごはんを食べていた。

久「みんな予選の方は順調みたいねけっこうけっこう」

京太郎「俺も結構頑張ってますよ」

まこ「確かに京太郎が今の所4位というのはすごい事じゃのお福路なにをしたんじゃ

？」

風音「別にたいしたことはしていない。ただ卓の流れを読ませる訓練といろんな選手の牌譜を見せて情報を与えたただけだ」

久「それだけでここまで強くなるなんて他に理由はある？」

風音「元々運動部のキャプテンだったらしいから観察眼は優れてるだろうし場の流れも把握できると思っただからやらせた」

和「福路先輩すごい観察眼ですね」

優希「すごいじよ」

咲「それに京ちゃんもすごいけど福路先輩もすごいですよ」

久「最短試合記録達成よね」

京太郎「凄かったですよ試合が終わったあとめちやくちや記者が先輩にむらがつてましたから」

風音「ああそうだな。俺先に会場に戻ってます」

そう言い残し風音は会場に戻る

咲（なんか朝と雰囲気全然違う・・・なにかあったのかな）

咲「私もおトイレ行ってきます」

そーういーい咲は風音を追いかけた

咲「福路先輩！」

風音「宮永さんどうしたの？」

咲「いやなんか朝と様子が違ったので何かあったんじゃないかと」

風音「・・・まだまだ俺も演技が下手だな」

咲「いや朝の先輩の雰囲気と昼にあつた時の雰囲気が全く違っていたので傍から見たらいつも通りでしたよ」

風音「そつか。毎回試合が終わる度に言われたんだよ。楽しいのはお前だけ、弱い奴を倒して嬉しいか？みたいなことを言われたよ」

咲は絶句した。自分の試合の後にはそんなこと言われていなかったからだ

咲「・・・」

風音「勝つたのに全く満たさせないんだ。あいつらとの対局は何も感じないただの作業みたいに試合に勝つだけ。試合するのも馬鹿らしくなってね。」

咲「でももしかしたら先輩を満たしてくれる人が全国にいるかもしれないですよ。たから試合が馬鹿らしいなんて言わないでください！それに先輩に続こうと京ちゃんも頑張ってます！」

風音「そうだな。ありがとう宮永さん」

咲「いついっえお礼を言われることは・・・それに待っていてください今の私じゃまだ

ダメかもしれないですけどいつかあなたを満足させます！」

風音「・・・ありがとうだけどその言い方だと誤解を受けるから気をつけた方がいいよ」

咲「えつとあのそういう意味じゃなくて」

風音「わかってるよ、じゃあそろそろ行くよ」

風音は午後の部の対局室に向かう

数時間後

午後の部を終えて麻雀部で帰宅していた。

久「とりあえずみんな予選突破おめでとう、明日は女子の個人戦、明後日に男子の個人戦があります。油断せずにいきましようそれでは解散！」

そして方向が同じメンバーで帰る久と風音は途中まで一緒なので帰る

久「個人戦はどうだった？」

風音「俺ですか？・・・相手になる奴がいなくてつまらなかったですよ。そっちはどうだったんですか？」

久「私は楽しかったわよ。それに・・・」

風音「団体戦だけで良かったと思ってたけど個人戦でも勝ちたいという欲が出てきましたか」



久「なんでわかったの？」

風音「顔に書いてありますよ」

久「そうよ。みんなで全国で優勝するのもいいけどあなたが見た景色って奴も見てみたいのよ」

風音「そうですか」

しばらく沈黙が続く

久「そういえば宮永さんと何話してたの？」

風音「俺を満足させられるように強くなるそうですよ」

久「そうなの・・・かなりはぶいてるのはわかるから聞かないでおくわ」

風音「助かります。ではこっちなんでさよなら部長」

久「さよなら福路君」

家の前に着くと違和感を感じた

風音「なぜ明かりがついている」

ドアを開けるとおかえりと声が聞こえた。声の主を聞いた途端にため息が出た

風音「なんで姉ちゃんがここにいるんだよ」

美穂子「お母さんから聞いてなかった？今日はお母さん達がいなしし会場に比較的近

「いあなたの家に泊まるって」

風音「そんなこと聞いてないんだけど」

そして風音電話をかける

風音「もしもし母さん？」

母「何？風音」

風音「今日姉ちゃんが来るなんて聞いてないんだけど」

母「あつ忘れてたわごめんね」

風音「わかったじゃあきるね」

風音「じゃあベットは姉ちゃんが使って明日個人戦あるんだろ」

美穂子「えっでも風音は？」

風音「俺はソファ使うから」

美穂子「・・・なら2人でベットで寝ましょう」

風音「はあ？」

美穂子「私は気を使わせたくないし風音は私を気づかいたいなら妥協点の2人でベットを使うでいいんじゃない？」

風音「・・・なぜそれが妥協点になるかわからないけどまあいいやすぐに寝る？」

美穂子「もう少ししたら寝ようかしら」

風音「そつ俺風呂入ったあと少し牌譜の整理するから先に寝てて」

美穂子「わかった・・・絶対くるのよ」

風音「わかったよ」

そして風呂に入り数分後でて牌譜の整理をしていた

美穂子「ねえ風音」

風音「どうしたの？」

美穂子「風音は好きな人とかいないの？」

風音「・・・好きな人はいないかなけど気になる人はいるよ」

美穂子「ふーん。」

風音「そんなことなんで聞いたの？」

美穂子「なんでもないよ」

風音「さてと俺も寝るかな」

美穂子「おいで風音」

そして風音も横になると美穂子が背中から手をまわして抱きしめてきた

風音「暑いんだけど」

美穂子「・・・私はエアコンのせいで寒いから風音で暖まるよ」

風音（これ引かないやつだな）「わかったよ」

風音「それじゃおやすみー」

美穂子「おやすみなさい」

## 第十一局

男子個人戦県予選当日、風音は1人で会場に向かっていた。

風音（果たして居るのだろうか宮永さんが言っていた俺を満たしてくれる相手は長野に……）

そんなことを考えながら会場へと向かった。そして前日の女子個人戦の結果は1位宮永咲 2位福路美穂子 3位竹井久であった。この結果は風音にとって嬉しいものであった。

風音（宮永さんは宣言した俺を満たさせるってその為に強くなっているという事を個人戦の結果でみせてくれた……なら俺が楽しめる相手が長野に居なくても全力をださないとな）

そして風音は会場に入った

その頃

咲「なんで福路先輩がいないんですか？」

久「福路君から連絡があつて1人でいたいと言つていたから会場で合流よ」

咲「そうなんですか」

優希「それにしても今日の主役が遅いじえ」

京太郎「すいません遅れて」

久「大丈夫よまだ集合時間の5分前だし、さてと行きましようか須賀くん福路君に教  
わった成果見せてもらおうわよ」

京太郎「はい！俺も勝つて絶対全国に行きます」

そして会場に向かったが会場に着いた時風音が他校に絡まれていた

久「あれは風越高校の男子ね」

和「風越つて女子校じゃなかったんですね」

久「正確には去年から共学に変わったのよ」

優希「止めなきややばげだじよ」

京太郎「俺行つてきます」

風音「此処で待つてればわかりやすいだろ」

「おい福路」

風音「ん？お前は」

「久しぶりだな干された天才さん」

風越高校の男子の集団が笑う

風音「お前らが誰かは覚えてないがそれを知ったるってことは風越中学からエスカレーターで上がった奴らか何かよるか？」

「風越に來ないで逃げた天才に挨拶しようと思つてな」

風音「なるほどなら用は済んだな。俺の前から消えろ」

「はあ？お前何様のつもりだよ」

風音「たいして親しくもない奴との会話程ストレスがたまるものは無い」

「お前のそういうところが昔から氣に入らねえんだよ」

風越の生徒の1人が拳を振り上げる

風音「おつと良いのか俺の事殴つても周りみてみるよ」

男子の集団が周りを見るとかなりのギャラリーができていた

風音「後お前らが挨拶しに來たんなんなら俺も質問をしよう。この中で一体何人本戦にのこつたんだ？」

その言葉をきいて8割は顔をうつむける

「くっ……」

風音「見た感じ全く残つてないないな……と言うより何人かは俺が終わらせたのか」

「うるさい！だいたいお前は中学の時から」

風音「今の俺に言うことができる所がないから過去の事か器がしれるな」

「黙れよ！福路先輩の劣化版が」

???「そこまですておいたらどうだ。風越男子麻雀部」

「お前は鶴賀学園の三森元輝」

三森「ここで揉め事をおこして出場停止になりたくないだろ」

「ちつ行くぞお前ら」

風音「ひらしぶりだな助かったよ三森」

三森「別にあのままだとお前が出場停止になりかねないから止めただけだ。お前を倒

すのは俺だからな」

風音「そうか楽しみにしておく」

そう言い残し風音は去っていった

京太郎「風音先輩大丈夫ですか？」

風音「問題ないよ」

京太郎「最後少し話してたのは？」

風音「三森元輝去年の県予選2位だよ」



京太郎「そうだったんですか。もう少しではじまりますよ」  
風音「そうか行こう」

久「もうすぐはじまるわね」

まこ「福路の心配はないが京太郎がどうなるかのお」

和「二人とも勝ってくださいよ」

優希「先輩が本気で打つとこ初めて見れるかもしれないじえ」

久「見れるといいわね」

咲「そうですね」

そうして個人戦が始まった風音の9試合は全て東場で相手をトバし終わらせ現在ダントツの1位。そして京太郎は9試合全てで振り込まずに堅実な打ち方で順位を上げ現在4位そして最後の試合が始まろうとしていた。

実況「男子個人県予選もいよいよおおずめa卓は現在の1234位の試合となっておりテレビ的にかなりおいしい試合となっております。」

対局室に風音が入る

「やっとききたか福路」

風音「朝の奴か」

「お前をつぶしてやるよ」

風音「あつそ」

東一局

風音：25000

モブ：25000

三森：25000

京太郎：25000

風音親番

ドラ表示（北）

風音手牌

（一万八万九万⑤⑦⑧⑨一索二索六索東東東発）

風音（手牌はいつも通りだけど何か違和感があるこの発がきな臭いな）

⑤捨て

5巡後

風音手牌

〔二万八万九万⑦⑧⑨一索二索三索東東東発〕

ツモ〔七万〕

〔横一万〕捨て

風音「リーチ！」

実況「清澄の福路先制リーチです」

だがそのまま流局をむかえた

京太郎・モブ「ノーテン」

三森・福路「聴牌」

三森手牌

〔①①①赤⑤赤⑤白白白中中中発発〕

風音（さつき感じた違和感はいいつか）

三森「やっぱり福路が持ってたか」

風音（・・・こいつ去年よりも強くなってるじゃんいいねえ）

東一局1本場

風音：26500

モブ：23500

三森：26500

京太郎：23500

風音親番

ドラ表示牌〔中〕

風音手牌

〔赤五万五万⑤赤⑤一索五索九索東東東中中中〕

風音（俺の支配が完全ではないのか、あるとすれば三森かあいつの牌譜では三元牌が集まっていたとなると三元牌が俺の手牌にこんなにあるのは・・・まあいい）

〔一万〕捨て

6巡目

風音手牌

〔赤五万五万⑤赤⑤五索九索東東東中中中〕

ツモ〔六索〕

〔九索〕捨て

京太郎「ポン！」

〔五万〕捨て

〔九万九万横九万〕

風音（京太郎俺に流れが来てることを察知してないたな）

8 巡目

風音手牌

〔赤五万五万⑤赤⑤五索六索東東東中中中〕

ツモ（七索）

風音「カン！」

〔裏東東裏〕

新ドラ（白）

ツモ（⑤）

風音「嶺上開花！ツモ8100オール」

実況「清澄の福路風音！男子個人戦5度目の嶺上開花！」

藤田「これは清澄の宮永を見ているみたいだな」

東一局2本場

風音親番

ドラ表示牌（北）

風音：50800

モブ：15400

三森：18400

京太郎：15400

風音手牌

〔一万三万①①②一索二索三索西西西東東発〕

風音（おかしいぞさつきから。今度は配牌の中に自風牌がそろってないない……俺の支配が完璧ではないのかそれとも三森が何かしているのか？）

〔①〕捨て

8巡目

風音手牌

〔一万①②③一索二索三索西西西東東発〕

ツモ〔二万〕

風音（張った……なんだこの感じ）

〔横発〕捨て

風音「リーチ」

三森 「ポン」

〔九万〕捨て

〔発横発発〕

9 巡目

風音ツモ 〔白〕

〔白〕捨て

三森 「ロン！12600」

三森 手牌

〔④⑤⑥⑦⑧⑨白白東東〕〔発横発発〕

実況 「福路が振込んだー！この大会では初のことです」

藤田 「三森の発を暗刻から落として福路から出させたのが上手いな」

実況 「すごい偶然ですね」

藤田 「偶然ならいいんだけどね」

風音 「・・・」

三森 「言っただろお前を倒すとお前もそろそろ本気をださないとトバす！」

風音 （・・・少し全力を出すでしょうお前の望み通り）

東二局

モブ親番

ドラ表示牌〔中〕

風音：48200

モブ：15400

三森：30400

京太郎：15400

1巡目

風音手牌

〔①②③④⑤⑥⑦⑧⑨北北北白〕

ツモ〔九万〕

風音（あの子を模倣して正解みたいだな）

〔横九万〕捨て

風音「リーチ！」

三森「ダブリーだと」

9巡目

風音ツモ〔北〕



風音「カン！」

〔裏北北裏〕

新ドラ〔発〕

風音ツモ〔九万〕

〔九万〕捨て

京太郎（上がらないのかでも先輩に流れがいつてるのはわかるなら）

京太郎「ポン！」

〔六万〕捨て

〔横九万九万九万〕

三森（不可解な鳴きだ）

10巡目

風音「ツモ！ 120000／60000」

東三局

三森親番

ドラ表示〔④〕

風音：72200

モブ：3400

三森：24400

京太郎：9400

三森（福路お前が親番で高確率でドラ爆するように俺も親番になると集まるんだよ）

三森手牌

〔⑦⑧⑨一索一索白白白発発発中中東〕

〔東〕捨て

三森（知ってるぞ福路お前は親番じゃなければ配牌時に場風牌を持っていることが少ないってことを！）

4巡目

京太郎手牌

〔二万二万三万六万六万七万七万八万八万九万九万九万中〕

ツモ 〔二万〕

京太郎（清一色を狙いに行きたいけど三森さんが最初からツモギリしかしてないし捨牌も真ん中がかなりきれているし三元牌はション牌だからきれないなら！）

〔横一万〕捨て

京太郎「リーチ！」

5 巡目

京太郎「ツモ！80000 / 40000」

裏ドラ（五万）

福路：68200

モブ：—600 トビ

三森：16400

京太郎：25400

実況「男子個人戦 a 卓終了！この結果により3位と4位が変わります！」

「俺が何も出来ずに負けただと」

三森「はなから俺はお前らの相手なんかしていなかったよ・・・清澄の1年！名前は」

京太郎「須賀京太郎です」

三森「須賀京太郎・・・覚えたからなこの借りは全国で返す！」

風音「すごいな京太郎よくあそこで中をきらなかったな」

京太郎「中はものすごく嫌な感じがしていたし三森さんは最初から流れがあつたみた

いに感じたので」

風音「それだけでわかればすごいよ。みんなのどこに行こう」

みんなと他の対局を見ていたが終わった。その結果京太郎も全国に行くことが決まった。

久「二人とも全国出場おめでとう」

咲「すごいよ京ちゃん」

優希「なかなかやるじえ」

和「おめでとうございます」

まこ「むしろもこれからは油断できへんのお」

京太郎「・・・俺」

風音は何も言わずにその場からからさる。それを見た久が福路を追いかけた。

久「福路君なんであそこから離れたの？」

風音「京太郎は凄まじい成長をしましたがあの試合では俺と三森が暴れて凹んだ3位を自分の手だとばして終わらせただけ・・・京太郎は最後まで自分の力で打って勝ちたかったんだと思いますよ。それにあの卓のトップがあそこにいたら言いたいことも言えないと思って」

久「なるほどね。ちゃんと考えてるじゃない」

「風音「でもあの試合で悔しいと思えるなら京太郎はもつと強くなりますよ。あつそういえば部長」

久「何かしら」

風音「個人戦団体戦の両方で全国出場おめでとうございます。」

久「言うのが遅いんじゃないかしら」

風音「すいません。ちゃんと saying してないなって今思つたんですから」

久「ひどいわね。なら今度買ひ物に付き合つてよ今のお詫びとして」

風音「買ひ物ですか? いいですけど」

久「やった! そろそろみんな元に戻りましょうか須賀くんもそろそろ大丈夫だろうし」

風音「そうですね」

こうして県予選の幕が閉じた

## 合宿編

### 第十二局

県予選が終わって2週間くらいがたったある日。風音は自室で配牌の整理をしながら○ヤドバをしていた。

風音「みんな○狐使って楽しいのかねえ。」  
すると携帯がなった

風音「こんな時間に誰だ？部長かな」

風音「もしもし」

美穂子「もしもし風音？」

風音「姉ちゃんかなんか用？」

美穂子「少し相談があつてね」

風音「何相談って」

美穂子「あのね今度県予選で戦った4校の合同合宿にうちも招待されたんだけど……風越は私しか全国に行かないし私は参加したいんだけど私のわがままに部員を巻き込む訳にもいかないし」

風音「別にいいんじゃない？わがまま言っても」

美穂子「でも私は風越のキャプテンで」

風音「どうせ姉ちゃんの事だからいつも周りに気をつかっていろいろやってたんだろ。ならそれくらいのがままくらい許してくれるんじゃないか？」

美穂子「・・・」

風音「それに姉ちゃんの後輩も来年のことを考えて参加したいと思ってるんじゃないか？後は部員の奴と相談して決めれば？」

美穂子「そうね。ありがとう風音」

風音「それじゃあきるよ」

美穂子「あつ待つて風音・・・やっぱりなんでもないわ」

風音「じゃあおやすみ」

数日後 部室

久「みんな揃ってるわね連絡があるわ後男子2人に少しね」

和「どうしたんですか？」

久「今度行う合宿は県予選決勝の4校を呼んだ合同合宿になりました」

咲「おぉー」

優希「あのノツポにリベンジだじえ」

久「そこで全国までに私たちのレベルアップをはかるわ」

風音「それで？俺たちにお願いつていうのは？」

久「その合宿に2人にも参加してもらいたいのよ」

風音「いやそれはまずいんじゃないですかね」

京太郎「俺達男ですし」

優希「男？」

優希は風音をガン見する

風音「なんで片岡さんが俺をガン見してるかは置いて」

久「3校の参加する条件があなた達2人の参加なのよ」

風音「なるほどそういうことですか」

久「お願い出来るかしら」

風音「別にいいですよ。」

京太郎「俺もいいですよ」

久「決まりね。後福路君には取材の申し込みと他校から練習試合の申し込みが来てる

わよ」

風音「取材の方は拒否で練習試合の方は学校はどこですか？」



久「えっと白糸台高校、千里山高校の2校ね」

風音「両方とも受けます、いつですか？」

久「2校とも東京で全国大会の期間中に来て欲しいとのことよ」

風音「わかりました」

京太郎「どうして風音先輩取材拒否するんですか？」

久「須賀君その事は」

風音「別にいいですよ。ただ単に嫌いなだけだよ。中学の時に好き勝手に書かれたから嫌いになった。それから俺は1度も取材を受けていない。」

京太郎「すいませんんか」

風音「別にお前は悪くねえよ・・・もうそろそろバイトなんで今日は帰りますね」

「素晴らしい風音は荷物を持ち部屋をでた

久「須賀君・・・」

京太郎「すいません」

久「気になるのはわかるけどあまりこのことは触れないであげて」

優希「わかつたじえ」

和「わかりました。」

咲「わかりました」

咲（京ちゃんが取材の事聞いた時福路先輩の目が県予選の時にしていた悲しい目になつてた・・・部長と福路先輩には悪いけどこんど聞いてみよう）

## 第十三局

4校合同合宿当日 会場に到着したのは清澄が最後だった。その後荷物を各自の部屋に置きロビーに集まっていた。

久「この度は4校合同合宿にご賛同いただきまことにありがとうございます。今回の合宿ですがわが校は男子メンバーも参加させていただきます。」

風音「この度合宿に参加させていただきありがとうございます。清澄高校2年福路風音です。もう1人の男子もいますが代表で挨拶をさせていただきます。女子の中にない男子がいることで不便を感じるかと思いますが一生懸命頑張りますのでよろしくお願いします。」

久「移動の疲れもあるでしょうし今日は自由行動と言うことでよろしいでしょうか？」

一同「異議なし！」

各自で自由行動を取り始めていた。

衣「咲、ノノカいっしょに遊ぼう」

咲「何しようか」

衣「麻雀！」

その会話を少し離れたところで見ていた風音の元に話しかける2人

透華「風音さん」

一「風音君久しぶり」

風音「県予選以来ですね。久しぶりです」

透華「この度はこの合宿に読んでいただきありがとうございます」

風音「お礼なら部長に言ってくださいよ。あと気になってたんですがうち以外の3校が俺と京太郎を指名したんですか？」

透華「うちは風音さんが参加するなら参加すると言いましたわ須賀さんは他の2校でしょう。うちが風音さんを指名したのは衣が理由ですわ」

一「衣が風音君と打ちたがってたからね」

風音「なるほど」

そこに衣がくる

衣「かざねもいっしょに遊ばないか？」

風音「いいですよ天江さん。では二人とも後で」

2人は風音が衣と一緒にいくところを見ていた

数時間後

池田「迷ったし」

文堂「えー風越の部屋ってそもそもこの回でしたっけ？早く戻らないと湯冷めしそうですよ」

池田「お清澄の部屋発見！」

文堂「関係ないですよねそれ」

池田「おじやまするし！」

文堂「ええ！」

ドアを開けて入っていく

風音「何か用ですか？」

ついさつきまで衣達と麻雀をしていた風音がパソコンをいじっており、京太郎はゲムをしていた。

文堂「風越の部屋ってどこかわかりますか？」

京太郎「他校の部屋の場所まではちよつと」

風音「この下の階の突き当たり非常口の手前ですよ」

文堂「助かりました行きましょう」

池田「待つし！」

文堂「どうしたんですか？」

池田「キャプテンの弟がパソコンをいじってるし！」

風音「いきなり失礼なこというね」

池田「いやそういう意味じゃなくて福路君はキャプテンにもものすごく似てるからそういうところも似てると思つてたからビックリして」

風音「・・・まあ姉ちゃんの機械音痴はやばいからなそう思われても仕方ないか」

京太郎「そんなに酷いんですか？」

風音「ああ・・・」

風音「それに容姿が似てても中身が全く違う姉弟つて良くいる」

部屋に足音が近づいてきた

久「福路君いる？あら風越の」

池田「おじやましてるし」

文堂「お邪魔してます」

風音「なんですか？部長」

久「藤田プロから声をかけてくるように言われてね悪いけどいっしょに来てくれない？」

風音「藤田プロ・・・そういうことですかわかりました。じゃあ京太郎留守番よろしく」

京太郎「はい」

風音「まあ鍵さえかけといてくれれば好きなどこ行っていいけどさ」

「そういう風音は久について行った先に雀卓がありそこには藤田プロと加治木さんと空席が2つあった。」

風音「なるほどここに入って打てばいいんですね」

久「物わかりがはやくて助かるわ」

1時間後

久「どうでしたか？」

藤田「ああ面白いな」

加治木「・・・」

藤田「今日はもう寝るが明日もいろいろ交ぜてくれ」

久「もちろんこちらこそ大歓迎です。」

風音「じゃあ俺は部屋に戻りますね」

加治木「私も戻ります」

そういう二人は部屋に向かうがその途中加治木に声をかけられた

加治木「福路君少しいいかい？」

風音「ええ大丈夫ですよ」

加治木「三森から伝言をあずかっててな。全国でお前ら二人を必ず倒すと言つていた」

風音「わかりました。楽しみにしていると伝えてください。」

加治木「結構余裕そうだな」

風音「余裕ではないですよ。いや余裕なのかも知れませんが」

加治木「それはそれでうちの学校が弱いみたいで少し傷つく」

風音「そういう意味では無いですよ。倒した相手がまた向かって来てくれることが嬉しくて楽しみで仕方ないですよ。そういうのもある意味余裕があると言えると思つたので」

加治木「なるほど。そういうえば県予選の時桃と話してたが知り合いなのか？」

風音「幼馴染ですよ。」

加治木「では桃が見えるのか」

風音「ええ昔はみんな俺が誰と話してるのかわからなかったみたいですがまあそれで桃の初めての友人が多分俺なんですよ」



加治木「だからか合宿の声がかかった時君が来るのかを最初に聞いたのはその後、経  
験を積むためにもう1人の男子の名前も上がったんだが」

風音「なるほどでは俺はこっちなのでおやすみなさい加治木先輩」

加治木「おやすみなさい福路君」

## 第十四局

合宿2日目 今日朝から麻雀をしていた。風音も1局終え休んでいた。

風音「コーヒーはやっぱりうまいな」

久「あら福路君サボりかしら？」

風音「サボりだなんて人聞きの悪い、さっきまで打つてたので休憩ですよ休憩」

久「休憩ねー東場で和をトバして終わらせてなかつたけ？」

風音「それに俺は休憩している間も待つてるんですよ」

久「何を？」

風音「しばらくすればわかりますよ」

美穂子「風音少しいかしら？」

風音「姉ちゃんか・・・じゃあ呼ばれてるんで行きますね」

久「ええ」

風音「それで何の用？」

美穂子「皆さんにサンドイッチとおにぎりを作ろうと思って風音も手伝って」

風音「まあ少しくらいならいいよ俺はサンドイッチ作るから姉ちゃんはおにぎりを作って」

美穂子「わかったわ」

美穂子は嬉しそうに台所に風音と並んで立つ

風音「何ニヤニヤしてんの」

美穂子「えっそんな顔してた？」

風音「軽くね」

美穂子「久しぶりで楽しいなーって思ってたの風音が家にいた頃はよく一緒にやってたけど高校に入ってから1年の春休みまでずっと帰って来なかったし」

風音「あの時は色々整理が着いてなかったから」

美穂子「前も言っただけど心配してたんだからね」

風音「・・・ごめん」

美穂子「それにちゃんと仲間ができてて私は嬉しいよ。去年までの風音だったらこういうイベントにも来なかっただろうしこんな会話続かなかっただろうし」

風音「全部部長のおかげだよ。今の俺があるのは・・・部長が麻雀部に勧誘してこなかったら俺は今も両親と和解できてなかったよ。本当に感謝してるんだ」

美穂子「ふーん。随分楽しそうね竹井さんの話をする時は」

風音「そんなことない」

美穂子（無自覚なのかしら）

風音「そういう姉ちゃんはどうなんだよ」

美穂子「私には風音がいるから」

風音「はいはいわかった。こっちは終わったけどそっちは？」

美穂子「こっちも終わったよ」

風音「じゃあ行こう」

美穂子「おにぎりとサンドイッチ作ってきました」

久「いただくわ」

「素晴らしい風音が持ってたトレーからサンドイッチを食べる」

風音「部長どうですか？」

久「美味しいわよ、これ福路君が作ったの？」

風音「姉ちゃんの提案で」

久「なるほど、おにぎりの方もいただくわ」

池田「いただくし！」

優希「いただくじえ」

純「おつサンドイツチじゃん！サンキユ風音」

久「あなたのとこのキャプテンはいいわねえ気が利いて料理も麻雀もうまくて」

吉留「あげませんよー」

池田「それにそつちにも料理がうまくて麻雀が強い男子がいるし！」

久「それもそうね」

こちらで福路姉弟の料理を食べながら談笑しているとあつちの卓がガヤガヤしてきた。その卓には咲、衣、藤田プロが座っており一人空いた状態だった

文堂「あの卓すごい」

蒲原「入りたくないな」

久「へえ」

久「じゃあ私が入って久しぶりに本気出しちゃおうかしら」

風音「部長待つてください」

久「風音君入りたいの？」

風音「いえ違いますよ。あの二人とは昨日散々打ったので・・・風音君？」

久「あなたのお姉さんと混ざるから読んだのよダメだったかしら？」

風音「別にいいですけど女同士で名前呼ぶ方がいいんじゃない？」

久「確かにそれは普通だろうけど私は貴方と付き合い長いじゃないずっと苗字呼び

だっからちようどいいと思って」

風音「なるほど」

久「それは置いといてどうして止めたのかしら」

風音「もうしばらくすると面白いものが見れるからですよ」

久「面白いもの？」

風音「きたようですよ」

風音立ちの前を透華が通り過ぎる。

久「今の龍門渕さん？」

風音「ええ、あの状態の透華さんは去年の全国以来見てませんでしたから」

久「いつもとは違うってこと？」

風音「ええ見てればわかりますよ」

卓に透華がつき対局が始まったが咲、衣、藤田プロの3人を相手にして圧勝していた。だがいつもの透華と違うということは見学者全員が対局を見てわかった。咲達と行った対局は4回その全てでトップを取り続けていた。

風音「部長さつき俺は待ってると言いましたよね」

久「ええまさか」

風音「この状態の透華さんを待ってたんですよ」

そう言うのと透華達の卓に風音は向かった。

風音「藤田プロ変わってもらえませんか？」

藤田「ああいいぞ」

風音「ありがとうございます」

冷し透華「風音さんよろしくお願いしますわ」

風音「こつちこそよろしく」

透華「ハッ！」

龍門渕の部屋で目を覚ました

一「透華」

智樹「おめざめ」

透華「夢・・・夢オチですの！」

一「衣と清澄の人とプロ相手に連勝してたことなら」

智樹「夢じゃない」

一「風音君が牌譜をとってくれてたんだ」

一「透華3人と4ゲームしたあと風音君と対局して終わったところで気を失っちゃっ

て・・・心配したよ」

透華 「こんなの・・・こんなの私じゃありませんわっ！きやつかですわ！」

一 「透華」

透華 「これでは原村和とスタイルが違いすぎますわ！それに今の私で風音さんに勝たなければ意味がありませんわ！」

一 「えっ？」

透華 「あれは・・・噂をすれば高遠原中学」

智樹 「原村和のいた中学校」

一 「ああそれで」

透華 「関係ないですわ！」

その数時間後

風音（この合宿に来てよかったよ。知りたかった情報が手に入ったし尚且つその人と打てた。これで今年はいつとの勝負が楽しみになってきた。去年はあいつはまだ参加していなかったが今年はいるそこで全力でやってやるからな■。2年前よりも強くなつてなかったらしようちしないからな、今度こそ俺を満たしてくれよ）

風音は外で風に当たりながら夕暮れの空を見ていた。



久「こんな所にいたのね風音君」

風音「部長どうしたんですか？」

久「もうそろそろ夕食の時間だから呼びに来たのよ」

風音「そうでしたか・・・そっちはどんな感じでしたか？」

久「そうね、宮永さんもマホさんの存在で浮かれてた所も引き締めたようだしまこも初心者の打ち方見れたからうまくいったわね」

風音「それはよかった」

久「風音君は打たなくて良かったの？似たような事ができるもの同士の対局私は見たかったわよ」

風音「今日は縁がなかったということ」

久「あなたの方は全国への準備は順調？」

風音「ええ今日は見たかったものが見れたし強い人とも打てたので準備はいい感じになってますよ」

久「じゃあそろそろ戻りましょうか」

風音「そうしましょう」

## 第十五局

合宿2日目の夜、自由時間を各々で過ごしていたがほとんどが大部屋で雑談をしていた。そこで話題になったのが風音と京太郎のことであった。もちろん本人達はいない。

池田「そういえば清澄の須賀君だっけほんとに最近まで初心者だった？」

咲「京ちゃんですか？そうですよ」

優希「入った当初の京太郎は酷かったじえ」

和「初めての合宿の時当たりから今の須賀君の打ち方になってきましたね」

池田「そんな！」

文堂「それで県予選個人戦3位って凄すぎませんか！」

久「確かにすごいことよね」

まこ「まさかここまで化けるとはあの時は思つたらんかったからの」

加治木「化ける？」

久「さつき和が言ったように合宿の時当たりから今の須賀君に近づいてきてたのよ。そのきつかけと言うかアドバイスをして化けさせたのが風音君なのよ」

咲（！部長いつの間に福路先輩を名前で）

桃（風音君の話題を後で振ってみるのも面白そうっす）

美穂子（あらあら）

透華「やはり風音さんでしたか・・・何をなさったんですか？」

久「彼がやったのはとにかく色んな人の牌譜を見せることと彼の観察眼と場の流れを読むことを意識させるように打たせたことよ」

透華「観察眼？」

咲「京ちゃん中学まではハンドボール部のキャプテンだったんです。福路先輩が言っていたんですがそういうスポーツやるのには観察眼とか場の流れを察知する能力が必要だから京太郎も持つてると思ってたからそれを鍛えたって」

加治木「たったそれだけで」

一「やっぱり風音君すごいや」

透華「そうですね。だからこそ倒しがいがあるというもの」

池田「そういうえば福路はいっ練習してるんだし！この須賀君のことを教えてたりしたら自分の事をする余裕ないし！」

久「私もそれが気になって聞いたことがあるんだけど教えてくれなかつたわ」

美穂子「少し話が変わってしまうのだけれど風音はそっちでうまくやっていますか？」

久「ええ上手くやってるとは思うわよ。」

桃「でも風音君なんか1年生と少し距離があるような気がするっす」

久「確かにね。風音君へ1年生にもアトバイスとかは上げてるけど少し距離があるなと感じる時はあるわ」

和「確かに会話をしてても少し違和感などを感じることがあります」

優希「あつた時よりかは話すようにはなつたじよ」

咲「確かにあまりあつちからは関わつてきませんでした」

まこ「私らはまだ1年はあいつと一緒にやからもう少し頑張るかの」

美穂子「あの子は時々誤解されるようなことを言うかも知れませんがよろしくお願いします。」

久「こちらこそ風音君にお世話になります」

久「そういえばどうして風音君は龍門渕の人達を名前で読んでたのかしら」

透華「それは去年の全国大会が終わつた頃の話になりますわ」

一「全国大会が終わつて東京観光してる時に電話があつたんだよ。風音君から練習試合の申し込みがね。全国での衣の試合を見て打ちたいと言つてたから衣が興味を持つてね。その時初めて風音君とあつたんだ」

久「それでどうだったの？」

透華「衣以外はみんな風音君に惨敗しましたわ、それから彼の個人戦が終わつてから

何度もうちに招き練習試合をしましたのその時にお互いを名前で呼び合うみたいになつたんですの」

久「なるほど去年どこかにいってたけど龍門渚だったのね」

咲「でも衣ちゃんは大江さんってよんでますよ」

一「それはね衣はお姉さん扱いされるのが嬉しいみたいで大江さんの方が衣さんよりお姉さんっぽいからそっちにしてって言ったんだよ」

咲「そうなんだ」

加治木「そういえば桃は福路君と幼馴染だったな」

桃「先輩どこでその事を」

加治木「昨日日本人に聞いたら教えてくれた。なんでも桃を初めて見つけた人だつて聞いたぞ」

桃「／／そつそうつす。風音君が初めての友達で初めて私を見つけてくれた人つす」

久「すごいわね風音君、色んな人と交友関係があつたなんて」

その頃

衣「かざねは麻雀楽しいか？」

風音「どうしたんですか？急に」

衣「かざねも衣と一緒にですつと勝ってきていた。最近まで衣はあまり麻雀が楽しくなかった、衣が勝つと周りから人がいなくなってしまうから」

風音「俺は楽しいですよ。強すぎて色々言われて凹むこともありますけど強い人と戦うことは好きですから例え勝つて周りから人が消えても強い人と戦うことは辞めないでしょうね」

衣「それはどうしてだ？」

風音「いつか自分を倒してくれる存在が現れるかもしれないそしてまたそいつに再戦をして勝った負けたの勝負がしたいからかな」

風音「それに天江さんも今は麻雀で友達もたくさんできて楽しいんですよ」

衣「うん！楽しいぞ。かざねも麻雀を楽しんでいると思つてくれてよかった。」

風音「じゃあ俺そろそろ部屋に戻りますね」

衣「おやすみかざね」

風音「おやすみなさい天江さん」

そういう部屋に向かいながら考える

風音（麻雀が楽しいか？か・・・さつきはあんなこと言っただけ時々わからなくなる  
ことがある。何故麻雀をやっているのかと天江さんの言う通り勝つても周りから人が

いなくなり、対戦相手から罵倒される。そんな中で何故続けているのか)

風音「(やっぱりあいつとの約束かな麻雀を続ける理由は今は自分の強い奴との戦いを求めるよりもあいつとの約束の方が大事なのかもしれいな)

そして部屋につき泥のように眠った。

翌日合宿最終日 皆朝食を済ませて部屋で荷物をまとめる。そして各自の学校で解散をする。

透華「風音さんを少しお借りしてもよろしいかしら」

久「いいですよ」

風音「なんですか？透華さん」

透華「今年は東京に行く前に1度うちにいらして下さらないかしら？まだ衣が風音と打ちたいと言っておりました」

風音「それくらいなら」

透華「ありがとうございますわ、では日程は改めてお伝えしますわ」

風音「はい」

透華「ではわたくし達はもう行きますわ。ごきげんよう」

衣「かざねーまた遊ぼう」

そーうい透華達は合宿所を後にする。風越と鶴賀ももう行くようだ。

風音「ただいま戻りました」

久「じやあ私達も帰るわよ」

一同「はい」

こうして4校合同合宿の幕は閉じた



## 阿知賀編

## 第一局

穩乃「開いてる」

扉を開けて中に入る。

穩乃「カーテンも雀卓は健在ホコリもないなんで？」

「あつあのここに何か御用ですか？」

声がしたので振り返ると阿知賀高校の制服を着た女子生徒が立っていた。

穩乃「えつと・・・あつ！その道具ここの掃除をしにきたんですか？」

「はっはい。友達が先にきていると思ってたらあなたがいたので」

玄「やつときたんだ！」

穩乃「玄さん！」

「玄ちゃん！」

玄「いつか戻ってくると思ってたんだ」

「戻ってくるって玄ちゃんの知り合い？」

玄「そうだよ久美子ちゃん」

穩乃「もしかしてここの掃除・・・」

玄「うんだって木曜日は私の当番だもんだけど大変だから久美子ちゃんにも手伝って貰ってたんだ」

穩乃「とうば・・・って麻雀教室で決めた当番？」

玄「うん」

久美子「あつあの玄ちゃんがいつも言っていましただつて私がいつも通りならいつか誰かがくるかもしれないから誰かがまたあの頃みたいにつて」

玄「久美子ちゃんそういうことは言わなくてもいいよー」

穩乃「あの頃・・・玄さんまたここで麻雀がしたいみんなと」

玄「うんそうなたらいいなって私もずっと思つてた」

穩乃「あと全国大会に行きたい！」

玄「全国！」

穩乃「春までに阿知賀の麻雀部を復活させてインターハイに挑むんです。」

玄「面白そう！」

穩乃「そこにはたぶん和がやってきました」

玄「和ちゃんが？」

穩乃「またみんなで遊ぶことができます。麻雀をしていればいつかどこかで巡り

会える！」

玄「じゃあまず部活を始めなきや！この学校は同好会は3人からだからまずそれで6人揃ったら部活に昇格だね」

穩乃「3人？」

玄「うんここにいる久美子ちゃんは私の麻雀友達なの。」

穩乃「そうだってんですかえつと」

久美子「篠原久美子ですよろしくお願いします。」

穩乃「高鴨穩乃ですよろしくお願いします。久美子さん！」

久美子「はっはい」

玄「でもやつぱり生徒数の少ない阿知賀で6人は難しそうだね。」

誰かが廊下を走る音が聞こえてくる

憧「まずひとり！ここにいますっ！」

穩乃「憧とおまえ晩成に行くんじや」

玄「憧ちゃん！」

久美子「誰？」

憧「あたしとしますが同じ学校なら2人そろって和の前に立てるでしょ全国の舞台で

！」

久美子（私場違いな気が・・・）

憧「またみんなではしゃごう！そして全国に行こうよ！」

穩乃「遊ぶんだと！」

玄「あの頃の3人集まるなんて懐かしいね桂馬くんもいればそろうのにな」

久美子「桂馬くん？って誰ですか？」

玄「桂馬くんって言うのは小学生の時の麻雀教室で一緒だった男の子だよ。とつても

強かったんだよ」

憧「その前にいいですか？この人は誰ですか？」

久美子「すつすいません。私は篠原久美子です」

憧「私は新子憧です。よろしく」

久美子「よろしくお願いします」

玄「話を戻すけど桂馬君頼んだらうちに入ってくれないかな？」

憧「うーんそれは難しいと思いますよ。あいつとは同じ中学だけど今年のインターミ

ドル優勝してからスカウトがすごいらしい・・・でももしかしたら」

穩乃「？」

玄「もしかしたら？」

憧「この前聞いたのよどこに行くのかそしたら俺はゲームで忙しいそんな事でいちいち話しかけるなそれにスカウトの件だがどこも遠すぎて行く気にならん、麻雀をするなら俺が楽しくできるところならどこでもいいって言うのよ」

久美子「ならその桂馬君って子に一応声をかけてみたらいいんじゃない？」

憧「そうね、声かけてみます。」

すると穩乃が急に窓をあけて叫ぶ

穩乃「よおし待ってろよ和！」

久美子「そっちは長野とは反対の方向ですよ」

穩乃「いや気分ですよ気分！」

憧「うーわー」

久美子「すいません少し用があるので先に帰りますね」

玄「そうなんだじゃあまたねー」

穩乃「またこんど」

憧「さよなら」

久美子「またこんど」

そういい久美子は部屋をあとにする

久美子（これから用なんてないけどあそこにはいずらいな・・・）

考え事をしながらお気に入りの高台を目指す。そして途中でアイスを買い一人で高台でたべながら古い日記帳を読んでいた。その日記は最近父の部屋に行った時に見つけて拝借したものだ。そこには自分が記憶を失う前の事が書かれていた。その日記を見るとほぼ毎日一人の男の子と一緒にいたことがわかった。だが久美子はその男の子の顔と名前を思い出せないでいた。日記には風音という名前が書いてあったが名前もフルネームで書かれていなかった為調べることも出来ない。

久美子（この日記の私はいつも風音？っていう男の子と麻雀してたんだ・・・でもなんでこの日記抜けてる所や塗りつぶされたあと、ページが所々破られてるところがあるんだろう）

久美子（麻雀で全国か・・・。これも覚えてないけど誰かと約束した気がする。）  
久美子「そろそろ帰らないと」

そう呟き家に急いだ

## 第二局

新学期初日の放課後　6人の部員と顧問1人が部室に集まっていた

赤土「活動計画書も費用書類もばっちり」

憧「顧問もいるし」

赤土「阿知賀高校麻雀部正式活動開始だ！」

盛り上がっていたところで麻雀部の部室がノックされた。

赤土「はい」

「すみません麻雀部はここであつてますか？」

1人の男子生徒が部室に訪ねてきた。その男子生徒を見た瞬間驚いている人が何人かいた

憧「なつなんであんたが・・・晩成に行つたんじやなかつたの？」

穩乃「桂馬！」

玄「桂馬君！」

桂馬「久しぶりだな。初めましての人もいるけど」

赤土「桂馬つてあー麻雀教室にいたメガネの男の子」

憧「あんたがここに来たってことは」

桂馬「夢咲桂馬ですよろしくお願いします。突然で悪いのですが麻雀部に入部してきました」

灼「確か夢咲って」

久美子「去年の男子個人のインターミドルチャンピオン」

宥「そうなんだ」

桂馬「入部を認めてもらえますか？」

赤土「ええ大歓迎よ」

桂馬「よろしくお願いします」

赤土「じゃあ気を取り直して阿知賀高校麻雀部正式活動開始だ！」

一同「おー」

赤土「早速だけどインハイの地区予選の個人戦はどうする？」

穏乃「誰か出たい？」

玄「個人戦はみんなですって感じがしないし」

穏乃「和は団体戦にもエントリーしてたっばいからねきつとでてくる」

赤土「じゃあ個人は夢咲君ね。団体戦は補欠含めた6人でエントリーする！」

桂馬「女子の団体戦の方は俺もできる限り協力します」



憧「あつあんたが協力？」

久美子「憧ちゃんそんなに驚くことですか？」

憧「こいつ中学の頃はクレイジーゲーマーで授業中だろうとゲームしてましたし協調性の欠片もなかったんですよ」

桂馬「まあゲーマーであることは変わらないがな協調性は身につけようと思ったんだ。だから情報分析位の協力はしてやる。」

赤土「協力は助けるけど貴方にも個人戦があるんだからしつかりやりなさいよ」

桂馬「わかってます」

その会話を聞きながら久美子は桂馬を見ていた

久美子（夢咲君ってどこかで見たことあるだよね。テレビや新聞で見た時も思ったけど）

赤土「県予選は6月上旬2ヶ月後！フツ―はムリ！」

宥「え・・・」

憧「うちの県には晩成高校がいるからねフツ―はムリでしょ」

久美子「晩成高校が地区優勝逃したのは40年で1度だけらしいから」

玄「勝つの大変そうだね」

灼「でもその1度を作った選手が今ここにいる」

赤土「まそれはフツーじゃないわね」

憧「よく言う・・・じゃあうちらが全員ハルエを倒せるようになれば晩成に勝てるかもだ」

赤土「そりやまあ・・・こちとらこないだまで日本リーグのプレーオフで打ってたんだ正気か？」

赤土「はっ・・・しようがないなまず2ヶ月相手をしてやるか！」

大会一週間前

赤土「桂馬オーダーどうすればいいと思う？」

桂馬「俺に相談してきますか・・・玄が先鋒で大将をせずにするのは俺の中で確定です。ね。」

赤土「どうして？」

桂馬「それは2人が牌に愛された子かもしれないという理由と玄に関しては単純に全国に行った時に当たる相手の対策みたいなものですね」

赤土「対策？」

桂馬「・・・宮永照」

赤土「インターハイにチャンピオン！」

桂馬「彼女は牌に愛された子です。それに玄がいれば連続和了の時手が読みやすい」

赤土「なるほどしずは？」

桂馬「あいつに關してはまだ確定ではないんですが時々場の支配が凄かったんですよ」

赤土「だからしずをかなるほど参考にしておくわね。それにしても支配とかの話があなたから出てくるとは思ってたわ」

桂馬「俺は基本相手がオカルト持ちじゃない限りはデジタル打ちですしね。それに圧倒的な場の支配って奴を俺は経験してますし場の支配とかに關してはわかりますよ」

赤土「そうだったのね……それで桂馬が圧倒的な場の支配を経験した時っていつ？」

桂馬「一昨年の男子個人インターミドル決勝ですよ。その支配を持っていたのは福路風音です」

赤土「福路風音確かインターミドルを3連覇した選手よね色んな二つ名のある」

桂馬「ええあの時俺は福路風音の能力を奪おうとしましたができませんでした。俺の能力は自分より場の支配が弱いものにしかなりませんからあの時は福路風音の方が俺より支配が勝っていたということですね。」

赤土「話が逸れたわね。1番の問題は補欠を誰にするかなのよ。」

桂馬「俺としては篠原さんでいいと思いますよ。悪い言い方をすると平凡で何も感じられない打ち手です」

赤土「あなたはそう思ってるのね。私は彼女に何かあると思ってるのそれにあの子練習で1度も放銃をしたことが無いもの」

桂馬「防御が優れているんでしようがそれだけですよ。まあ最後に決めるのは赤土さんなんで」

そう言うのと桂馬は荷物をまとめる

桂馬「これからゲームのイベントあるんで帰りますね」

赤土「君はそういうところ本当にブレないな」

桂馬「ええではさよなら」

赤土「さよなら」

## 第三局

久美子と男の子が遊んでいた。ゲームをやったり喋ったり楽しい時間を過ごしていたがそれが突然崩れ去る。あたりから自分たちへの罵声が聞こえてくる。暴力をふるわれる、それでも2人で耐えていたが久美子の足元が崩れ久美子も落ちる男の子は必死に手を伸ばすが久美子は手を掴むことができずに暗闇の中へと落ちていった。

バツ

久美子「はあはあまたあの夢・・・」

久美子はベッドからでて制服を着る。そしてリビングへと向かった。テーブルの上には朝食が置かれており書き置きに「県予選頑張つて!」と書いてあった。朝食をとりおえるとすぐに家を出た。

県予選会場

赤土「なつつかしいなー」

宥「うう緊張する」

玄「大丈夫だよお姉ちゃん」

久美子「そうですよ」

憧「みんなハルエといい勝負できるようになってきたしね」

赤土「確かに昔のチームメイトに近いくらいは強いかなでもこのチームに赤土という選手はいないからね！」

灼「煩わし」

久美子「ははは」

穩乃「この人たち全部対戦相手？」

玄「あれ！トーナメント表」

久美子「え．．．いきなり」

穩乃「初戦の相手が」

憧「関係ないどうせ当たる相手だよ」

久美子（そうであの人たちを倒さないと全国ね行けない）

穩乃「よしっ晩成を倒す!!」

数日後

憧「ふうなんかとりあえずやれたのかな」

玄「うん大変だったけど」

久美子「私は補欠だったので何もしてませんが」

穂乃「新聞見た？」

憧「ああネットで見た」

穂乃「長野の優勝校！」

穂乃・憧「清澄！」

穂乃「和のいる学校」

玄「和ちゃんやっぱ勝ちあがってきたんだ！」

憧「清澄・・・なんかで聞いたことある学校なのよね」

久美子「もしかしてそれって清澄に男子のインターハイチャンピオンがいるからじゃない？」

憧「そうだ！去年の男子個人戦のインターハイにチャンピオンがいる学校だよ」

久美子「男子の個人戦といえば夢咲君大丈夫でしょうか？」

憧「大丈夫でしょ。あいつも一応インターミドルチャンピオンだったんだし」

玄「今の時間だと最終試合かもね」

夢咲桂馬：25000

モブA：25000

天道海斗：25000

モブB：25000

東一局

親番：桂馬

ドラ表示牌〔南〕

3巡目

桂馬手配

〔一万二万②③赤⑤⑤⑤⑥一索二索三索中中〕

ツモ

〔二万〕

桂馬（親だしここは上がっておきたいな）

〔横⑥〕捨て

桂馬「リーチ！」

だがリーチをかけたのが3巡目だったにも関わらず桂馬はあがれないでいた。そして海底牌をツモる



桂馬ツモ

〔中〕

〔中〕捨て

海斗「ロン！16000」

〔一万二万三万四万赤五万六万西西西中〕

〔横九万七万八万〕

桂馬「はい」

夢咲桂馬：9000

モブA：25000

天道海斗：41000

モブB：25000

東二局

親番：モブA

ドラ表示牌〔4万〕

桂馬手配

〔三万五万①⑥⑨六索七索西西南発中白〕

桂馬（なんだよこの配牌悪すぎるにもほどがある）

12 巡目

モブB「リーチ」

〔横赤⑤〕すて

海斗「ロン！16000」

〔二万二万三三万三万四万四万五万五万③③④④⑤〕

実況「晩成高校天道海斗！倍満2連続和了です」

桂馬（こいつもしかしていや運がいいだけか？だけどこいつは現在2位の選手侮れない）

海斗「インターミドルチャンピオンもこの程度か正直もう少しできると思ってたんだけど」

桂馬「なに」

海斗「君今1位だったけどこの試合でトンだ場合3位だったなそれで現在4位の結果でどうなるかわからなくなるのか・・・面白いなそれ」

桂馬「さつきからばかづきで調子乗りたくなるのもわかりますけど舐めないでください」

海斗「なら見せてもらおうか」

夢咲桂馬：90000

モブA：250000

天道海斗：570000

モブB：90000

東三局

親番：海斗

ドラ表示牌（九万）

1巡目

桂馬手配

（一万一万一万三索四索⑤⑤赤⑤中中中白白）

ツモ

（九万）

桂馬（これなら）

（横九万）捨て

桂馬「リーチ！」

桂馬（どうしてどうして和了れない！ダブルだぞ当たっても事故みたいなものだろ。こいつら全員全く振りそうにない、いつの間にかに海底牌が見えてきた。そう言えばさつきも同じことがあったよな。もしかしてこいつに海底牌関係の能力があったとしたら）

海斗「ポン！」

〔九万〕捨て

〔横発発発〕

桂馬（これだと俺が海底コース）

海斗（気づいたみたいだなでももう遅い）

そして海底牌を桂馬がツモるが自分の和了牌では無い。

〔東〕捨て

海斗「ロン！48000」

〔二万二万三万東東西西南南〕〔北横北北〕

実況「県予選個人戦a卓の試合終了、なんとインターミドルチャンピオンをトバして東三局で終了！この結果により1位だった夢咲選手が3位に転落しました！」

海斗「君天狗になってたんじゃない？」

桂馬「えっ」

海斗「確かに君は去年のインターミドルで優勝できたんだろうけどそれは福路風音がいなかったからだ」

桂馬「！」

海斗「今気づいたいや気づいていないふりをしてたんだね。」

桂馬「俺は・・・」

桂馬（俺は天狗になってたのか、強豪校からスカウトされてもてはやされて自分が特別な存在だと勘違いしていた。人のことを平凡だなんてよく言えよな俺、自分が1番平凡なのに）

海斗「じゃあね、全国にこれたらまた相手してあげるよ」

男子個人戦の最終結果で桂馬は第3位で全国大会に出場することができた。他の卓でもこちらと同じように3位と4位が潰し合った結果桂馬は全国に行くことができた。

## 第四局

県予選が終わった翌日

玄「桂馬君来てないね」

憧「まあ最後の最後にトバされてギリギリだったしショック受けてるんじゃない？」

穂乃「確かに少し心配だよね」

赤土「みんな揃って・・・桂馬はやっぱり来てないか」

はるえに続いて久美子、灼、宥が部室に入ってくる。

穂乃「やっぱりってどういう」

赤土「昨日試合が終わったあと桂馬の所に行っただけどこのままじゃ勝てないからしばらくこっちには顔を出さないって全国までに強くなつて戻ってくるって言つてたから」

玄「桂馬君・・・」

憧「なら気にしてもしようがないね」

穂乃「そうだよ、帰ってくるって言ってるんだから待とう」

久美子「でも私達も強くないと」

宥「そうだよね」

赤土「みんなやる気は充分だね。じゃあ全国に向けてミーティングといきますか」

一同「おー」

赤土「昔は県代表になってたら練習試合しちやいけなかつたんだよ」

穂乃「小学生とも？」

赤土「そう。ところが今は規定が変わって代表校同士じゃなければ試合してもいいらしい」

久美子「それって」

赤土「そう各県の2位となら戦っていいわけだこれからインハイまでに土日が7回まであるから毎週2泊3日で全国各地のナンバー2をたおしに行く！」

玄「・・・」

憧「わー」

穂乃「そんなことできるの？」

赤土「全国出場が決まったことで後援会ができたし部費も増えたとりあえずは親御さんに許可を貰えるかどうかだねそれから対戦相手の候補を決めて試合を申し込む」

久美子・穂乃「長野・・・」

赤土「長野？いいよまずそこに申し込んでみようか」

遠征前日

赤土「みんな明日の遠征の相手は知ってると思うけど龍門渕高校、昨年の長野代表校だよ、あと一つ言つとかなきないけんだけど一人他校の男子が龍門渕にいるらしくてその子も参加するよ」

穂乃「男子？」

憧「誰なんですか？」

赤土「着いてからのお楽しみだそうだ。じゃあ明日早いから今日は部活解散！」

みんなが帰宅していく中久美子は部屋に残っていた

赤土「どうしたの久美子帰らないの？」

久美子「赤土さん相談があるんですけど」

赤土「相談って？」

久美子「私このチームのお荷物になってませんか？」

赤土「えっ？」

久美子「みんなとの対局でも結果が出せないでいるし、どんどんみんなに置いていかれている気がして」



赤土「久美子はお荷物なんかじゃないよ。確かに久美子の實力はみんなよりも下だけど私は久美子は何か引っかけたものがあるものがあってそれが原因かはわからないけどそれで力の半分も出せていない気がするの」

久美子「でも」

赤土「とにかくお荷物なんかじゃないわ・・・そうでしょみんな」

久美子「えっ？」

はるえは部室のドアを開けたら聞き耳を立てていた全員が部室になだれこんだ

穂乃「久美子さんはお荷物なんかじゃないよ」

憧「それにハルエが言うにはまだ本調子じゃないみたいだし」

灼「なら久美子をお調子にすればいいだけの事」

宥「私達も協力するから」

玄「私達は仲間だから話してくれれば協力するよ」

久美子「みんな」

赤土「これでもまだ自分がお荷物だつて言える？」

久美子「私頑張ります。みんなの仲間だつて胸を張つて言えるように」

赤土「そうならみんな早く帰りなさい、明日早いんだから」

一同「はい！」

部員が帰宅をした部室でハルエは考え事をしていた

赤土「今回の遠征で久美子の成長のきっかけになれば良いんだけど」

帰宅後、久美子は明日からの遠征の準備をしながら今日言われたことを思い出していた。

久美子「仲間か・・・」

久美子「うっ！」

久美子の頭に激痛が走ったそして断片的にある光景が頭の中に浮かんでくる。

「いつも大丈夫か？あんなに悪口言われて暴力までふられて」

久美子「大丈夫だよ、それに■■君も一緒でしょ。デマの情報を流されて部活でも居場所がないし影口だって」

「俺は大丈夫だよ・・・悪かったな」

久美子「えっ？」

「自分がやれてるのにお前俺のことまで庇っていつそうお前の虐めが酷くなって」

久美子「あれは・・・私が勝手にやった事だから」

「そうかなら俺はお前の友人いや親友としてずっとお前の仲間で居続けるよ」

久美子「うん！私もずっと■君と一緒にいるよ」

しばらくして頭痛が治まった

久美子「今のは夢にでてくる男の子、やっぱり私と関係がある人だったんだ、もしかしたら長野で会えるかもしれない」

そして準備を終えたらすぐに久美子は就寝した、これから皆の仲間だと胸を張って言えるように明日からの遠征で頑張るために。

久美子（またこの夢かでもいつもと雰囲気全然違う）

久美子は夢を見ていることにすぐに気づいたがいつもは第三者の視点で見ている夢が当事者の視点で見ていることにそこに久美子の自由はなかった。動くことも喋ることも出来ずに只只階段を上がっていった。着いた先は屋上で屋上のはしのフェンスに足をかけて反対側にたった

久美子（まさかこの子自殺する気じゃ、だめだ体が言うことをきかない）

久美子（夢）「ごめんね■君・・・約束守れなくて私もう耐えられないよ」

すると屋上の入口のドアがあく

「やめろ久美子！」

久美子（夢）「ごめんね ■ ■ 君」

久美子（きやあああああ）

素晴らしい屋上から飛び降りたそして地面にぶつかりそうになった時

バサッ

久美子「・・・まさかね。私自殺なんてしようとしてないよね」

そして久美子は時計を確認した。もう少しで起きないと遅刻する時間だった。

久美子「夢の事を考えていても仕方ない、今はみんなと全国で勝つことを考えないと」  
自分に気合を入れて身支度を整えて集合場所に向かった。

## 第五局

移動中の車の中で久美子は考え事をしていたすると

穂乃「久美子さん顔色悪いですよ」

憧「酔ったの？」

久美子「いいえなんでもないです」

玄「でもなんでもないって言うほどなんでもなさそうじゃない位顔色悪いよ」

久美子は考えた。あくまでこれは私個人の事でみんなに迷惑をかけて良いのかと

久美子「・・・」

玄「本当に大丈夫？」

久美子「迷惑かけるかもよ」

玄「迷惑なんかじゃないよ！」

久美子「わかった話すよ。玄ちゃん私中学までの記憶がないって話したの覚えてる

？」

玄「うん」

久美子「それに関係あるかわからないけど最近似た夢を何度も見るんだ」

玄「どんな夢なの？」

久美子「私と男の子が出てくる夢なんだけど最初は幸せな時間が続いているんだけど最後はいつも暗闇に包まれて私の足元が崩れて私は闇の中に落ちてく所で目が覚めるんだけど昨日は違ったんだ」

穩乃「こっ怖い夢ですね」

玄「昨日は違うって？」

久美子「いつもその夢を第三者の視点で見てるんだけど昨日は一人称視点で見ているので体が勝手に動いて私の自由が効かなかったし喋れもしなかった。それで屋上のフェンスの外側に立ったんだその後には私も夢に出てきてた男の子に謝ってた、その後屋上にその子が来たんだけどその目の前で私は屋上から飛び降りたそこで身が覚めたんだ。」

憧「それが記憶喪失と何か関係あるんじゃないかって考えてたってこと？」

久美子「うん。今まで見た夢の共通点は私と男の子が出てきて最後に落ちるといこうと、そして昨日の夢から導いた答えが記憶を失う以前の私が自殺を測って失敗して記憶を失ったって私の中で答えが出て怖くなっちゃって」

玄「そうだったんだ」

このことを話したら皆がお通夜みたいな空気になった

久美子「ごめんねみんな、私のことは良いから遠征の相手の事考えるとかしよ」  
穩乃「そうですね」

憧「でも久美子はそれでいいの？」

久美子「うんそれに長野に行けば何かわかるかもしれないし」

玄「そつか久美子ちゃん長野から来たつて言つてたもんね」

久美子「それに言い方は悪いけど私が自殺未遂をしたから皆に出会えたんだし」

赤土「話中悪いんだけどもう着くわよ」

穩乃「おおー」

憧「ここが龍門渕高校」

灼「長野のナンバー2で」

玄「去年の長野代表校」

宥「すごい立派な建物」

久美子「っ！」

穩乃「どうしたんですか？」

久美子「なんでもないよ」

久美子（今の感じは何？ものすごく懐かしい感じここに何があるつていうの）

そして車を降りると一同すると執事とメイドに挨拶をされて学校の中に案内された。

そこには女子5人がいた。

透華「お待ちしておりましたわ」

純「こいつらが奈良代表？」

一「こいつらとか失礼だよ純くん」

智紀「よろしく」

そしてとてつもないオーラを放つ女子が

衣「さあはじめようじゃないか」

久美子（この人が前年度のMVP）

衣「ほう」

透華「それと最初に言っていた通り男子が1人追加されますがよろしいですね」

赤土「ええ丁度三卓になるので大丈夫です」

透華「では紹介いたしますわ、今回のゲスト福路風音さんですの」

風音「よろし」

挨拶しようと風音が前に出た時風音が久美子をみて固まった。それと同時に久美子

も風音をみて固まる

風音「よろしくお願いします」

一同「よろしくお願いします」



赤土（ゲストって去年の全国チャンピオンだったのかこれは嬉しい誤算だね）  
久美子（どうして夢に出てきた君がいるの？）

風音（どうして久美子が阿知賀に・・・でも生きてて良かった）

透華「それじゃあはじめましょうか」

一同「よろしくお願ひします！」

そうして龍門渕高校対阿知賀高校対福路風音の練習試合がはじまった

## 第六局

対局の少し前

風音「久しぶり・・・久美子さん」

久美子「えっ？君はインターハイチャンピオンの福路風音君だよ、なんで私の名前を知ってるんですか？もしかして君・・・」

透華「準備ができましたわよ」

風音「ごめん・・・」

風音（やっぱり記憶を・・・）

そういう風音は言われた卓に着くそしてみんな割り振られた卓に着いて言った。

久美子「よろしくお願いします」

純「よろしくな」

宥「よろしくね」

風音「よろしくお願いします」

松実宥：25000

井上純：25000

篠原久美子：25000

福路風音：25000

東一局

親番：宥

ドラ表示：(5)

1巡目

久美子手配

(一万二万四万⑤⑥⑥⑦⑧西南南発中)

ツモ

(一万)

久美子(さっきの福路君の・・・)

(西)捨て

4巡目

久美子手配

(一万一万三万四万④⑤⑥⑥⑦⑧南南中)

ツモ

〔赤五万〕

久美子（聴牌かここは役がないからリーチしかないか、〔中〕は河に2枚見えてるから宥さん以外には比較的安全なはず・・・）

〔横中〕捨て

久美子「リーチ！」

風音「ロン！」

久美子「えっ？」

風音手配

〔①②③④⑤⑥⑦⑧⑨北北北中〕〔中〕

風音「120000です」

純「その手を4巡で作ったのかよ」

風音「篠原さん余計な事を考えながら相手できるほど俺は甘くないよ」

久美子「！」

風音「君が考えているように俺は君の知りたいたいことを全部知ってるけどそれとこれは別の話だから本気でやらないならトブよ」

久美子（確かに余計な事を考えて打てるほどここにいる人は弱くない）

久美子「ごめんね風音君、ここからは本気でやるよ」

風音「どうしたんだい急に」

久美子「あつごごめんなさい！自然に出てきちゃって」

風音（もしかしたら・・・）

純「じゃあ続きしようぜ」

松実宥：25000

井上純：25000

篠原久美子：13000

福路風音：37000

東二局

親番：純

ドラ表示牌（九万）

1巡目

久美子手牌

（一万一万一万七万九万一索三索子①②⑤東北北）

ツモ

〔発〕

〔東〕捨て

風音「リーチ！」

〔横発〕捨て

久美子（ダブリー！）

純（やばいな風音がノリまくってるのかそれともあのタコスの模倣か？）

宥（あぶないよー）

そして山の角に差し掛かった時風音が動く

風音「カン」

〔裏西西裏〕

〔北〕捨て

新ドラ表示牌〔南〕

だが次の巡

風音「ツモ」

風音手牌

〔一万二二三万一索二索三索①②③中〕〔裏西西裏〕

ツモ〔中〕

裏ドラ表示牌 (⑤⑥)

風音「ダブリーツモチャンタ三色西ドラ5・・・16000/8000」

ハルエは久美子の卓の様子を見ていた。久美子は他の部員と比べても少し実力が低  
いだけで弱い訳では無い。強いて言えばそんなじやそこらの男子よりは実力があると  
思っていた為たとえインハイチャンピオンでもいい勝負をするかもしれないと思つて  
いた。

赤土（舐めてたね。これがインターミドルを3連覇して去年のインターハイを制覇し  
た男子の実力・・・それにあの子まだ実力を隠してる。久美子達が壊れる前に止めた方  
がいいかもしれない）

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：5000

福路風音：69000

点数を見ても実力差は明らかだった。

赤土（龍門渕の子がいても彼を止められない。けどもしあの子達のがこれを耐える  
ことができれば）

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：5000

福路風音：69000

東三局

親番：久美子

ドラ表示牌〔六〕

久美子（このままだと福路君に削られて終わっちゃう。このまま終わりにたくない。福路君にいや風音君に勝ちたい！また福路君のことを名前で・・・やっぱり私達っていや今は勝つことを考えないと）

久美子手牌

〔二万三万四万一索⑧⑧⑦⑧⑨東北北発白〕

今の久美子の心情を映したかのような配牌だった

〔一索〕捨て

純（篠原の雰囲気が変わったな俺も負けるつもりはない）



宥（まだ久美子ちゃん諦めてないんだ、私だつて）

6 巡後

風音「リーチ！」

〔横赤⑤〕捨て

7 巡目

久美子手牌

〔二万三万四万⑧⑧⑦⑧⑨東北北発発〕

ツモ

〔発〕

久美子（発ドラリーかダメでもいいけどダメで点をとつても風音君に間に合わないならこの牌を切つて負ける方が何もしないで負けるよりはましです！）

久美子「とおらばリーチ！」

〔横東〕捨て

純（風音相手に場風牌をきつてリーチかよ）

だが風音は牌を倒さないそして風音が牌をきつた

〔⑧〕捨て

久美子「ロン！」

久美子手牌

〔二万三万四万⑧⑧⑦⑧⑧北北発発発〕

裏ドラ表示牌〔九万〕

久美子「8000」

風音「はい」

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：13000

福路風音：61000

東三局 1本場

親番：久美子

ドラ表示牌〔五索〕

久美子手牌

〔一索二索三索四索五索六索⑤⑦⑨北発発中中〕

〔北〕捨て

風音（あの時のままなら篠原さんから次の直撃を食らうのは俺か・・・）

4 巡目

久美子手牌

〔一索二索三索四索五索六索七索八索⑨発発中中〕

ツモ

〔発〕

久美子「リーチ！」

〔横⑨〕捨て

宥「ポン」

〔⑨横⑨⑨〕

〔①〕捨て

6 巡目

風音（〔⑨〕は安全だが俺を手配に入れてさつきツモったきた〔九索〕をきれば聴牌か・・・確かめてみるかあの時と変わってりのか）

〔九索〕捨て

久美子「ロン！」

久美子手牌

〔一索二索三索四索五索六索七索八索発発発発中中〕 〔九索〕 裏ドラ表示牌⑥

風音（やっぱりか）

久美子「18300」

風音「はい」

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：31300

福路風音：42700

東三局 2本場

親番：久美子

ドラ表示牌〔④〕

久美子手牌

〔六万七万九万五索七索九索④⑤⑤⑥⑥白東北〕

〔東〕捨て

数巡後

久美子手牌

〔五万六万七万五索六索七索④⑤⑥⑥⑦白〕

ツモ

〔二索〕

久美子（・・・）

久美子「リーチ！」

〔横白〕捨て

風音（昔のままで勝てるほど俺は甘くない！）

風音がオーラを放つ

久美子「！」

宥「！」

純（衣並みだ）

風音（〔二索〕これが篠原さんの当たり牌なら・・・）

風音「リーチ！」

〔横一索〕捨て

次の巡

久美子（さっきの・・・）

〔三索〕捨て

風音「ロン！」

風音手牌

（一索子二索子四索子五索⑧⑧⑧南南南東東東）（三索）

裏ドラ表示牌（一索）

風音「24600」

久美子「・・・」

風音「悪いけど篠原さんのいや久美子さんの打ち方は知ってる、その弱点もね」

久美子「弱点・・・」

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：6700

福路風音：67300

久美子（私の弱点ってなに昔のままなら勝てないって・・・いや私は負けたくない！）

風音（折れないんだ・・・やっぱり変わってないな。）

東四局

親番：風音

ドラ表示牌〔北〕

1 巡目

久美子手牌

〔四万赤五万④④⑤赤⑤⑥⑥四索赤五索六索北北東〕

久美子（なんで〔東〕がかぎ福路君の親番の時は東が全部彼に集まるはずなのに……なんでそんなことを私は知ってるんだろう。でもこの〔東〕になんか意味があるような……前にも1度あつた気がする。前つていつ？でもこの〔東〕を使えばもしかしたら）

久美子「リーチ！」

〔横東〕 捨て

風音（東だど……俺の支配をうわまわってるのかここは）

風音「カン」

〔横東東東東〕

新ドラ表示牌〔北〕

〔二万〕 捨て

数巡後

風音「ポン」

〔横六万六万六万〕

〔四万〕捨て

1 巡後

風音「カン」

〔裏三万三万裏〕

新ドラ表示牌〔二万〕

風音「もう一個カン」

ツモった〔六万〕を使って加槓しようとした

久美子「ロン」

久美子手牌

〔四万赤五万④④⑤赤⑤⑥⑥四索赤五索六索北北〕〔六万〕裏ドラ表示牌〔西⑦⑧〕

久美子「槍槓！12000」

風音「！」

久美子「私も風音君の癖を知ってるんだよ……おかしいよね君とは初めて打ったはずなのに体か覚えてるんだ」

風音「へえやっぱり記憶は無くなってても体か俺と打った経験は覚えてるみたいだ」



ね。ここからは本気で相手をするよ久美子さん！)

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：18700

福路風音：57600

そうして対局は後半に突入する

# 第七局

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：18700

福路風音：57600

南一局

親番：宥

ドラ表示牌〔四万〕

七巡目

久美子手牌

〔四万五万六万二索二索二索南南発発発白中〕

ツモ

〔白〕

久美子（リーチかけるしかないよね・・・でもそれを狙い撃たれる可能性も）

〔中〕捨て

純「ポン！」

〔中中横中〕

⑨捨て

風音「ポン」

⑨横⑨⑨

〔一索〕捨て

九巡目

風音が牌を切る

〔南〕捨て

久美子「ロン！2400」

久美子手牌

〔四万五万六万二索二索二索南南発発発白白〕〔南〕

松実宥：17000

井上純：9000

篠原久美子：21100

福路風音：55200

南二局

親番：純

ドラ表示牌〔七万〕

1巡目

久美子手牌

〔一万三万一索二索三索七索九索⑤⑧⑨東南南〕

ツモ

〔一万〕

〔東〕捨て

5巡目

久美子手牌

〔一万一万三万一索二索三索七索九索⑦⑧⑨南南〕

ツモ

〔八索〕

久美子（聴牌か）

〔三万〕捨て

6巡目

純（げつ場風牌・・・風音に1番危ないからこれはきれない、それに篠原も聴牌して

そうだ捨牌からしてチャンタかなら

⑤捨て

7巡目

久美子「ツモ！」

久美子手牌

〔一万一万二索二索三索八索七索九索⑦⑧⑨南南〕〔南〕

久美子「4000/2000です」

松実宥：15000

井上純：5000

篠原久美子：29100

福路風音：53200

南三局

親番：久美子

ドラ表示牌〔西〕

久美子（最後の親番、）

久美子手牌

〔二万二万二万三万四万五万四索五索七索④⑥⑧〕白

久美子（これはなかなかだけどこれを当てるのができるのは風音君だけ・・・通用するかわからないけど）

〔白〕捨て

12 巡目

久美子 手牌

〔二万二万三万三万四万四万四索五索六索④⑥⑧⑨〕

ツモ

⑤

久美子 「リーチ！」

〔横⑨〕捨て

風音 「ポン」

〔横⑨⑨⑨〕

⑤ 捨て

13 巡目

風音が純に差し込む

〔中〕捨て

純「ロン!6400」

純手牌

(五万五万五万六万六万六万①②③発発発中) (中)

純(こいつ・・・差し込んだな)

松実宥：15000

井上純：11400

篠原久美子：29100

福路風音：46800

南四局

親番：風音

ドラ表示牌〔発〕

久美子(ドラが風牌じゃない)

はじまった瞬間にとってもないオーラが風音から放たれた。だが最初のオーラが飛んできたが風音は全く動かないだが河には1枚も風牌が出てきていなかった。

10巡目

風音「カン」

〔裏東東裏〕

新ドラ表示〔九万〕

風音「カン」

〔裏南南裏〕

新ドラ表示〔九万〕

風音「カン」

〔裏西西裏〕

新ドラ表示〔⑤〕

風音「これで最後・・・カン！」

〔裏北北裏〕

新ドラ表示〔⑦〕

風音「ツモ！」

風音手牌

〔二万一万〕〔裏北北裏〕〔裏西西裏〕〔裏南南裏〕〔裏東東裏〕

風音「ツモ、嶺上開花、四暗刻、四槓子、大四喜和、ドラ2・・・32000オール」

最終結果



松実宥：—17000

井上純：—20600

篠原久美子：—2900

福路風音：142800

赤土（嘘でしょこれが高校2年生だなんて）

久美子（・・・）

宥（・・・）

久美子「ありがとうございます。あれっ？」

立ち上がろうとした時力が入らず倒れた。

一同「大丈夫ですか？」

風音「気を失ってる」

透華「萩義」

「はい。篠原様を客室にお連れします」

2時間後

久美子「うっうう」

辺りを見渡しても誰もいなかったがドアの先から声が聞こえていた。

久美子「みんなの声が聞こえる。それに・・・思い出したよ風音君」

そして扉を開けて部屋から出た

穂乃「大丈夫ですか久美子さん！」

久美子「だつ大丈夫だよ。皆さんもお騒がせしました」

憧「良かった」

灼「心配しました」

玄「何ともない？」

宥「大丈夫？」

風音「少し風に当たってきました」

そう言つて風音は出ていった、この後を追うように久美子も出ていった。

風に彼の金髪が揺れていた。

風音「どうしたんだい？篠原さん」

久美子「篠原さんなんて他人行儀すぎない？風音君」

風音「でも覚えてないって初めて会つたって」

久美子「うん・・・倒れるまで。でも倒れる前も夢になつて記憶の一部が夢に見えて

たんだ」

すると風音が久美子に抱きついて言った

風音「・・・生きてて良かったあの後連絡が届かなくなつて君からの手紙を君の両親から受け取つて」

久美子「そうだったんだ・・・でも私は生きてるし風音君にあえて良かった。」  
2人で抱き締めあつて再会をよろこんだ。

それを覗き見るほかのメンバー達。

透華「風音さんがあんなに好意を出すところなんて初めて見ましたわ」

憧「久美子さんと福路さんつて知り合いだったのね」

穩乃「でもただの知り合いであんなことにならないでしょ」

衣「衣も風音に抱きつきたいぞ」

一「今はダメだよ」

玄「おもちがへこんで」

純「でもこうやつて見るとちよつと変だよな・・・身長的に」

一「それは言つちやダメだよ風音君に聞かれたらものすごく怒られるよ」

智紀「と言うより覗きがバレてもかなり怒られると思う」

灼「たしかに」

透華「バレたらたしかにヤバげですわね」

そういい部屋に戻った。その数分後に風音達も戻ってきて試合が再開された。そして数時間後試合が終わり見送りを受けて奈良に帰って行った。

赤土「どうだった？」

穂乃「みんなとつても強かったです」

憧「少し悔しいかったわね」

宥「それに・・・」

赤土「ああ福路君か」

一同「はい」

赤土「まああれが全国チャンピオンに4回なってる人の実力って事だよ。それにあの中で福路君に対抗できるのは天江さんと後半の久美子だけだったし」

穂乃「たしかに最初の風音さんとの対局でも食らいついてましたもんね。後半にやった試合も福路さんと一緒に暴れてましたし！」

灼「その暴れてた人はそこでニヤニヤしてるけど」

灼に指さされた先に久美子がだらしない顔でにやけていた。そこで憧が思い出した

かのように

憧「そう言えば夢にでてきてた男の子ってもしかして福路さん？」

玄「それ私も気になるよ！」

久美子「そうだよ。風音君と最近毎日会ってたんだ夢の中だけど」

宥「でも福路君の呼び方が最後の方変わってたり夢の中の男の子が福路君ってわかつたってことは……」

運転手のハルエを除くメンバーの全員の視線が久美子に向く

久美子「……記憶をとりもどしました。辛いこともあったけど風音君の事を思い出せてよかった」

憧「それでどうなの？」

久美子「えっ？」

憧「福路さんの事好きなの？」

久美子「／／／」

穩乃「わかりやすい」

玄「でも福路さんってモテそうだよね」

灼「たしかにあの容姿だからね」

宥「福路君身長的に抱きやすそうであつたかそう」

穩乃「透華さんが言つてたよ、今風音さん争奪レースで一番に出てるのは清澄の部長だつて」

それを聞いた途端久美子がドス黒いオーラを纏う

久美子「負けない麻雀も風音君の事も」

そうして久美子は記憶を取り戻しほかのメンバーも大きい経験を積んで遠征一回目が終わった。

## 第八局

全ての遠征を終えて全国の会場である東京に向かっていた。その途中千里山高校のメンバーと出会う。そして現在バスの中では……。

玄「でもちゃんとみんなで行けて良かったね」

憧「そうね、1人もう戻ってこないかと思ってたけど」

憧が桂馬をニヤニヤしながら見る

桂馬「うるさい。天道に負けて自分を見つめなおして腕を磨いていたんだ。もう誰にも負けたくないからな」

「素晴らしい手に持っている牌譜に目を向ける」

穂乃「桂馬さつきから誰の牌譜見てるの？」

桂馬「去年の優勝者の牌譜」

憧「それって」

久美子「風音君の！」

桂馬「ああ。風音くん？お前ら福路風音と知り合いなのか？」

憧「まあね、長野に遠征に行った時あつちも呼ばれて龍門渕との試合の時に戦った

わ

桂馬「・・・どうだった」

憧「強かったよ、さすが全国の頂点に4回なってるだけあるなって」

穩乃「あの時は誰もあの人に勝てなかったよ」

宥「あれはとつても寒かったよー」

灼「あれはチート」

久美子「風音君かっこよかったです。それに昔より遥かに強くなりました。」

桂馬「かっこいい？昔より強くなった？」

穩乃「あつそう言えば桂馬には言つてなかったね、久美子さん記憶を取り戻したんだ」

桂馬「なるほどそれで昔福路と知り合いだつたということか」

赤土「もうそろそろ着くから準備して」

一同「はい！」

数分後ホテルのチェックインをすませ部屋に向かう

赤土「デラックスのツインを3つとシングルルームを2つ取つてある」

憧「うわ贅沢！」

穩乃「部屋割り決めてちゃつちやと休みましょう」



部屋割り

穂乃・憧

玄・宥

灼・赤土

久美子

桂馬

赤土「久美子ほんとにこれでいいの？私シングルに行くけど」

久美子「私は大丈夫です。あと少し休みます」

赤土「わかった」

桂馬「では俺も部屋で休んる。用があつたら呼んでくれ」

久美子と桂馬はそう言い各自部屋に戻った。

憧「ついに来たね東京・・・全国大会」

穂乃「うん・・・」

憧「和に会いに行く？」

穂乃「いや向こうが来ないならこつちも行かない」

憧「まずは清澄と戦ってみたいね」

翌日阿知賀のメンバーは団体戦の抽選会場に来ていた。

赤土「じゃあ灼抽選お願いね」

灼「はい」

久美子「がんばってー」

穩乃「ぶちかませー」

玄「灼ちゃんフアイト！」

宥「そういうえげなんで灼ちゃんが部長なんですか？」

赤土「お唯一の3年生としては不満か？」

宥「いえむしろ私は壇上で抽選とか無理なのでありがたいですけど」

赤土「チームでしっかりしてるのが久美子と灼だからねでもどちらかと言うと久美子

は後ろで支える方が向いてるかなって」

宥（納得しちゃった）

赤土「じゃあうちらは観客席に行こう」

穩乃「なーもしぐーぜん和に会っちゃったらどうする？」

憧「それはもう仕方ないんじゃない？」

穩乃「んー会っちゃうかもなー」

憧「ホントは早く会いたいからね」  
ゾワツ

そして観客席に向かってしていると反対側から2人の男女がものすごいオーラをだして歩いてくる。そしてすれ違った1人は軽く会釈して通り過ぎた。

穩乃「え何？」

憧「ああの制服」

久美子「今の風音くん」

玄「それと一緒にいたって事は」

穩乃「清澄!!」

そして穩乃は言葉を思い出す

衣「衣に土をつけたのはノノカじゃない・・・清澄の嶺上使いだ」

穩乃（同じ年なんて言っただけ名前・・・たしか咲・・・宮永咲！私の倒すべき相手だ！）

桂馬（会釈した時あいつは俺の事なんて見てなかった。福路風音お前を頂点から引きずりおろしてやる）

## 第九局

抽選の翌日ホテルではミーティングが行われていた。

赤土「もう見てると思うけど昨日の抽選結果」

穩乃「清澄とは完全に逆側じゃん！」

憧「そうだよ。昨日玄が決勝まで行かないとねって言ってたじゃん」

穩乃「でも和達の学校と当たる前にとんでもないことあたる」

久美子「白糸台高校」

憧「私達が誰も勝てなかった三箇牧の」

玄「荒川憩さん」

憧「あの人が言ってた。白糸台の宮永照はヒトじゃないって」

一同が暗くなる・・・

赤土「ま暗くなったところでどうなる訳でもないとりあえず最初のタスクをひとつずつ

っ

穩乃「東京見物！」

憧「切り替えはや！」

赤土「それはインハイが終わってから今日はホテルでテレビの前」

宥「左上ブロックの1回戦の観戦でしょうか？」

赤土「いや富山・福島・岡山の地区大会の映像だよ」

灼「昨日の」

赤土「こそ」

赤土「初戦の相手をチェック確実に倒せるようにね・・・あと準決勝から久美子を入れるわ」

穏乃「どこに久美子さんが入るんですか？」

赤土「灼には悪いけど中堅を久美子と変わってもらおう」

灼「!」

赤土「おそらく準決勝には白糸台と千里山がくるその中堅を抑えないとうちの勝ちはない。灼ごめんなさい」

灼「私は大丈夫です。久美子に準決勝からは任せます」

久美子「・・・」

灼「私の分まで頑張って」

久美子「うん」

赤土「じゃあ始めましょう」

そして1回戦の相手の情報を得るために対戦の映像を見る。そして翌日1回戦の結果をいえば阿知賀高校がぶっちぎりで突破した。久美子は1人でホテルの近くを散歩していた。そして夕日が綺麗な公園を見つけてベンチに座っていた

久美子「灼ちゃんには悪いことをしちやっとな」  
そうつぶやく。

久美子（でも私はその分勝たないと）  
すると後ろから声が聞こえた

風音「久しぶり久美子」

久美子「えっ？風音くん！どうしてここに？」

風音「いや俺も個人戦があるし団体でうちの女子が参加してるから」

久美子「いやそういう事じゃなくて、どうしてここに居るのってこと」

風音「ああそういう事か。風に当たりたくて散歩してたんだそしたら久美子がいたから声をかけたんだよ」

久美子「私と同じか」

風音「なんか悩み事？」

久美子「うん。私補欠だったんだけど私準決勝から出ることになってあつ」

風音「別に部長達に言うような真似はしないよ、それで自分が出ていいのかって事で

悩んでるのか」

久美子「うん」

風音「そんなこと気にしてたらキリがないぞ。久美子達の目標がどこかは知らないけど勝つためなら仕方の無いことだよそれに変わる子も全力でやってるなら久美子はそれに応える義務がある・・・団体戦嫌いの俺が言うことじゃないけど」

久美子「ありがとう風音くん」

風音「それに大会で活躍できれば国麻に奈良代表で選ばれるかもしれないだろ国麻は男女一緒だからな個人戦なら俺とも戦える・・・俺が選ばれればの話だけど」

そう言い風音はベンチを立つ

久美子「そつかなら選ばれる位の活躍を見せなきゃね・・・風音くん」

風音「ん？」

久美子「いやなんでもない。個人戦頑張つてね」

風音「ああじゃあな」

## 第十局

二回戦が終了した夜部屋でミーティングをしていた。最初は祝勝会のムードだったが赤土と桂馬の一言によって暗い雰囲気になっていた。そして桂馬自身が集めた情報をまとめたものを机の上に置いて桂馬は自室に戻った。それには準決勝の対戦相手の癖や打ち筋についてもしつかりと書かれていた。桂馬がまとめたデータを見たあと穂乃の提案でラーメンを食べに行き、帰り道で赤土のプロ入りの話を聞き赤土に不信感を持っていた時誰かにぶつかかった。

玄「ごめんおねーちゃ」

宥「私こっち」

玄「えじやあこのおもち・・・わわっ」

宥「ふわわっ」

穂乃「何も無いところからヒトが」

蒲原「どしたーモモー」

桃子「急いでたら人にブツかってしまったっす、申し訳ございません」

玄「いえよろけたのはこちらなのですみません」



憧「ちよ待ってこの人……たしかとーよこさん？」

桃子「ろ？なんで名前……」

憧「ほらっあのお屋敷で長野ローカルの録画見せて貰ったじゃん」

穩乃「？……！ほんとだ副将戦で和と透華さんより点を取った人だ！」

桃子「？おっぱいさんの知り合いっすか？」

宥「透華さんご言ってた鶴賀学園の消える1年生」

穩乃（ステルスモモ！）

そして色々あり蒲原さんの実家にお邪魔することになった。

穩乃「広い」

蒲原「ただいまゆみちん」

加治木「おつかれそちらが？」

蒲原「阿知賀高校の皆さんだ」

加治木「奈良県代表か鶴賀学園加治木ゆみだよろしく」

加治木「なるほど明日までに強くなりたいと」

久美子「よろしくお願います」

加治木「たしかにうちには地区大会の区間1位が2人ほどいるが普通は県3位のこち

らが格下だ」

穩乃「それはわかってるんですがうちもこのままじゃ」

加治木「それならとりあえず打ってみよう。うちも奈良1位が相手なら後進の育成に  
ありがたいそちらに個人戦の代表がいますか？」

憧「えいや」

蒲原「おっじゃあ迎えに行つてくるぞ」

加治木「頼む大会規定で個人戦の代表同士は同じ高校でない限り練習試合をしては  
いけないことになっているしかしそちらが個人戦に出ていないなら問題ない」

灼「じゃあ今呼びに行ったのは」

加治木「うん長野県個人戦2位風越高校キャプテン福路美穂子」

宥「！」

穩乃「福路？」

憧「ちよつと待つて福路つて」

灼「まさか」

玄「もしかして」

久美子「風音くんの・・・」

加治木「？福路君とは知り合いなのか」

するとドアが空いたそこに男子1人と女子が3人入ってきた。

美穂子「お夜食作ってきました」

憧「なんと気が利く県2位！」

三森「なんだよ加治木先輩こんな時間に呼び出して、いきなり蒲原先輩にこいつて拉致られたんだけど」

穩乃「この人は？」

三森「ああ鶴賀学園2年三森元輝」

加治木「三森は個人戦3位のうちの男子だ」

三森「・・・なるほど練習試合か」

加治木「頼めるか？」

三森「いいですよ俺も個人戦に向けて調整したかったし」

加治木「じゃあ始めようか」

数時間後

加治木「そろそろお開きにしよう」

一同「ありがとうございます」

美穂子「私もいい経験が出来てよかったわ」

三森「俺もいい調整になった」

「穏乃「少し質問いいですか？美穂子さんって福路さんのお姉さんなんですか？」

美穂子「ええそうよ。本来ならここに？呼ぼうと思っただけど今日は風音2つの高校と練習試合があつたらしくていかなかったのよ」

久美子「やっぱり」

玄「姉弟で揃つて全国出場つて凄いです」

憧「福路さんつてかなりお姉さんにだつたんですね」

三森「あんたら福路と知り合いだったのか・・・篠原さんだつかたしかに納得だ」

加治木「蒲原阿知賀の皆さんを送つてやつてくれないか？」

三森「加治木さんおれと風越は？」

加治木「阿知賀と風越とお前のホテルが逆方向だからな三森しつかり風越の皆さんを護衛するんだぞ」

三森「わかりましたでは行きますか」

美穂子「よろしくお願いしますではおやすみなさい」

三森「ちゃんと送りますよ、皆さんおやすみなさい」

そして風越と三森はホテルに帰つていった

三森「すいませんね風越の皆さん来てもらったのに」

美穂子「大丈夫よ私たちはホテルが近いしちゃんと護衛も付けてくれたしね」

池田「そう言えばさっきの納得ってどういうこと？」

三森「あれか篠原さんは地区大会では補欠だったんだけど今日打った感じだとあのメンバーの中で頭一つ抜けてる。そして阿知賀のメンバーが福路風音と全員が知り合いだったってことはおそらくあいつと打ってる。」

池田「それで？」

三森「これは推測だが篠原さんは福路風音との試合で覚醒したって所だろうな。それにあんなに強い人がずつと補欠だなんてありえない」

池田「そういう事か」

阿知賀のメンバーはホテルまで送って貰っていた

一同「ありがとうございます」

蒲原「あんまり相手できなくてごめんなーユミちゃんもミッポも明日は清澄の試合だから早く寝るって聞かなくてな」

穂乃「十分です」

蒲原「じゃあまたなー」

「そう言い車を走らせる

灼「重大なヒントを貰ったような」

憧「そう私達が個人戦に出てないからこそ個人戦オンリーの選手なら練習試合をして  
もいいんだ！」

玄「赤土さん方式のおしかけ練習試合だね」

宥「準決勝まで明日1日しかないよ？」

穩乃「でも試すだけ試したい」

憧「もう東京に出てきてる人もいるはず」

久美子「移動と待ち時間に新道寺と白糸台のデータを見たりして」

一同「やっっちゃおう！」

## 第十一局

準決勝が始まった。先鋒の玄は白糸台を除く3人で宮永照を止めて3位で次鋒に回し次鋒の宥は点数を稼ぎ2位で久美子に回した。

久美子「行つてきます」

穩乃「頑張れ」

灼「私の分までたたかつて」

憧「トツプで戻つてきてよね」

久美子「頑張るよ」

素晴らしい控え室から出て対局室に向かう

セーラ「あれ昨日の短髪の子やないんか」

久美子「はいよろしくお願ひします」

セーラ「おおよろしゅうな」

久美子（実況とか記者には色々言われてるんだよね）

実況「おっと阿知賀高校は2開戦とは違い控えの選手を投入してきたー」

小鍛冶「そうですね。篠原さんは準決勝が公式戦初の試合みたいです」  
 実況「まさに初・体・験！そして対局室に選手が揃い準決勝中堅戦前半開始です」

東一局

渋谷堯深：187400

篠原久美子：99300

江口セーラ：50500

江崎仁美：62800

親番：渋谷

ドラ表示牌（①）

2巡目

久美子手牌

①②④④⑤四索五索六索東東南南北

ツモ〔南〕

久美子（みんなから言われたのは連荘すると渋谷さんのオーラスの時の手配が大変なことになるから連荘させないように打たないと。）

〔北〕捨て



## 控え室

桂馬「篠原さんで大丈夫なんですか？実力で言ったら鷺森先輩の方が強いんじゃない？」

赤土「たしかにそうだったわ。遠征の時までね」

桂馬「遠征の時……」

赤土「桂馬はいなかったから無理もないけど龍門渕に行った時福路風音と対局して久美子は覚醒したの。それから部員の誰も久美子に勝ってないの」

桂馬「……」

赤土「見てればわかるわ」

## 4 巡回

久美子手牌

①②④④⑤四索五索六索東東南南南

ツモ ③

久美子（渋谷さんは最初に東を捨てたなら渋谷さんからならでるかな、他2人からは出和了は期待できないね。まあ自分で持つてくればいいんですけどね）

久美子「リーチ！」

〔横⑤〕捨て

5巡目

久美子「ツモ!6000/3000」

〔①②③④④四索五索六索東東南南〕 ツモ〔東〕

裏ドラ〔⑨〕

東二局

渋谷堯深：181400

篠原久美子：111300

江口セーラ：47500

江崎仁美：59800

親番：久美子

ドラ表示牌〔④〕

久美子（この局は上がりたくないんだけどななんでこんな手牌なのかな）

久美子手牌

〔四萬赤五萬五萬六萬七萬四索赤五索六索③④赤⑤発東白〕

久美子（これだと断么三色ドラ3が見えてるから和了っておきたいけど連荘すると渋

谷さんの一打目を増やすことになる。それなら渋谷さんを凹ませればいい)

〔東〕捨て

8巡目

久美子手牌

〔四萬四萬赤五萬五萬六萬七萬四索赤五索六索④赤⑤⑥発〕

ツモ〔六萬〕

久美子(リーチをかけたところだけどこは我慢、聴牌気配のある渋谷さんがリーチするのを待つ)

〔発〕捨て

江口「ポン！」

〔横発発発〕

〔六萬〕捨て

11巡目

渋谷「リーチ！」

〔横③〕捨て

12巡目

久美子

〔四萬四萬赤五萬五萬六萬六萬六萬七萬四索赤五索六索④赤⑤⑥〕

ツモ〔東〕

久美子（これならあたることはなさそう）

久美子「リーチ！」

〔横東〕捨て

14 巡目

渋谷

〔七萬〕捨て

久美子「ロン！24000」

〔四萬四萬赤五萬五萬六萬六萬七萬四索赤五索六索④赤⑤⑥〕

裏ドラ〔1萬〕

東二局 一本場

渋谷堯深：157400

篠原久美子：135300

江口セーラ：47500

江崎仁美：59800

〔七萬〕

この局は久美子は上がらずにノーテンで流局させた。

控え室では

穩乃「久美子さんどうしていつもみたいいに3連続で直撃させなかつたんだろ」

憧「たぶん渋谷さんの一打目を増やさないようにする為にしてもわざわざ聴牌を崩してノーテンで流すなんて」

赤土「でも久美子の判断も間違つてないよ。あのまま突つ張つてたらたぶん江口セーラの倍満に振り込んでいた」

桂馬「まさかそれも察知して敢えて降りたと言うんですか？」

赤土「そうじゃないと説明がつかないよ……それに久美子には私達に見えてないものが見えてるのかもしれない」

そこからは久美子は動かずに振り込まない事を前半の南一局まで続けた。その間に江口に満貫と倍満をつもられ失点をした。江崎の満貫に渋谷が振り込んでいた。

南二局

渋谷堯深：139400

篠原久美子：129300

江口セーラ：71500

江崎仁美：59800

親番：久美子

ドラ表示牌（一萬）

久美子（だいぶ白糸台を凹ませたあとは撃ち抜くのみ）

久美子手牌

〔一萬二萬三萬四萬五萬六萬七萬八萬北北白白發〕

久美子「リーチ」

〔横發〕捨て

江口「タブリーやと・・・ポン！」

〔横發發發〕

〔東〕捨て

10巡目

渋谷

〔九萬〕捨て

久美子「ロン！24000」

久美子手牌

（一萬二萬三萬四萬五萬六萬七萬八萬北北白白）（九萬）

裏ドラ（①）

久美子（本当は新道寺に当ててトバしたいんだけどなかなかきつてくれない）

南二局一本場久美子は江口セーラの倍満に振り込む自分がリーチかけた後追っかけリーチをされその1巡後に振り込んだ。だが南三局を久美子は江崎の安手に差し込んで流した。

南四局

渋谷堯深：115400

篠原久美子：133400

江口セーラ：87500

江崎仁美：63700

親番：江崎

ドラ表示牌（七索）

1巡目

久美子（9枚確定してるのかたしか（東発発発白白中中）だよねこれだけで大三元が見えてるし渋谷さんの能力を他の人達がどれだけ知ってるかだよね）

久美子手牌

〔①①②〕一萬一萬一萬一索一索一索二索九索九索中

ツモ〔八索〕

久美子（よりもにもよつて中が手牌に……いやこれは早めにきればまず当たることのない牌、最悪渋谷さんの手を進めることになるけどそれでもこの手は和了つておきたい）

〔中〕捨て

渋谷「ポン！」

〔中中横中〕

〔九索〕捨て

久美子「ポン」

〔横九索九索九索〕

〔②〕捨て

3 巡目

久美子手牌

〔①①〕一萬一萬一萬一索一索一索二索八索〔横九索九索九索〕

ツモ〔⑨〕

〔八索〕捨て



## 5 巡目

久美子手牌

①①一萬一萬一萬一索一索一索二索⑨〔横九索九索九索〕

ツモ〔⑨〕

〔二索〕捨て

渋谷「ポン！」

〔二索二索横二索〕

〔東〕捨て

久美子（びっくりした。あれで和了されてたらせつかく稼いだぶんがパーになる所だった。これであつちも聴牌だからチキンレースのはじまりだ）

12巡目

渋谷〔①〕捨て

久美子「ロン清老頭32000」

渋谷「・・・はい」

実況「前半戦終了ー！阿知賀高校の篠原久美子が2位との差を2倍にして前半戦終了させたー！」

小鍛冶「初の公式戦の試合というのに全く緊張などを感じない対局でしたね。ですが次からは各校からのマークが厳しくなるでしょうから」

控え室では

桂馬「地区大会前とは別人だ。」

赤土「ね言ったでしょ？今の久美子は地区大会まで自分を縛っていた悩みを解消した。それが久美子があまり強くなかった理由。それが取り払われた今彼女は止められない」

憧「それに久美子は自分の能力を1度も使っていない」

赤土「たぶん後半戦で使う気だよ。そこでどこかをトバそうとするその為に前半能力を使わずに白糸台をあそこまで削ったんだよ。飛ばせなかった時万が一白糸台に役満を和了られてもいいように」

宥「あれ？久美子ちゃん戻って来ませんね」

赤土「久美子は控え室に戻らないって言ってたわよ。集中したいらしいから」  
穩乃「そうなんですか」

観客席

風音（なるほど後半に勝負を仕掛ける気かでもはたして上手くいくかな。全国はそんなに甘くないぞ久美子）

前半戦終了時

渋谷堯深：83400

篠原久美子：165400

江口セーラ：87500

江崎仁美：63700

## 第十二局

全国大会Aブロック準決勝中堅戦前半の結果は皆の想像とは全く違うものだった。去年の優勝校の白糸台が無名の選手に10万点近く失点したからだ。しかもその選手が騒ぐのも無理はない。そして準決勝中堅戦の後半戦が始まった。前半戦のように久美子が稼ぐと思われていたが千里山の江口セーラが意地を見せて3連続和了を決めていた。

東三局 一本場

渋谷堯深：75400

篠原久美子：145400

江口セーラ：115500

江崎仁美：63700

親番：江口

ドラ表示牌〔四萬〕

8巡目

久美子（2回も振り込んじやったのはかなり痛いかな。でもこれ以上連荘させたらダメだ。江崎さんと渋谷さんからは出和了出来そうにないし江口さんがリーチをかけたあとを狙う）

久美子手牌

（一萬一萬五萬赤五萬六萬六萬①①②③③東発）

ツモ（東）

久美子（ここはリーチは我慢。発はまだたでてないけど勝負をしないと）

（発）捨て

江口「ロン！24300」

江口セーラ手牌

（四萬五萬六萬七萬七萬七萬白白中中中中発発）（発）

久美子（やっぱり私を狙ってる。前の巡で渋谷さんから直撃を取っていたのにスルーしてまで）

セーラ（やっと気づいたみたいやなでももう遅いで）

東三局 二本場

渋谷堯深：75400

篠原久美子：121100

江口セーラ：133900

江崎仁美：63700

親番：江口

ドラ表示牌〔西〕

久美子（まづいよ。渋谷さんの一打目が増えるし私まで失点してる。このまま負けちやうのかな私相手をトバしてなんて考えてたけど私には無理だ。前もこんなことあつたな風音くんと打つてた時だその時はどうしたんだっけ。．．．簡単なことだったただだひたすらに点を取りに行つたけリスクは上がるけどその分稼げば問題ない。トバすとかそういうのは考えなくていいただ点を取りに行くことだけを考えるんだ）

1 巡目

久美子手牌

〔七萬七萬七萬七萬⑥⑦⑦一索七索八索北北南〕

ツモ〔⑦〕

久美子（風音くんみたいいな手牌してるな）

〔一索〕捨て

5 巡目

江口「リーチ」

〔横北〕捨て

久美子「ポン」

〔北北横北〕

〔南〕捨て

7巡目

久美子手牌

〔七萬七萬七萬七萬七萬⑥⑦⑦⑦七索八索〕

〔北北横北〕

ツモ〔九索〕

久美子「槓」

〔裏七萬七萬裏〕

新ドラ表示牌〔⑤〕

ツモ〔九萬〕

〔九萬〕捨て

8巡目

江口〔⑥〕捨て

久美子「ロン12600」

久美子手牌

⑥⑦⑦⑦七索八索九索 〔裏七萬七萬裏〕 〔北北横北〕 ⑥

東四局

渋谷堯深：7 5 4 0 0

篠原久美子：1 3 3 7 0 0

江口セーラ：1 2 2 3 0 0

江崎仁美：6 3 7 0 0

親番：江崎

ドラ表示牌 ③

久美子（能力の発動は今しかない！）

1 巡目

久美子手牌

〔五赤五五①⑤赤⑤⑦五索七索九索東東東〕

ツモ 〔五索〕

〔九索〕捨て



## 8 巡目

久美子手牌

〔五赤五五⑤⑤赤⑤⑦五索五索七索東東東〕

ツモ 〔⑦〕

久美子 「リーチ」

〔横七索〕 捨て

12 巡目

江口 〔⑦〕 捨て

久美子 「ロン16000」

久美子手牌

〔五赤五五⑤⑤赤⑤⑦⑦五索五索東東東〕

裏ドラ 〔西〕

〔⑦〕

南一局

渋谷堯深 : 75400

篠原久美子 : 149700

江口セーラ：106300

江崎仁美：63700

親番：渋谷

ドラ表示牌 (①)

1 巡目

久美子手牌

(二二二二二索二索三索②②中中中発白)

ツモ (発)

久美子「リーチ」

(横白) 捨て

江口 (またかいなこいつの運はどれだけやばいねん)

6 巡目

久美子「槓」

(裏二二裏)

新ドラ (九索)

ツモ (白)

〔白〕捨て

8巡目

江口（ここで発をツモってくるか。かなり危険やけど発さえ通せば四暗刻聴牌やそれ  
にこのまちなら阿知賀からやすいここは攻めなきやあかん）

江口「とおらば」

〔発〕捨て

久美子「・・・通りませんロン！24000」

久美子手牌

〔一索二索三索②②中中中中発発〕〔裏二二裏〕〔発〕

裏ドラ（一東）

南二局

渋谷堯深：75400

篠原久美子：173700

江口セーラ：82300

江崎仁美：63700

親番：久美子

ドラ表示牌 (⑥)

久美子手牌

(一 二 四 五 索 六 索 七 索 ⑤ 赤 ⑤ 中 中 東 東 白 北)

(北) 捨て

12 巡目

江崎 「ツモ 6 0 0 0 / 3 0 0 0」

江崎手牌

(② ③ ④ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑦ ⑦ 二 三 四 五) (赤 五)

南三局に入り江口セーラが意地を見せて二連荘したあとそれを江崎が安手で流してオーラスになった

南四局

渋谷堯深 : 7 5 4 0 0

篠原久美子 : 1 4 1 6 0 0

江口セーラ : 1 1 0 5 0 0

江崎仁美 : 6 8 2 0 0

親番：江崎

ドラ表示牌〔西〕

久美子（11枚確定かたしか〔九発発発中中白白白東東〕だよねうわ役満が2つ見えるよ）

久美子手牌

①②②③④④⑤⑦⑦⑧⑨⑨九

ツモ〔①〕

久美子（一打目で九切ってるから安全か）

〔九〕捨て

4巡目

渋谷「ツモ！四暗刻、大三元は16000／8000」

渋谷手牌

〔一一発発発中中中白白白東東〕〔東〕

実況「中堅戦終了」

久美子「ありがとうございます」

そう言い対局室をでた。そして控え室に戻る

憧「もつと稼いでくるから」

穩乃「お疲れ様です」

灼「お疲れ様」

桂馬「凄かったぞ」

赤土「後半の最初はどうなるかと思ったよまあ立て直せて良かったわ」

久美子「ありがとうございます」

そして副将戦、大将戦が行われた。副将戦では白水哩を抑えることができなかつたが1位で通過したが大将戦で大星淡と鶴田姫子が暴れまくり2位に落ちて最後の最後で穩乃が和了し再び1位となり、その後淡が和了したが裏ドラが乗らずに白糸台は2位で準決勝通過となつた。

そして決勝戦の会場の下見に行きその帰り道久美子は少し散歩をしてくるといい散歩にでた。そして携帯で風音を前散歩の時に出会つた公園に呼び出した。

風音「どうしたんだこんなところに呼び出して」

久美子「風音君今日の試合見ててくれた？」

風音「ああ観客席から見てたよ。前龍門測て打つた時よりも強くなってる。」

久美子「ありがとう。」

風音「それきくために呼び出したんじゃないだろどうしたんだ？」

久美子「うん。明後日の決勝が終わったらまたここに来て！伝えたいことがあるから」

風音「久美子達が勝っても負けてもか？」

久美子「私達が優勝したら来て欲しい、負けたら来なくてもいい」

風音「わかった。うちがどうなるかはわからないけど久美子が勝ったら絶対いくから」

久美子「ありがとう。じゃあ私行くね」

風音「俺もそろそろ戻らないと。ああいい忘れてた」

久美子「何？」

風音「準決勝突破おめでとう」

そう言い風音は走ってホテルに戻っていった。

## 番外編

## I F 誕生日プレゼント

私には悩みがあります。それは風音君への誕生日プレゼントをどうするのかそして当日どうやって誘おうかを1ヶ月前から考えているのですが一向に決まりません。理由のひとつは彼のファンの人がたくさんいていつも風音君の周りには人がいます。私は人見知りが激しいのでそこに入っていく勇氣はありません。それに彼を誕生日に誘ったなんて他の女子に知られたら中学の二の舞になるかもしれないのです。

久美子「はあー」

久「どうしたの？溜息なんかついて」

メンツが揃ってないので部室でダレていて溜息をついていた時部長が話しかけてきた。

久美子「風音君をどうやって誕生日に連れ出そうか1ヶ月前から考えているんですけど中々いい案が思いつかなくて。」

久「そうだったの。たしかに福路君人気だしねあの容姿で去年の全国チャンピオンだ



し

久美子「はいそれもあつて風音君の周りには人が多すぎて話しかけられないんですよ」

久「それはあなたの問題じゃないかしら」

久美子「そうなんですけど・・・」

久「それにはやくしないと誰かに彼とられちゃうわよ」

久美子「・・・そうですね」

久「何今の間はそれに私の事をじつと見つめて」

久美子「いえ、部長もかなり注意しないとないと思ひまして」

久「・・・なんの事かしら」

久美子「目逸らしましたね。風音君は渡しません」

久「まだあなたのじゃないでしょなら私にも・・・あつ」

久美子「やつぱり！いやこんな事言い合つてる場合じゃないの。」

久「それでどうするの？彼の好きな物とかわからないの？」

久美子「いえ風音君が好きな物はリサーチ済みですが何を渡すかに悩んでいて」

久「彼の好きなものってなんなの？」

久美子「えっ部長知らないんですか？」

久美子が得意げな顔になる。

久「くっ」

久美子「相談してるのはこちらなので少しくらいなら教えますよ。」

久「ありがとう」

久美子「彼の好きな物はゲーム、昼寝、アニメ鑑賞です」

久「これだけ聞くとただのオタクね」

久美子「オタクですよ。風音君はカバンにもアニメとかゲームのキーホルダー付けてますし」

久「ならやっぱりゲーム送ったりするのが無難なのかしら」

久美子「いや去年ゲーム送ったんですけど風音君かなりのゲーマーで風音君がやるジャンルのゲームを送ったらもう既に買っていて」

久「あちやーそれは少しやらかしたわね」

久美子「でもその時は持つてるなんて言っただけです。けど風音君の家に行ったら私が贈ったゲームソフトが2つあって」

久「なるほどそれだとゲームは贈らない方が良さそうね。じゃあ枕とは？」

久美子「枕とかは自分で決めないと気が済まないみたいで」

久「彼学校に枕まで持ってきてるもんね」

久美子「それでももうひとつのアニメ鑑賞はアニメのブルーレイやグッズを送っても好きな作品のグッズなんかは既に持つてるから」

久「何その攻略難易度Sみたいな存在」

久美子「しようがないですよ。風音君ですから」

久「うーんそうなる何贈っていいのかわからないわね」

久美子「そうなんです。」

久「でも久美子は簡単に風音君を誘えるじゃない」

久美子「えっ？」

久「気づいてなかったのね。久美子と私達は他の子と違って彼と同じ部活よなら部活

中に誘えばいいじゃない」

久美子「あーそうでした。部長ありがとうございます。」

久「なら良かったわ」

久美子「でも風音君は渡しませんから」

久「あなたブレないわね」

ガチャドアが開く

咲「こんにちは」

優希「こんにちははだじえ」

和「こんにちはは篠原先輩、部長」

久「あれ須賀君は？」

咲「京ちゃんなら福路先輩の手伝いです。」

久美子「えっ？」

咲「なんか先生に雑用頼まれたらしくてそこにたまたま京ちゃんと私が通りかかってそのまま」

久美子「なるほど。宮永さん風音君がどこに行つたか知ってる？えつと体育倉庫の方です」

久美子「ありがとう。それじゃ行つてきます」

そう言い残し風音の元に急ぐ

優希「どうしたんだじよ」

和「さあ？」

久「あの子福路君のこととなると周りが見えなくなるわね」

風音のいる体育倉庫の前に着くと京太郎が体育倉庫の整理をしていた。

久美子「こんにちは」

京太郎「あつ篠原先輩こんにちは」

久美子「大丈夫？変わるよ」

京太郎「えっ？でも女子にこんな仕事やらせるなんて」

久美子「いいからいいから君はまだまだなんだから打って実力上げないと」

京太郎「うっでも」

久美子「須賀君行つてきていいよ。風音君には私が言っておくから」

京太郎「わかりました。ありがとうございます」

そして京太郎は走つて部屋に向かった。

風音「京太郎そっち終わったか？」

久美子「もう少しだよ」

風音「どうして久美子がここに京太郎はどうしたんだ？」

久美子「須賀君と變つてあげたんだ。彼に必要なのは経験だし」

風音「・・・わかった。こっちは終わったからそっち手伝うよ」

久美子「ありがとうつてあれ？近くない？」

風音「仕方ないだろ狭いんだから嫌なら先に部屋戻つていいぞ」

久美子「嫌じゃないよむしろ」

やばいやバいつてもものすごくいい匂い。それに少し風音君汗ばんでてYシャツ透けてきてるし少しする汗の匂いも風音君のならつて私考えてる事おっさんじゃん

数分後

風音「よし終わったー」

久美子「うんそうだね」

私変な顔してないよね。風音君は無自覚で私を刺激してくるからかなり理性保つの大変だよ。それに髪が風に吹かれて綺麗だ。そこら辺の女子よりも可愛い・・・髪？

久美子「そう言えば風音君は髪切らないの？」

風音「きつてもいいんだけど程よく切ると姉ちゃんにそっくりになるから髪はばして  
る。」

久美子「そうなんだ。あといつも髪留め違うよね」

風音「ああ姉ちゃんが買ってきてくれたんだ」

久美子「そうなんだ」

風音「じゃあ部屋急ぐぞ」

久美子「あつ待つて風音君」

そして今日の部活は教師の雑用のせいで少ししか出来なかった。そして数日後風音の誕生日

私は風音君を部活終わりに呼び出すことに成功した。そこでプレゼントを渡すつも

りだった。今日の部活でメンバーからも誕生日プレゼントを風音君は貰ってたけど見たところ被ってなくてよかった。

風音「久美子待った？」

久美子「待ってないよてかさつきまで一緒だったじゃん。」

風音「そう言えばそうだったな」

久美子「えつとね。誕生日おめでどう風音君」

風音「ありがとう。さつきクッキーくれたからそれだと思ってたよ」

久美子「いいやあれもだけどね」

風音「開けてもいい？」

久美子「うん。」

風音「これ髪留め」

久美子「うん。いつも変えてたからよく使うと思ってる」

風音「ありがとう。大切に使う」

久美子「／／／うん」

風音「じゃあ帰ろっか」

久美子「そうだね」

翌日

久「あれどうしたのその髪留め」

風音「これですか？誕生日に貰ったんですよ」

久「そうなんだ」

部長が私をニヤニヤしながら見てくる

風音「変ですか？」

久「いいえかなり似合ってると思うわ」

風音「ありがとうございます。久美子これありがとな」

そう笑顔を向けてきた。

久美子「そう言われると照れるな」

その日私はとても嬉しい気持ちになると同時に風音君への想いがいつそう強くなつた。



## I F 風越編①

今日は天気がよくて屋上で放課後昼寝をしていたらそこに一人の来客が来た。

久美子「風音君」

久美子が体を揺すつてくる、寝ていた俺は無理やり起こされてやや不機嫌だった。

風音「なに？」

久美子「コーチとキャプテンがミーティングだから風音を探してきてつて頼まれて」

風音「なるほど、でもよくここがわかつたな。サボる場所はいつも変えてるから探すのも苦労したと思うけど」

久美子はドヤ顔で

久美子「それは私は私は風音君の一番のパートナーだからね、なんでもお見通しです。」

風音「／／／／」

俺の顔から熱が出てることがわかる

久美子「とにかくみんな集まってるから早く行くよ」

久美子は俺の手を引き屋上から連れ出した。しばらくして部屋に着くと俺以外の男

女含めた全ての部員が集まっていた。

久美子「風音君連れてきました」

久保「よくやった篠原」

池田「風音どこ行ってたんだし」

風音「屋上で寝てたよ」

池田「部活をサボンなし」

風音「ふつ俺がサボったのは部活じゃない、掃除だそれで気づいたら部活の時間が過ぎていただけ」

美穂子「ダメじゃない風音、あとおしゃべりはこの辺にしてミーティングをはじめしよう」

久保「そうだな、福路弟あれ持ってきたんだらうな？」

コーチが俺を軽く睨みながら言う

風音「ああ持つてきてますよ」

俺は鞆の中からUSBを5つ取り出し渡す

久保「これがあれば少しは皆の対策になるだろありがとうな」

風音「はい役立ててください」

久保「じゃあ本題に入る、今年の夏の大会の団体戦メンバーを発表する」

久保「先鋒、福路美穂子」

美穂子「はい」

久保「次鋒、吉留春美」

吉留「はい」

久保「中堅、篠原久美子」

久美子「はい」

久保「副将、福路風音」

風音「はい」

副将で俺が呼ばれたことに部員一同が驚愕の顔になる

久保「大将、池田華菜」

池田「はっはい」

久保「以上5名を団体メンバーとする、ではレギュラーは渡すものがあるからここに残るように、それ以外は練習に戻れ解散！」

部員の中には泣いているメンバーもいたがすぐに部室から出ていく、

久保「じゃあお前達にはこれを渡しておく」

レギュラー達に先程風音が渡したUSBが渡される

池田「コーチこれは？」

久保「これは福路弟が集めた県予選で戦うことになりそうな有力選手の情報だ」

吉留「えっ」

久保「福路弟、パソコンにこれをつなげて見せてやってくれ」

風音「わかりました」

俺は部の備え付けのパソコンにUSBを差し込みファイルを開く

美穂子「凄いわ」

吉留「よくこれだけの情報を」

池田「流石だな！」

久美子「ん？この人って」

久美子は1人の選手に目がいく、

美穂子「この人は！」

風音「上埜久、3年前から公式戦には出てなかったからもう辞めてる可能性もあるけど一応ね」

久保「よしこれを通目を通して置くようにはお前達も練習に戻れ！」

一同「はい！」

そしてレギュラーも練習に戻った。そして部活も終わり3人で下校する。

美穂子「良かったわね3人でレギュラーになれて」

久美子「そうですね去年は私だけ入れなかったから」

風音「まあ去年は先輩もいたからね」

美穂子「今年こそは皆で全国に行きたいわね」

久美子「いけますよ」

風音「行きたいじゃなくて行くんだよ二人とも確かに龍門渕は強いけどさ」

美穂子「そうね」

久美子「あつじやあ私ここだから二人ともおつかれ」

美穂子「お疲れ様」

風音「おつかれ」

久美子は自分たちと道が別れるためここからは二人での下校だった。そしてすぐに家につく。両親に二人でレギュラーに選ばれた事を報告すると両親はとても喜んでいてくれた。そして数日が過ぎ……

県予選当日

団体メンバーが会場に入るとギャラリィが声をあげる

「風越高校だ!」

「部員80名を擁する強豪」

「去年の県予選準優勝校！」

「キャプテンの福路美穂子汚名を返上できるか！」

美穂子「いつまで言われるのかしら」

風音「別に気にする必要無いだろ」

美穂子の横を歩く風音は言う

「風音くん」

「こっち向いてー」

「カツコイイー」

「あの姉弟ほんとに絵になる」

風越高校が会場に入った時から風音には黄色の声援が続いていた。

池田「ほんと風音人気だよなー」

久美子「しょうがないよ、去年のインターハイ覇者である容姿だから」

会場に入ってから妙な感じがしていた。言うなれば強者のオーラと言う奴だ。去年は龍門渚の天江衣しか持っていなかったが天江衣ではないとはつきり言える、天江衣にしてはオーラが弱すぎた。

美穂子「風音？」

風音「何？」

美穂子「なんか怖い顔してたから」

風音「いやなんでもないよ」

「素晴らしい俺は集合場所まで進んだ。」

## 番外編 思い出のペンダント

ある日の部活での出来事

京太郎「そう言えば先輩いつもそのペンダント大事につけてますよね」

風音「ああこれは大切なペンダントだから……、あつバイトの時間だからあがるじゃあな」

京太郎「あつ先輩！」

風音は逃げるように部室から出ていく

咲「大切なペンダントかあー」

優希「あれはきつと彼女に貰ったんだじえ！」

和「でも福路先輩に彼女がいるなんて噂聞いたことありませんよ。優希あんま勝手な事言つてはダメですよ！」

咲「そつそうだよ！風音先輩に彼女だなんて」

京太郎「なら家族から貰ったとか？」

咲「でも家族とはあんま上手く言つてないって先輩本人が言つてたよ」

京太郎「じゃあ違うか」



優希「謎だじえ」

和「確かに気になりますね」

咲「そう言えば中学の時の先輩の試合映像をみんなで見たよね」

和「あつあの時先輩が握つてた物つてもしかして」

優希「あのペンダントだじえ！」

優希が大きい声で言った瞬間に部室のドアが開き1年生全員がドアの方を見る

まこ「なんじゃあ？おんしら」

久「みんなでなんの話しをしていたのかしら」

和が今まで話していた事を久に伝えると

久「風音君のペンダントね。彼曰く思い出のペンダントらしいわ」

優希「なんだそりゃ」

久「試合の前にあれを握りしめると緊張とかが自然と解けるって教えてくれたわ」

まこ「ほおーそんな効果を持つてたんかーと言うより福路も緊張とかするんじや  
のおー」

久「じゃあこの話はもうおしまいね！練習練習！」

久は強引にその話を終えさせ練習を始めさせた。咲は部長が強引に話を終わらせたと  
思いつつもその事を追求するのはダメだと思ひ練習に参加した。

部活から逃げるようにでた風音は川の土手で座りながらこのペンダントを貰った時の事を思い出していた。

2年前春

久美子「ねえ風音君！」

風音「ん？」

久美子「2人で遊びに行きませんか」

風音「突然どうしたんだよ、別に良いけどさ」

久美子「ありがとう。じゃあ明日の12時にうちに来てください」

風音「わかった」

久美子「では明日、おやすみなさい」

そう言われ電話をきられた。今思えばあの時からおかしかったのだろう。そして翌日久美子の家の前に行く。家の前に着くと同時に久美子から出てきた。

久美子「こんにちは」

風音「よお」

久美子「じゃあ行こっか」

風音「ああでもどこ行くんだ？」

久美子「今日は私の買い物につきあってもらいたくて」

風音「買い物？」

久美子「はいその後この前できた喫茶店に行こうと思って」

風音「1人でも大丈夫だよなそれ」

久美子「えつと1人で喫茶店に入る勇氣がなくて、嫌なら今日はもう」

風音「・・・わかった」

久美子「えっ? いいのですか？」

風音「別に嫌だなんて言っていないだろ、それに俺もあそこに1人で入る勇氣は無いから」

久美子「ありがとう風音君」

そういう会話を歩きながらしていると目的のショッピングモールにつき久美子の買い物に付き合った。何件も店を回っているうちに夕方になっていた。

久美子「あつもうこんな時間」

風音「ほんとだ、買い物に付き合うのが意外と楽しくて気づかなかった」

久美子「でも今から喫茶店に行ってもあんまりゆつくり出来ないですし」

風音「喫茶店はまた今度でいいんじゃないか」

久美子「でも今日は私の用事で色々歩かせてしまいましたし」

風音「別にそんなこと気にしてないよ、それにあと一つ買い物があるんだろ？」

久美子「はい」

風音「じゃあそこに行こう、俺は別に親に何言われてもいいけど久美子はそうはいかないだろ」

久美子「はいでは急ぎましょう」

2人は急いで目的の店に行った、そこはショッピングモールの中にある小さなアクセサリーの店だった。

風音「ここって」

久美子「前から気になってたものがありました」

風音「へえー」

久美子「少し待っててください」

風音「ああ」

風音は店の前で待ち始めて10分くらいで久美子も店から出てきた。

久美子「ごめんなさい待たせちゃって」

風音「大丈夫だよそれで目的の物は買えた？」

久美子「はい買えました、では帰りましょう」

風音「ああ」

2人は道が別れるまで楽しく会話をしながら帰っていた、そして道が別れるとき

久美子「ねえ風音君」

風音「なに？」

久美子「これを」

久美子は丁寧包装された箱を風音に渡す

風音「何これ？」

久美子「開けてみてください」

風音は丁寧に包装紙を剥がし箱を開けるとそこには蒼いイルカのペンダントが入っていた

風音「これさっきのアクセサリーショップで買ったのか？」

久美子「はいそうです。私とお揃いのやつです。勝手に買ってしまい申し訳ありません。」

久美子はそう言うのと紅いイルカのペンダントを風音に見せる

風音「別に勝手にやっただなんて思っていないよ！なんでペンダントをくれるんだ、俺誕生日でもないぞ？」

久美子「コレは私と風音君が3年生になった記念ってことで私からプレゼントさせてください」

風音「えっなら俺もなんかプレゼントしないと」

久美子「大丈夫です、風音君からはもう色んなものを充分貰ってますから」

風音「俺なんかあげたか？」

久美子「うん充分貰ってます。だからそのペンダント受け取って貰えないですか」

真面目な顔で久美子は風音を見つめた

風音「わかった、ありがとう大切にする」

このやり取りが終わる頃には日もくれていた

久美子「今日は付き合ってくれてありがとうございました、今度こそ喫茶店に行きましよう」

風音「そうだな」

久美子「では」

そう言って久美子は走って帰って行った、それを見送り風音も帰宅した。

# 風音過去編

## 第一局

いつからだっただろうか優秀な姉と比べられ始めたのは小学生の頃からだった。姉はいつもテストで100点近く取ってくるが俺は70近くだった。別に勉強が出来なかった訳ではなかったがいつも親に姉と比べられていた。そして高学年に上がるにつれて勉強以外にも姉と比べられさらにそれを言われるのは親からだけじゃなく教師やクラスメイトから言われるようになった。今思えばまともに自分の事を褒めてくれたのは姉だけだった。姉は俺と比べられていることは知っていたそれでも俺を見下したりしないでいつも褒めてくれて優しくしてくれた。それだけで俺は幸せだった。そして俺は姉に胸を張れる何かを見つけようと思いついていない麻雀を高学年の時に始めた。だが姉が中学一年の時に麻雀を始めたそして先に麻雀で成績をだし、俺はまた親に比べれたなぞお前は姉よりも早く始めたのに結果が出せないのかと結果なら出しているだろう。小さな大会だが優勝している。小学生の俺はそれくらいしか出られないのだからそれにその成績を見せた時あんたらは姉の弟なのだから当たり前だと言つてろくに見もしなかっただろう。だが姉だけが俺を認めてくれていたから姉にも当た

ることが出来なかった。そして俺は姉のいる中学に進学した。

風音「入学式か」

美穂子「風音どうしたの？」

風音「いや少し憂鬱でさ」

美穂子「そんなこと言わないの私は風音とまた登校出来て嬉しいよ」

そして家を2人ででた。

入学式はかなり退屈で寝ていたら直ぐに終わった。クラスで自己紹介をした時直ぐにクラスメイトに俺が福路美穂子の弟である事が直ぐにバレた姉は既に有名人らしい。そして俺が姉の劣化版と言われていることも知っているようだ。俺の自己紹介の時ちらほら「姉の足でまとい」や「ほんとに福路先輩の弟なのか」なんてことが聞こえてきた。今更そんなことを気にしてはいはいない。むしろ言われすぎて慣れた。そして自分の自己紹介を終えたらボーとして聞き流していた。そして放課後になり麻雀部の部室に向かった。そこには体験入部の生徒が何にもいた。そして男子の顧問と部長が何か話していた。

部長「今日は体験入部に来てくれてありがとう。今日の体験で麻雀の楽しさを知って貰えたら嬉しいじゃあ経験者と未経験者は別れてください。」



「男子の新入部員希望は15人で経験者は5人くらいしかいなかった。すると顧問が近づいてきた。」

顧問「私は神崎和馬という男子麻雀部の顧問だ見たとおり老いぼれじゃがよろしくな。自己紹介を頼んでもいいか」

そして俺以外の4人が自己紹介を終えた

神崎「君の名前は？」

風音「福路風音です。目標はインターミドルで優勝したいからです。」

それを聞いていた新入部員希望と部員の1部が何言ってるんだこいつみたいな顔をしていた。

神崎「福路？ああ福路美穂子さんの弟か」

風音「はい」

俺はまた「こいつもか」と思っていた

神崎「でも私は君が誰の弟出会っても扱いをかえるようなことはしないよ。優秀でもそうでなくてもね私は君を見るよ」

風音「はっはい」

自分の考えていることを見透かされたような気がして驚いていた。

神崎「じゃあ経験者は今手が空いている部員と打たせるよ」

そして俺は神崎先生の指示に従い上級生と打った。はつきり言つて弱いと感じていたがそれを顔に出さないようにしていたが先生には見破られているだろう。そして2回半荘を打ったくらいで部活が終わった。そして帰宅しようとした時校門に人集りができていた。人集りの中心は姉であったが絡まれているわけでもなかった。ので無視して通り過ぎようとしたが声をかけられる。

美穂子「あつ風音」

風音「姉ちゃんかどうしたの？」

美穂子「風音と一緒に帰ろうと思つて」

風音「じゃあ帰ろつか」

そして人集りから物凄い目で睨まれていたが気にせずに姉ちゃんと帰宅した。

## 第二局

入学してから2ヶ月位がだった。麻雀部に入ってわかったことはやる気のある奴とやる気のない奴がハッキリしているということやる気のある奴は俺を含めて全体の3分の1程度しかいなかった。特に今の2年生にやる気のない奴が多く見られたそしてそれは1年にも伝染していく元々経験者だった奴でやる気のあるやつは俺ともう1人だけになり他は上級生に流された。未経験者だった奴らの半分も上級生に流された。だが俺はそんな事はどうでもよかったただ自分がどう勝つかについて考えており中学に入ってから1度も自分の試合記録をとってもらわなかったことはなかった。そして県予選団体のメンバーが発表された。

神崎「これから県予選の団体メンバーを発表する呼ばれたものは返事をするように。」

神崎「先鋒 1年 福路風音」

風音「はい」

神崎「次鋒 3年 浜岡耕平」

浜岡「はい」

神崎「中堅 2年 八神冬夜」

八神「はい」

神崎「副将 2年 高橋信二」

高橋「はい」

神崎「大将 3年 灰原暦」

灰原「はい」

神崎「補欠 1年 東城悟 2年 小坂慶太」

東城「はい」

小坂「はい」

神崎「以上の7名で団体戦にエントリーする」

モブ1年「待つてください。どうして団体戦のメンバーに1年が二人もいるんですか？他の先輩方を差し置いて」

この一言により周りから批判の声がかさねてきた。

神崎「静かにしろ。理由は簡単だ真面目にやったらんやつをだしても勝てる訳がないからだ。それに1年の何人かも上級生に流されて練習サボつとるみたいだしな。それに福路に先鋒を任せたのはこの部内で一番強いからだ。文句があるなら今すぐに福路を麻雀で倒してみるんだな。そしたら考え直してやろう」

すると辺りの声がかたまった。そして俺は嬉しかった初めて姉以外の人に認めてもら

えたからだ。そして俺は何としても神崎先生を全国に連れていきたいと心から思った。

神崎「では解散！練習に戻れ」

そして各々練習に戻っていった。俺はやる気のない奴らから憎悪のこもったの視線を向けられていた。

東城「やったな福路！」

風音「そうだな」

東城「お前反応薄いな嬉しくないのか？」

風音「別に……でも俺個人を見てくれる先生を全国に連れていきたいとは思ってるよ」

東城「……」

風音「なんだよ」

東城「お前実は熱い奴なのか？お前からそんな言葉が出てくるなんて思ってたよ」

風音「……うつせ」

そして今日は半荘を3回うち部活を終えた。最近は姉も忙しいみたいで一緒には帰宅はしていなかった。

風音「ただいま」

母「おかえりなさい。ご飯できてるわよ」

風音「わかった」

いつもと同じ会話であった。1日に姉以外の家族と話す回数は朝と夜のこの会話位でそれにも慣れてしまったため別に違和感を感じない。そしてリビングでご飯を取り風呂に入ったあとは男女問わず有力選手の試合記録を見て自分で分析しノートにまとめることを中学に入ってからの日課にしていたためそれをやっていたら部屋がノックされた。

風音「どうぞ」

父「またこんな時間まで起きてパソコンかどうせゲームでもしてるんだろう」

風音「別にいいだろ誰にも迷惑はかけてない、用事がそれだけなら出てつてくれないかな」

父「お前・・・お前も美穂子を見習って勉強でもしたらどうだお前はいつも努力をしないだから美穂子と比べられて劣等感を感じるんだ。それにお前にゲームなんてして暇あるのか？お前の方が2年先に初めているのにまだに成績をだせていないじゃないか」

風音「言いたいことはそれだけ？なら話は終わりだ。それにろくに俺のことを見よう

ともしない奴らに何を言われても何も思わない出てつてくれ」

「そう言い父を部屋から追い出した。するとまたノックの音がした。

風音「どうぞ」

美穂子「風音またお父さんと喧嘩したの？」

風音「喧嘩じゃない。言い合い」

美穂子「私は風音が何をしてるか知ってるから何も言わないけどお父さんだつてあなたのことをおもつて言つてくれるのよ」

風音「・・・それで何か用？」

美穂子「ああごめんね。風音団体戦のメンバーに選ばれたんでしょ」

風音「そうだけど誰から聞いたの？」

美穂子「神崎先生が教えてくれたの多分風音は聞かれなきや福路にも教えないからなつて」

風音「そうなんだ」

すると姉が俺を抱きしめてきた。

風音「なんだよ姉ちゃん」

美穂子「あなたはすごいよ風音お父さん達はいうけど貴方は私よりもすごいわだつて私には1年の時に団体戦のメンバーには入れなかつたもの、それに風音は私よりも強い

から絶対に個人でも結果を残せるよ」

姉はいつも俺が弱っていると思っただらこうして俺を励ましてくれる。これが俺が姉に当たる事が出来ない理由でもあった。それに姉に抱きしめられている間はとても落ち着く。しばらくすると姉が手をはなした。

美穂子「じゃあ私はもう寝るから部屋に戻るねおやすみ」

風音「待つて」

そう言い自分が纏めたノートのコピーを姉に渡した

美穂子「これは」

風音「長野にいる女子の有力選手のデータ公式戦の試合記録から取ったやつだけだからどこまで信用できるかわからないけど」

美穂子「いいの？これ作るのに物凄い時間かかるじゃ」

風音「いいよ。姉ちゃんにはいつも世話になってるしじゃあおやすみ」

そう言いベッドに潜る

美穂子「ありがとう風音。おやすみなさい」



## 第三局

県予選の団体戦が始まった。去年まで風越中学は女子の麻雀部は全国区だが男子は県ベスト8どまりだったのだが今年には決勝戦まで楽に勝ち進むことができていた。先鋒の俺は2回戦までは補欠の小坂先輩が打っていたため準決勝からのスタートだった。がちやんと先鋒の仕事をして次鋒に回せたいと思ってる。そして決勝戦を迎えた。先鋒の俺は2位と3万点以上の差をつけて次鋒にまわしたがそこからうちの学校は崩れていった中堅の八神先輩が持ち直し2位になるもそのあとの副将戦と大将戦で点数を一気に持つていかれ最後はトバされて風越中学は敗退した。3年の先輩達は泣いていた。そして3年の先輩は俺と八神先輩に謝っていた。「俺達がお前達の頑張りを無駄にしました」とそのあと先輩は泣いていた。そうして俺の初めての団体戦が終わった。そして1週間後個人戦の県予選が行われ俺は1位で通過した。他の風越中学のメンバーは全国には届かなかった。その日に先輩達の引退式が学校で行われて3年の先輩方は引退して行った。

翌日の放課後部室に行く途中で麻雀部のやる気のないメンバーが話しているのを聞

いた

モブA 「先輩達残念だったよな」

モブB 「残念だったね」

モブA 「でもさ福路もつとつけたよなあー」

モブB 「そうそれ思ったわ、エースならもつと点稼げよな」

モブA 「あいつメンバーに選ばれる前から気に入らなかったんだよなだつてあいつ頼まれてもないのにに備品の整備とかやって点数稼いでるんだぜ」

モブB 「そこで点数稼ぐなら団体戦で点数稼げよ」

モブA 「それにあいつ個人戦で先輩達と当たった時も容赦なく点数持つててんだぜ」

モブB 「何それひどいあいつ仲間意識とかないんじゃないやね、どうせ俺らのことも見下してんだろ。」

俺はその事を聞いてもどうとも思っていないかった。その程度の事はよく言われていたからだそのまま部室に向いいつも通りに打ったそしていつも通りに勝っていた。

東城 「あーまた負けた」

小坂 「くっ」

八神 「まいったな」

3人は心底悔しそうにしていたが俺に対しての嫉妬のようなものは感じられなかった。

風音「ありがとうございます協力してくれて」

八神「いや別にいいってそれにあんま言いずらいけど」

小坂「他の奴らがお前の練習の相手をしてもすぐにトンで終わるからお前の練習にならない」

東城「せっかく八神先輩がぼかしたのにハッキリ言っちゃうんですね」

小坂「別に隠す必要もないだろう事実だ」

八神「まあそうなんだけどさいいのか？他の奴らお前の事めっちゃ睨んでるぞ」

小坂「かまわんさあ続きをやるぞ」

風音「えっいいんですか？」

小坂「お前まだ打ちたそうな顔をしていたしなそれにこれは全部お前のためにやる訳でもない」

八神「確かにそうだな福路と打てば俺たちのレベルアップにも役に立つだろうしな」

風音「・・・ありがとうございます」

東城「お礼はいいから早く卓につけよ」

八神「何お前が偉そうにしてんだよ」

八神がデコピンを東城にする

東城「スつすいません」

こういったことが毎日の部活で繰り広げられていた。そして学生の敵である試験も  
終えて俺は全国大会の会場である東京に向かった。

## 第四局

全国大会が始まる前に神崎先生が倒れた。会場にいく2日前に急病で倒れ病院に運ばれた病院で先生にすまないと謝られた。そして俺は全国大会の会場に1人で向かった。駅まで送りに来たのは団体戦を共に戦った先輩と姉だけだったが俺は勝って帰ってくるといういい電車にのった。そして団体戦の優勝校が決まりその翌日に男子個人戦が開始された。俺は準決勝までは簡単に勝ち上がったが決勝戦はそう上手くいかないと思っておりを引き締めて決勝戦の会場に向かった。

パシャパシャ

カメラのシャッターオンがひきりなしになっている

うるさいな集中させてくれと思っていたら逆方向からもう1人歩いてきたその人を見た瞬間非汗が流れた。こいつはやばい奴だと俺の直感が言っていた。確か3年生だったよな学校はわからないけど確か千葉代表の神宮亜里沙女。そして一足遅れて対局室に入った。

風音「よろしく願います」

神宮「ん？ああよろしくね」

挨拶を済ませたあたりで残り2人の選手も入ってきた。

決勝戦が始まった。神宮の打ち方が決勝戦で変わったことに周りは驚いていた。準決勝までの彼の打ち方は守りの麻雀だった。自分では絶対に振り込まず高い手が入るまで粘り高い手をトップにぶつけまくるという打ち方だったが決勝戦では攻撃的な打ち方へ変わっていた。東一局から東三局までの間で俺以外の選手から合計で20000点取っていた。そして神宮は俺の支配を上回っていたため俺に風牌が集まりずらくなっていた。だが神宮の能力はだいたいわかってきた。まだ確信はないけどあいつが槓したあとにリーチをかけた相手から点数を奪うの能力だと思う。

東三局 1本場

モブA：13000

モブB：17000

神宮亜里沙：45000

福路風音：25000

親番：神宮

ドラ表示牌〔九〕

## 1 巡目

風音 手牌

〔一 一 ① ① ② ② ⑥ ⑧ ⑧ ⑧ ⑨ 九索 九索 南南〕

ツモ 〔⑨〕

風音（まじかよ七対子聴牌か・・・だがここでかければ恐らく神宮から直撃を貰うことは恐らくないが様子を見るべきか）

〔⑥〕 捨て

6 巡目に神宮が槓をした。

新ドラ 〔中〕

風音（これでリーチがかげられなくなったが他2人が気づいているわけもない）

神宮（ふうん、福路って子は気づいたみたいだけど他2人から取ればいい）

そして9巡目モブBがリーチをかける

モブB 〔横南〕 捨て

風音 「ポン！」

〔⑧〕 捨て

〔南横南南〕

風音（これでツモがズレたこれであいつがツモをあがりすれば俺の考察があっている

ことになる)

神宮 (ツモをズラしたか)

そして11巡目

神宮「ツモ8100オール」

(一一一二三三三④④⑤⑤⑥⑥白)

ツモ (白)

風音 (ほかगतバないか不安だけど、これであいつの能力がわかったこれならやりよ  
うがある)

東三局 2本場

モブA : 4900

モブB : 8900

神宮亜里沙 : 69300

福路風音 : 16900

親番 : 神宮

ドラ表示牌 (④)

6巡目



風音（準備ができた）

〔白〕捨て

そして12巡目

神宮「槓」

〔五索〕で加槓

風音「ロン！」

神宮「えっ？」

風音「聞こえなかったか？」

〔⑤⑤赤⑤⑥⑦⑧〕二索二索三索四索南南南

〔五索〕

風音「槍槓！12600」

東四局

モブA：4900

モブB：8900

神宮亜里沙：56700

福路風音：29500

親番：福路

ドラ表示牌〔白〕

風音（恐らく同じ手はもう通じないならやつよりも早くあがればいいが俺が勝つには倍満以上でなければつもあがりできない。ならここは連荘を狙うか？いやそんな流暢なことはやってる時間はない。それなら倍満にかける。この親は俺の支配がうわまわっている事を祈るしかない）

1 巡目

風音手牌

（一二三四五六七八九東東東）

風音（支配をうわまわっているこれなら行ける）

（⑧）捨て

4 巡目

神宮（さっきのはまぐれなのか？それとも狙ったのか？いやどちらにしろ暗槓と大明槓しかできない。それに刻子が俺の手配に1つしかない。まさかこいつも牌に愛された子なのか？）

8 巡目

風音「リーチ！」

（横⑨）捨て

10 巡目

神宮（ここで聴牌かだけど他からの差し込みは望めないがリーチをかけなくても倍満確定のこの手牌・・・だが聴牌にするには〔東〕をきらなければならぬ・・・いやまだこちらには余裕がある）

〔東〕捨て

11巡目

そして風音のつも

風音（こいつは切れない神宮も俺と同じで恐らく混一色か清一色手をはってるならこうやって逃げる）

風音「カン！」

〔裏一〕裏

新ドラ〔四〕

④捨て

12巡目

神宮（まじかよここで〔赤五〕だとこれはこいつのあたり牌だけど俺はついてたな）

神宮「カン！」

〔裏五五裏〕

新ドラ〔北〕

〔①〕捨て

13巡目

風音「ツモ！12000オール」

風音手牌

〔一一一三三四四四六七東東東〕〔八〕

裏ドラ〔①③〕

実況「決勝戦終局！東四局での終局は初です！風越中学1年生福路風音選手新記録を打ち立てました！」

風音「ありがとうございます」

俺はすぐに対局室を出た。そして先生の携帯に連絡をする。しばらくすると先生が電話に出た

風音「もしもし先生ですか？」

神崎「そんなに慌てなくてもわかつとる。よく頑張ったな風音！」

風音「本当は皆で東京に来たかったですけど」

神崎「なら来年はもつと頑張らないとな．．．まずい看護師が来た。もうきるぞ」

風音「あつすいませんなんか邪魔しちゃったみたいで」

神崎「いやこつちからかけるつもりだったからいい。それと全国優勝おめでとう。  
じゃあまた学校で」

風音「はい」

電話をきった。その後は記者からインタビュウを受けた。だが俺のコメントが気に入らなかつた記者がいたのかもつと派手なコメントをと何回もせがまれたが拒否してホテルに戻つた。

そして翌日。土産を買つて俺は長野に帰つた。

## 第五局

夏休みがあけて新学期になり麻雀部が変わった。理由が新しいコーチの就任、神崎先生の容態が良くなる、その後任としてきたコーチが確か鎌瀬だったかな？このコーチは昔インターハイに出場する位の実力があつたらしいが俺はこいつのやり方が気に入らなかつた……。自分の指示に従わない生徒を省いて自分の指示をきく生徒を優遇した、そしてまじめにやっていたいなかった連中が、うまく取り入った為夏の大会の団体戦メンバーは全員外され新しく優遇されたメンバーでチームを組まれた。さらにタチが悪いのが優遇された連中が、でかい顔をするようになり、近い内に部内崩壊を起こすと俺は思っている。そして今日がその日だった。

小坂「コーチ！」

鎌瀬「なんですか？小坂君」

鎌瀬「小坂先輩が何か言っていた。」

小坂「なんであいつらが団体戦のメンバーで俺達を外されたんですか」

鎌瀬「前にも言いましたよね。彼らの方が私から見て総合力が上だと」

八神「それはおかしいですよ、だって俺達はあそこにいる奴らに1度も負けてませんし、貴方がおこなった団体戦の練習でも夏の大会のメンバーだった俺達が圧勝しています。それで何処があいつらの方が総合力が上回ってるんですか？」

東城「それに全国優勝した風音がいるのになんで団体戦のメンバーから外されるんですか」

鎌瀬「君達の言い分はわかりました、ですがここの監督は私です。私の指示に従わなかった貴方達を大会にだしてあげるつもりはありません。それに監督の指示に従わない学校があるなんて事が世間にしたらこの学校の品位を落とすことになります。」

八神「それはあんたが俺達の牌譜を見て間違ったアドバイスをしてきたからだろ、その時ちやんと説明したじゃないか」

そんな声が聞こえ、八神が暑くなっている事がわかった。このままだと鎌瀬を殴りかねないと思ひ俺は止めに向かう。

風音「やめた方がいいですよ八神先輩」

八神「なんだよ福路！お前はこんな扱いでいいのか？」

風音「俺は別にいいですよ、それに俺はこいつを全国につれて行ってやる気なんてないですから」

鎌瀬「コーチに向かってこいつはないんじゃないですか？」

鎌瀬が何か言っているが俺は無視をした

風音「それに俺はこいつを監督だなんて思つてませんよ先輩」

八神「それでも」

風音「こんなところで先輩がこんな殴つてもいいことないですよ」

八神「・・・わかった」

鎌瀬「福路君！さつきから聞いていれば馬鹿にしたような口を聞いて」

風音「馬鹿にした様ではなく馬鹿にしたんですよ、それに俺はあんたみたいな雑魚の指示に従いたくないんですよ」

鎌瀬「私が雑魚？私は全国大会に行った経験が」

風音「行けてても勝てなきや意味が無いんですよ、それになんならここでハッキリさせましょうか？」

鎌瀬「やらなくて結構ですよ。その変わり君はもう結果を残せても団体戦に出れないと思つていてください」

それを聞いた元団体戦メンバーは驚いていた。こいつは恐らく俺に頭を下げさせてくた団体戦を天秤にかけたんだらうけど悪いな・・・

風音「別に構いませんよ。あのメンバーの中に俺がいてもワンマンチームになるだけですし、1回戦落ちなんてして惨めになりたくないですから」



鎌瀬「今のチームが1回戦負けすると？」

風音「ええしますよ確実に理由をいいますか？」

鎌瀬「ぜひ」

風音「まずその奴ら全員、危険牌を理解していない。そしてオリるということを知らない奴らが県予選を突破出来るわけないでしょ10万点あるからトビ終了はないでしょうけど」

鎌瀬「そんな事は分かっています、これからそれを教えれば」

風音「間に合うと思ってるんですか？新人戦まであと2週間きつてますけど」

鎌瀬「それは他の部員達にも協力してもらって」

風音「だそうだけど・・・今までまじめにやってきたみんなはどう思う？」

皆の反応は俺の思っていた通りで誰もやりたがらなかった。それに団体戦メンバーは不服だったのか「お前らだつて夏の大会で俺達をこき使っただろ」「これはやって当然だ」みたいな事が聞こえてくる

風音「君達はその時サボってたしよ、俺は部内でおこなった試合は全部記録して考察るけど君達の名前は夏の大会の期間どこにも無かった・・・。あとはコーチだけで頑張ってくださいね、何せ全国に行った人なんだから簡単でしょ」

鎌瀬の顔は下を向いていたが真っ赤になっている事がわかった。

鎌瀬「なら監督命令です。貴方達も私に協力しなさい！しなければ福路君同様どんなにいい成績を残しても団体戦のメンバーにはしません」

この命令は俺以外のメンバーにはかなり効いていた。まああいつらは試合に出たくて抗議に行つたんだから仕方ないか・・・

八神「断ります」

小坂「同じく」

高橋「別にいいですよ、でれなくても」

俺はとても驚いていた。

風音「どうして先輩達も」

八神「別に・・・俺達はこのチームで出たかっただけだし、こんな自称監督はお前出さないことが確定してるみたいだしなそれなら出たいと思わないよ」

小坂「俺はアイツらに教えたくないからかな」

高橋「俺も小坂といっしょ」

鎌瀬「貴方達・・・」

すると1部の部員からもお断りの声が聞こえてくる

鎌瀬「黙りなさい！指示に従えないのなら皆さん退部しなさい！」

風音「残念だけど、あんたはコーチなだけであつて退部させる権利は無いんだよ顧問

はまだ神崎先生だからな」

鎌瀬「くっ」

八神「まあ辞めてほしいなら辞めますよ俺」

すると八神先輩は1つの紙を鎌瀬の前に投げる。

鎌瀬「これは・・・」

八神「これは大阪の千里山中学からのスカウトに渡された奴だよ、こっちであんたに従うくらいならスカウトを受けてそっちに行く。今日の件で決心がついたよまああんたが取り合わなかったらスカウトを受ける気だったけど」

風音「八神先輩・・・」

八神「お前に黙ってて悪かったな。なので今からこの部活辞めます」

そう言い八神は部を去った。それに続いて小坂先輩、高橋先輩、東城も続いて辞めていった。それを俺はただ見ていた。

鎌瀬「君も辞めて結構ですよ」

風音「俺は辞めませんが・・・まあここに居ても空気を壊すだけなので俺は幽霊部員でいいですよ。個人戦だけは出るんでその時だけ来ますよ」

そして俺も部室を去った。

## 第六局

俺の学校生活は地に落ちた。新人戦は俺の言った通り一回戦負けをした。だが記者はメンバーが全員変わっていたことについて聞いたらしくそこであいつは俺が言ったことをかなり盛って記者に話したらしい。だが一つの雑誌しか俺の事を書かなかつたかがそれがかなり嘘が書かれていた。それが世間に出回りガセと言う人もいれば真に受けるやつも居た。中学生はそういうゴシップが好きなやつも多くそれを拡散させてありもしない噂までが立っていた。それで周りからはハブられてぼっち生活が始まり自分の陰口を多く聞くようになり家でもその事についてよく聞かれ俺が怒られていた。そんな事が続いて1年が終わり2年に進級してしばらく経った時だった

風音「先生！頼まれていたプリントを持ってきました」

教師A「ありがとう福路君・・・大丈夫かい？君の噂がどんどん拡散されて君いつもひとりみたいだけど」

風音「別に大丈夫ですよ、元々あいつを挑発しなければこんなことにはならなかつたんですから」

教師A「何かあつたら相談さなさい」

風音「わかりましたではさよなら」

俺はそう言い職員室をでて教室に戻り荷物を持って帰ろうとしたが隣のクラスから声がしてきた。隣のクラスを除くと女子3人が1人の女子をかこんでランチをしていた。

風音「お前らなにやってんだ」

女子A「あ？こいつ誰？」

女子B「確か隣のクラスのぼっち名前なんだっけ？」

女子C「確か福路風音だよ」

女子A「あーあの出来損ないの弟か」

女子B「それでその出来損ない君がどうしたの？」

風音「お前から寄って集って何してんの」

女子A「見てわからないの？」

女子C「まじウケるんですけどー」

女子B「正義の見方気取りかよお前」

風音「そんなつもりはないけど、この事は流石に見過ごせない」

女子A「だったら教師にバラす？でも皆は貴方よりこつちの方を信じるんじゃない

？」

風音「くっ」

女子B「まあいいや、こいつ来てなんかダレたし帰ろ」

女子C「そうだね」

そして女子の集団は帰って行く、俺は倒れている女子のところに行き手当をした。俺が何故そんなものを持っているのかと言うと姉に持っておきなさいと言われていて何時も常備しているからだ。

久美子「ありがとう、福路君」

風音「なんで俺の名前」

久美子「そっそれはおっ同じクラスだからです」

風音「そっそうなんだごめん知らなかった。俺クラスの奴の名前全く覚えてないからさ」

久美子「大丈夫です。頭を下げないでください、私は篠原久美子と言いますよろしくお願いします」

風音「俺は福路風音よろしく」

久美子「こちらこそ」

風音「篠原さん大丈夫？あいつらにめちやくちやられてたみたいけど」

久美子「大丈夫です。それに私が悪いんです」

風音「どうして？」

俺はあまり踏み込んではいけないと思っていたが何故か聞いていた

久美子「私が何をやってもダメでグズだから皆が私を見るとイライラするってだから」

最初は篠原さんがあの3人に何かしたのかと思つてたけどどうやらくだらない理由だったと思つた。いやくだらないは失礼かな篠原さんはそれでこんなにやられてるのに

風音「そうなんだ」

久美子「はい。だから」

風音「でもそれは篠原が悪いわけじゃないよ」

いつもはこんな面倒事に関わらないのに何故かこの時は自分から関わつていた。何かはわからないけどこの時俺は篠原さんの両肩に手を置いて真つ直ぐ見て強く言つていた。

久美子「あつあの手が」

風音「えっ? ごめん」

久美子「別に大丈夫です。」

風音「とにかく篠原さんは悪くないってことで、じゃあ途中まで帰ろ」

久美子「でも福路君、部活あるんじゃない」

風音「今いろいろあつて幽霊部員なんだ、大会にはでるけどね」

久美子「そうだったんですか」

篠原さんと道が別れるまで一緒に帰った。そして別れる時に

久美子「あつあの明日学校でも話しかけてもいいですか？」

篠原さん声がふるえていたので多分これで俺に拒否されたらどえしようかなんて考えてるんだらうな

風音「大丈夫だよ。じゃあまた明日」

久美子「また明日」



## 第七局

篠原さんをリンチから救つてから俺はよく篠原さんと行動をするようになった。篠原さんは俺を福路美穂子の弟として見ないで俺自身を見てくれる数少ない奴でいつの間にか俺の中でも大切な存在となつていた。篠原さんは麻雀がの才能があつたことにとても驚いていて2人でよく麻雀が打てる場所がよく打つていた。そしてまた夏がやつてきたのだつた。俺は個人戦以外には出ないと鎌瀬にも話を付けていたのだが県予選のエントリーが迫つていた時、鎌瀬に部室に呼び出された。俺は渋々部室に向かうとそこには今の団体戦のメンバーと鎌瀬がいた。俺はやな予感がしていたので携帯の録音アプリを起動して話をはじめた

鎌瀬 「福路君お久しぶりです」

風音 「はやく要件を言つてくれませんか暇じゃないんです」

鎌瀬 「では、福路君団体戦に出てくれませんか」

鎌瀬は頭を下げずに俺が言うことを聞くのが当然と言つた態度で頼んでくる。

風音 「お断りします、どうせ新人戦の終わつたあとに色々言われたから俺に出てほし  
いだけでしょ」

鎌瀬 「くっ・・・」

風音 「それに俺がいた所で1回戦負けですよ」

鎌瀬 「それはどういう」

風音 「俺がどんなに点をとっても後ろの奴らがダメにするって言ってるんですよ」

モブA 「お前バカにしてんのか」

モブB 「そうだ俺達だってここまで努力してきたんだ」

団体戦のメンバーから声上がる

風音 「ここに俺が入っても雰囲気が悪くなるだけですしここにいる奴全員実力が低いんですよ、そんな所に俺が入ってもお互いにいいことはないですよ」

そう言い俺は部室をでた。そして俺は県予選の個人戦に参加をして1位で通過したのだがあいつらがやらかしたのだった。県予選終了後にでた雑誌に俺が団体戦にエントリーされてたにも関わらず俺が試合を放棄した為に補欠が出てうちの学校が敗退したと書かれていた。それからは俺は学校でも陰口が増えてそして生徒指導室に呼び出された。

風音 「何かようですか？」

校長 「今回呼び出されたことに着いて何か心あたりがあるんじゃないかね」

風音 「いえ特に」

鎌瀬「あなたが試合を放棄したことに着いてです」  
なるほどそういう事か

風音「俺は個人戦にしか参加しないと事前に臨時の顧問の先生にも伝えていた筈ですが」

顧問「ええですが鎌瀬コーチが福路君が出ると言ったので書きたせと言われたので書き足しました。」

風音「そんなことは言っていないのですがと」

鎌瀬「いい加減認めたらどうですか自分が試合放棄をしたと」

校長「このままでと君の全国出場を辞退してもらうことになるが」

風音「ではこれを聞いて貰えますか」

俺は携帯のアプリを起動させ録音させた内容を聞かせる

すると校長や臨時の顧問が鎌瀬詰め寄った

校長「すまない」

風音「別にいいですよ、これで俺の辞退は無くなりましたね」

校長「ああ本当にすまない」

そうして俺は指導室をでた。指導室の前には俺を心配していた篠原さんが待っていてくれた。

久美子「風音君大丈夫でしたか」

風音「大丈夫、じゃあいつものところ行こうか」

久美子「うん！今日は負けませんよ」

風音「今日も俺が勝つよ」

そして俺達は学校を出て公民館でやっている麻雀教室に向かった。

小学生A「あつかぎねくんとくみこちゃんだー」

1人の小学生が言うのと他の子達がぞろぞろ集まってきた

風音「みんな席に戻って今日は最後までいるからさ」

小坂「今日も福路と篠原は人気だねー」

東城「確かに、さあ皆席に戻って」

一同「はい」

小学生達は自分の卓に戻っていく。

小坂「じゃあ俺達も始めますか」

東城「そうですね」

小坂「まあ俺達じゃ福路の調整の相手になれるかわからんけどな」

風音「大丈夫ですよ」

久美子「今日こそは勝ちます」

そして俺達も2時間くらい麻雀を打って小学生達を見送ったあとに俺達も家に帰宅した。家に帰ったことを知らせて俺は部屋に戻った。そして日課の有力な選手の情報を集める。だが邪魔が入った。

父「風音！これはどういうことだ！」

父親は俺に例の雑誌を見せる

風音「それは学校のコーチがやった事だよ、俺には関係ない」

父「あの人がそんなことをする訳ないだろ一年前にわざわざうちに挨拶をしに来てくれた人だぞ」

風音「へえあいつがねえ」

父「それにお前の学校での評判も聞いてるぞ、ずいぶん調子に乗ってるそうじゃないか」

風音「俺は事実を突きつけてやっただけだよ」

父「問題ばかり起こしやがって美穂子を見習ったらどうだ！」

風音「あんたはそれしか言わないよな、ことある事に美穂子を見習え見習えっていつもそれしか言わねえ誰にも迷惑かけてねえから出てけよ」

そう父親にいい顔を殴って部屋の外にだした。

## 第八局

俺は夏のインターミドルで2連覇を達成、俺は例の記事の件があったので評判が2つに別れていたそして優勝後のインタビュは適当に当たり障りない事をいいすぐにホテルに戻ったのを覚えている。俺は例の件で記者という物を嫌うようになっていたので優勝した後に学校にくるインタビュも断り続けていた。そして季節は冬になっていた。俺は学校で東城に呼び出されていた。

風音「何かようか？」

東城「ああ」

東城の表情はとても暗かった

東城「篠原さんへのいじめがかなりエスカレートしてきてる」

風音「久美子からはそんな様子」

東城「篠原さん俺達に心配させないように振舞ってるんだよ」

風音「そんなじゃあどうすれば」

東城「俺達ができるだけ篠原さんと一緒にいるしかない、そしていじめの首謀者をあばくしかない」

風音「そうだな」

東城「俺はこの件について調べるから篠原さんのそばにいてやってくれ」

風音「ああ」

東城「俺はもう行くよ」

そして放課後いつも通りに久美子を迎えに行く。久美子の教室の前で久美子を待っていた、そしてホームルームが終わってたらしく直ぐに久美子が教室から出てきた。東城に言われたことが頭に過ぎり久美子を観察しよく見ると手に傷があることに気づいた。

風音「久美子どうしたんだ？その傷」

久美子「えつとちよつと紙で切ったんです」

嘘だという事が直ぐにわかった明らかに紙で着くような切り傷ではなかった。

風音「大丈夫か？辛くなったら言えよ」

久美子「・・・うん」

風音「じゃあ今からいつものところ行くか」

久美子「・・・ごめん今日は用事があるから帰るね」

久美子の表情はとても暗かった、そして走って帰ってしまった。俺も直ぐに久美子を

追いかけたが見失つてしまった。

また数日がたったその数日で俺の周りにも変化が出てきた。今までは陰口で止まっていたが俺が使っている学校の備品にまで落書きなどがされるようになり教科書やノートにもイタズラをされるようになりイタズラされていた物を直している間久美子のそばにいてやれなかった。

それでも俺はできるだけ久美子のそばにいていじめをやらせないようにしていただが・・・ある日俺がイタズラされていた物を直したあとに久美子の教室に行くと久美子が泣いていた。そして俺が声をかけると久美子は知られてしまったという顔をした。

久美子「・・・風音君あはははバレちゃったか」

風音「久美子やっぱり」

久美子「うんあれからエスカレーターしてきてね今日は私の大切な物が壊されちゃったんだ」

久美子は壊れたペンダントを俺に見せてきた。

久美子「私風音君にはバレたくなかったんだ。心配させたくなかったから、風音君は色々大変だから」

風音「バカだなあ」



久美子「ばっバカってなんですか」

風音「俺はあんな記事や陰口くらいで大変なわけないだろ、それに俺達親友だろこう  
いう時に助けてやれないで何が親友だよ」

久美子「風音君・・・ありがとう」

俺はしがみついて泣いている久美子を抱きしめていた。

## 第九局

あれから時が流れて俺達は3年生になっていた。俺と久美子は3年生になった時に記念という理由で久美子とお揃いのペンダントを久美子が俺にプレゼントしてくれた。俺はこのペンダントをかなり気に入ってる。だが久美子へのいじめは3年生になっても治まらなかつたそれはかなりエスカレートしてきているようで俺が側にいてもいじめをするようになり3年生になって記念だということを買って置いて買物と一緒にした時の久美子とは大違いのやつれた顔をするようになり久美子は俺と距離を置くようになっていた。季節は初夏に入ろうとしていた時あの最悪の事件が起こった……

ある日の放課後俺は久美子が男子3人に囲まれていじめられているのを目撃して男子3人をふいうちで撃退したが久美子は泣いて俺を見るとごめんさいと言いい学校の屋上まで走っていく、俺は直ぐに追いかけた、俺が屋上に着いた時には久美子はフェンスの向こう側に立っていた。

風音「久美子はやまるな」

久美子「ごめんね風音君私もう耐えられないよ……ごめんね風音君」  
そう言うとう久美子は屋上から飛び降りた

俺は少しの間呆然としていたが直ぐに救急車を呼んだが救急車にはのせてもらえず、教師にすぐ家に返された。翌日久美子の家から電話がかかってきて用があるということとで俺は久美子の家に向かった。そこには久美子の両親が立っていた。

久美子父「君が福路君だね」

風音「はい・・・くみ篠原さんは」

久美子の両親は俯く

風音「そんな」

俺は膝から崩れ落ちた

久美子母「これを」

久美子の母親から手紙を受け取った。

久美子父「この手紙は久美子の日記に挟まっていた君宛ての手紙だよ、読もうと思つたんだけど君が読むのが先だと思つてね」

俺は久美子からの手紙を開いた

風音君へ

これを風音君が読んでるってことは私はこの世にいないってことですね。風音君も知つての通り私はいじめを受けていました。風音君に心配かけたくなくて黙っていま

したが風音君にはバレていてその時貰った言葉がとても嬉しかったです。風音君と過ごした日々は私にとって大事な時間でした。ですがいじめの主犯達が風音君に手をだしはじめたのを知ってしまいました。私はそれを止めるために行動をしましたが私は耐えられなくなり負けてしまったのでしょうか。私は風音君がお姉さんのことで悩んでいた事を知っていたので支えていきたくったのですがそれも無理そうです。ですが空から風音君の事を見守っています。だから風音君は負けないでください、風音君を取り囲んでいる問題に絶対に負けないでください。書きたいことを書いてたら紙が無くなってしまいそうなので最後に風音君大好きです。

子より

久美

俺は手紙を涙を流しながら読んでいた。

久美子母「福路君が久美子のことを良くしてくれたのはあの子の日記からわかりました、それにいつも話してくれたのは君のことでした」

久美子父「その君とこんな形で会うことになるとは思っていなかったがね・・・日記にこのペンダントを君に渡すように書かれていたよ」

久美子の父親から紅いイルカペンダント・・・久美子と記念に買ったペンダントを受

け取った。

久美子父「ここまで来てくれてありがとう。送っていこう」

俺は久美子の父親に送られて家に戻った。送って貰っている間何を話していたのかは覚えていない。そして俺は自室に戻りベッドに突っ伏した。涙で枕は濡れていた。そして俺は久美子から貰った手紙の内容「負けないで」という言葉を思い出す。

風音「負けないでか・・・久美子俺はお前が思ってる程強くなかないんだよ」

でも久美子最後の願いでもあるのか・・・なら負けちやダメだよな、それなら俺は勝ち続けたいとな何を犠牲にしても

それから俺は勝つ為だけに行動をするようになった。東城達とは距離を置くようになり俺は完全に孤立した・・・。そして俺は個人戦県予選を難なく突破したがその時2位の奴だけは少し手強かったということは覚えている。そして現在俺はインターミドルの決勝に勝ち進んでいた。対戦相手が誰なのかは正直知らない誰が来ても倒すだけなのだから。俺は決勝の対局室に入る。

東一局

夢咲桂馬：25000

福路風音：25000

三森元輝：25000

天道海斗：25000

親番：桂馬

ドラ表示牌〔⑤〕

1 巡目

風音手牌

〔一二四①③④⑨〕一索二索三索南南南

ツモ〔⑨〕

俺は絶対に負けない、俺は勝ち続ける

〔④〕捨て

8 巡目

〔一二四①③⑨⑨〕一索二索三索南南南

ツモ〔②〕

〔横四〕捨て

風音「・・・リーチ」

俺がリーチをかけた時天道が笑った気がしたそして自分のラスツモが海底牌だった俺は〔⑥〕捨てた

天道「ロン12000」

天道手牌

〔四四五七七七八⑥⑦⑦⑧⑧〕〔⑥〕

風音「・・・はい」

ここから天道の連荘が始まり東四局となった

東四局

夢咲桂馬：17000

福路風音：13000

三森元輝：13000

天道海斗：57000

親番：海斗

ドラ表示牌〔④〕

ここまでの天童の和了りは全てリーチをかけた相手からの海底で和了っているこれ

から考えられるのはリーチをかけた相手から海底で和了するという能力ならリーチをかけることは出来ない

6 巡目

（一二三九九①①①④⑨） （横一索一索一索）

ツモ（⑨）

（④）捨て

恐らく奴の能力を気づいたやつ俺以外にいないリーチをかけてきた相手を俺が狙えばいいそして河を見る限り一九の牌がやすい

8 巡目

天道（⑨）捨て

風音「ロン！3900」

南一局は風音以外がノー点で流局した

南二局

夢咲桂馬：17000

福路風音：19900



三森元輝：13000

天道海斗：53100

親番：風音

ドラ表示牌〔北〕

あいつの能力がわかってても点数で倒せない・・・。久美子力をかしてくれ。俺は2つのイルカのペンダントを握りしめる。そして9巡目

風音「ロン8000」

天道「はい」

南二局 1本場

夢咲桂馬：17000

福路風音：27900

三森元輝：13000

天道海斗：45100

親番：風音

ドラ表示牌〔北〕

8巡目

風音手牌

〔五五五④③⑤五索六索七索⑨東東東〕

ツモ〔⑧〕

〔⑧〕捨て

9 巡目天道が〔東〕をきる

風音「カン」

〔東横東東東〕

新ドラ表示牌〔北〕

風音「ツモ24000の責任払い」

天道「くっ・・・」

東城は公民館でインターミドルの試合を麻雀教室のみんなと観戦していた

東城「この打ち方まるで」

小学生A「これって久美子お姉ちゃんみたいだね」

小学生B「ほんとだ久美子ちゃんだー」

東城「福路お前」

ある病院の個室でも観戦していた少女がいた

「なんか懐かしいです。でもどうしてでしょうこの人を見てると・・・」

「目が疲れたんじゃない？休んだ方がいいわ」

「そうだな、結果が気になるなら後で教えるから今は休みなさい」

「そうだね後で教えてねお父さん」

そう言うとう少女は横になる

「・・・福路君やっぱりこの子は」

風音の自宅では美穂子と風音の両親が観戦していた。

美穂子「風音の様子が変わった」

母「そうなの？でも巻き返してきたわね」

父「・・・」

母「でもこの前美穂子に聞いたけど風音がたっている所に行くにはものすごい努力がいることなのよね」

美穂子「お母さん・・・ええ風音は私よりもはるかに高い所に行っちゃったの」

母「今まで比べてきたけどあの子が何をしていたのか知りもしなかったわねちゃんと謝

らないとねお父さん」

父「ああ」

南二局 2本場

夢咲桂馬：17000

福路風音：52200

三森元輝：13000

天道海斗：20800

親番：風音

ドラ表示牌（五）

天道達は風音の周りに暴風が吹いているイメージを見た

天道（なんだこいつ・・・）

夢咲（この人の能力を奪えない格が違いすぎる）

三森（やばいな）

8巡目

風音手牌

（北北西西東東南南南六⑦）

ツモ〔北〕

〔六〕捨て

12 巡目

風音「ツモ四暗刻大四喜16000オール」

圧倒的な点数差でインターミドルは幕を閉じたのだった。

天道は凄い相手だった、正直に言うとりーチがかげられないという縛りの中で勝つのは難しかった。もしあいつの支配が俺を上回ってた場合俺は勝てなかった。そして久美子の力がなきや俺はあいつから集中して点をとる事が出来なかった。そういうことを考えながら対局室をでた。目障りな記者にこの勝利を最初誰に報告したいかと聞かれたので親友にと応えた。それだけ応えて俺はホテルに戻った

## 第十局

インターミドルが終わり様々な学校からスカウトが来た。東京の白糸台、臨海、奈良の晩成、大阪の姫松、千里山などから来ていたが全て受ける気にはなれていなかった。俺はもう麻雀をする気になれなかった為麻雀部が有名じゃない家から少し離れていた学校を受けるつもりだった。そして俺は今両親と話をしている。

父「それでどこの学校のスカウトを受けるつもりだ」

母「そうねこんなにもすごい学校からたくさんスカウトがくるなんて」

風音「俺はスカウトを受ける気はないよ」

父「どういことだ」

風音「言葉通りだよ、もう麻雀はやめる」

俺には麻雀を打つ理由がなかった。本当なら久美子の事件があつたあと直ぐに辞めるつもりだったが久美子の手紙を読んで大会に出る気が起きただけでも俺には麻雀は辛いものになっていた。牌を握る度に久美子のことを思い出してしまい辛くなるから

父「そうかやはりお前は……」

母「どうして今のまで続けてきた麻雀を辞めるの？」

風音「・・・あんたらには関係ないだろろくに俺の事を見てこなかったあんたらには」

母「そうね私達は風音と美穂子を比較してばかりで風音の事を見てなかったわ」

父「俺達はお前の為を思つて言つていたんだ」

風音「俺の・・・為だとふざけるなよ」

俺の為にやっただとふざけるなよ久美子は俺の事もあるから心配かけないよう相談をしてこないでため込んで俺の前から消えた。こいつらがやった事が久美子がいなくなつた理由の一つでもあるのにそれが俺の為だとじゃあ俺のせいで久美子はため込んでたつていうのかよ

風音「お前らがどこでも俺と姉ちゃんを比較したせいで起こつたことも沢山あるんだよ、それを俺の爲つて言う言葉ですませやがつて」

俺は父の顔を殴つていた。それを母と姉ちゃんに止められ席に戻される。

父「・・・話がそれたな、ならお前はどこの学校に行くつもりなんだ」

風音「長野の清澄に行くつもりだ、ここから遠くて通いづらいから一人暮らしをさせて欲しい。出来ないなら清澄の寮に入るつもり」

俺はそう言い残し部屋に戻つた。後日両親から一人暮らしの許可がおりて受験が終つたあと部屋を決めるといふ事が決まつた。学校生活では久美子をいじめていた主

犯達を社会的に殺す為に奴らが行つていたいじめの証拠を学校に提出しネットにも拡散させた。奴らの中には私立の推薦があつた奴もいたらしいが取り消しになり学校にも居ずらくさせた。そして受験シーズンに突入し見事合格して一人暮らしの権利を手に入れた。引越し先などを決めている間に卒業式が執り行われた。この学校にはいい思い出もあつたが良くないものの方が多かつた為さつさと卒業したかつた。卒業式の後知りもしない後輩達にボタンをせがまれたが無視をして家に帰宅し荷造りをした。

そして今俺は清澄高校に通つており勧誘を受けていた。

「君もしかして福路風音君？」

風音「そうですか」

「あなた麻雀部に入ってくれないかしら」



## 過去編 勧誘①

4校合同合宿の夜、4校の生徒達はそれぞれ交流を深めていた中で風音の話になっていた。

「竹井さんには感謝しているんです」

風音の姉である美穂子が言う

「どうしてかしら？」

「風音を卓に戻してくれたことです」

「ん？それは私の為でもあったのよ。感謝されるような事じゃないわ」

「それでもですよ、インターミドルが終わったあとは風音かなり荒れてましたから」

「えっ？福路先輩荒れてたんですか？」

「信じられないじえ」

「1年前風音さんとあった時は今よりも冷たい感じがしてましたわ」

「初めてあった時は人を全く寄せ付けない感じだったよ」

透華が言う、それに一が続いた

「そうね勧誘に行った時、かなり冷たくされたわ」

「何があつたんですか？」

咲は聞く

「まあいずれは知ることになるでしょうし今話しても問題ないか。私が風音君の事を知ったのは中学生の時、男子で初の二連覇を達成したという記録を見た時だった、そんな子が清澄に入っていることを知って直ぐに勧誘に行ったわ」

1年前 春

麻雀部がないとされているこの学校に入学して1週間がたった。それなのに何故俺は今勧誘されているのだろうか

「君、もしかして福路風音君？」

赤毛の上級生の女子に放課後呼び止められた

「・・・そうですよ」

「あなた麻雀部に入ってくれないかしら」

「お断りします、それにこの学校には麻雀部はないのでは？」

「あるわよ！去年からだけど」

「そうなんですか、でももう麻雀はやめたんですよ」

「どうして辞めちゃったの？」

「あなたには関係のないことですよ、じゃあ」

俺はそう言い残し帰宅した。

私は福路風音を勧誘しに行った、なんであんな記録を立てた子が清澄にいるのかは分からないけど私は彼と麻雀をやってみたかった、それに彼との麻雀は自分のレベルアップに繋がると思っていたからだ。それにあんな記録を立てたのだから麻雀部に入ってくれると思っていたけど返事は期待とは逆のものだった。

「上手くいかないものね」

「まあやらないものは仕方ないじゃろ」

「だけど彼本当はやりたんだと思うのよ」

「でも福路には拒絶されてるんじゃない」

「それはそうだけど」

「経歴だけ見れば福路は白糸台や千里山みたいな強豪にいるようなやつじゃからのお、本気でやりたいならそっちにいるじゃろ」

「だけど」

「まああんたがこの部の部長じゃ、あんたの好きにしたらええ」

「ありがとうま」

こうして私の福路風音君の勧誘が始まった。

この1週間毎日の様に赤毛の先輩に勧誘される、いい加減にして欲しい。関わって欲しくないのに関わってくるやつほどイライラするものは無い

「福路君！」

「またですかいい加減にしてくれませんか」

僕は赤毛の先輩を睨みつける

「私は本気であなたが欲しいの、だから麻雀部に入つて！」

「そんなことはどうでもいいんですよ、迷惑なんですよはつきり言つて！麻雀はもう辞めた」

「でもあなたは心のどこかでは麻雀がやりたいはずよ」

「何言つて」

「知ってるのよ、あなたが時々遠くの公民館でやつてる麻雀教室を遠くから見ていることを」

「やりたいだなんて思っていないただ」

「ただ何？」

「あんたに言う必要は無い」

「あなたは逃げていてるだけよ！」

「なんだと俺が逃げていてるだど」

「あなたは麻雀から逃げていてるのよ！あなたに過去何があつたのかは知らないけど」

「あなたに何がわかる！何も知らないあんたに！」

「でも今の貴方は知っている、麻雀から逃げ続けているあなたなら」

「黙れ！あんたに何を言われようと麻雀部には入らない！」

俺はそのまま逃げるように帰宅した。これじゃああいつが言うように逃げてることを認めてるようなもんじゃないか。

今日は少し言いすぎたかしらでも初めて彼の感情が見えた気がする。それは私への憎悪だったけど。私はある場所に向かつて歩いてきた。それは以前彼の目撃があつた麻雀教室に来ていた。麻雀教室を見ていると高校生が小学生に麻雀を教えていた。

「何か御用ですか？」

「すいません少し気になつて、清澄高校の竹井です。」

「清澄……。東城です、ここで子供達に麻雀を教えています。」

「単刀直入に聞きます。福路風音君をご存知ですか？」

「風音ですか？ええ知ってますよ、以前のチームメイトでここにも良く来てました」

「じゃあ彼が今麻雀を辞めてることも知ってますか？」

「やっぱりか」

「やっぱりって」

「あいつは中学の時に色々あつたんですよ、まあ詳しくは言えませんがあいつが辞めるには充分すぎるものがあつたんですよ。」

「彼には悪い事しちゃたわね」

「でもあいつにはいいきっかけかもしれない」

「表立って協力は出来ませんが応援しますよ」

「ありがとう」

私は麻雀教室を後にした。その翌日麻雀部の部室に彼はやってきたのだった。

## 全国編

## 第一局

俺達は全国大会の舞台である東京に向かっていた、清澄のメンバーは雑談などとして電車の中で暇を潰している中俺は眠っていた。

咲「福路先輩寝てるよ」

久「さすが東京に行きなれてるだけはあるわね」

優希「それにしてもこんな近くで喋ってるのに全く起きる気配がないじよ」

和「そうですね、でも昨日まで龍門淵高校に行っていたんですから疲れてるんじゃないですか」

まこ「それにしても福路はこんな寝顔なんじゃのお」

咲「はい、初めて見ました。京ちゃんは見たことあるでしょ」

京太郎「いや俺もあんまり見てないんだ、合宿の時も風音先輩は俺より遅く寝て俺より早く起きてたから」

久「確かに福路君起きるの早かったわね・・・それにしても福路君可愛い顔してるわね」

京太郎「部長……」

まこ「あんたそりゃー」

優希「今の発言を聞かれたら福路先輩がキレそうだしよ」

和「部長、」

咲「……」

久「べつ別に変な意味じゃないわよ！」

部長があわてて取り繕おうとしているがここで風音が起きた。

風音「……よく寝た」

風音は目を擦りながら喋る

久「おっおはよう福路君」

風音「……部長どうしたんです？そんな慌てて」

久「べつ別になんでもないわよ」

風音「そうですね。じゃあそろそろ降りる準備した方がいいですよ、そろそろ目的の駅ですから」

一同が窓の外を見ると東京の市街地の風景がうつっていた。優希、京太郎は目を輝かせて外を見ていた。そして電車が止まる。一同が電車から降りてホテルに向い、男子と女子で部屋に別れ男子の部屋に向かった。ホテルの窓は大きくて東京の街並みが見え



ており京太郎は興奮気味だった

京太郎「すごいですね東京って」

風音「そうだな、だけど京太郎」

京太郎「ん？なんですか？」

風音「あんまりはしゃぐなよ、田舎物だと思われるから」

京太郎「確かに」

風音「まあ気持ちちはわかるから程々にしとけ、部長達のとこに行く前に風呂でも入りに行くか」

京太郎「そうですね」

2人はホテルの風呂に向い入るとそこには先客がいた

京太郎「あつあなたは」

三森「久しぶりだな須賀、福路」

京太郎「三森さんお久しぶりです」

風音「久しぶりだな」

三森「須賀別にそんなかしこまらなくていい。同じ長野代表だ個人戦で当たるまでは仲良くしようぜ」

京太郎「はっはい」

そして俺達が身体を洗っておえたあと湯船に浸かる。すると三森が風音を見て言う

三森「福路お前なんか憑き物が落ちたみたいだな何かあったのか？」

風音「色々あつてな」

三森「まあお前にとっていいことなら別にいい、全国で当たるのが楽しみだよ」

風音「そうか」

三森「須賀お前と当たるのも楽しみにしてるからな」

京太郎「はあ」

三森「じゃあ俺はそろそろあがる、じゃあな」

三森は風呂から出ていった。

京太郎「風音先輩なんかあつたんですか？」

風音「ああ俺にとっていいことがあつたよ、近いうちにわかると思うから俺から言わないけど」

京太郎「そうですか」

風音「じゃあ俺もそろそろあがる」

そして俺は京太郎を置いて風呂から出て俺は散歩に向かった。そしていつも東京に来た時に来ていた海の見える公園に来ていた。そこはもうそろそろ沈もうとしている夕陽がとて綺麗だった。俺はベンチで龍門渚高校であつた出来事を思い出していた。

俺は天江さんに呼ばれて龍門渕高校に全国が始まるまでずっと休日に通っていた。その最初の週に龍門渕に練習試合が申し込まれたことを前日に透華さんから聞いた。

その時に俺は邪魔になるからと俺は遠慮をしようとしたが大丈夫だと言われ俺も龍門渕に向かった。そこで俺は自分の過去で最も大切な存在だった人と再開した。だがその人は俺の事を覚えていなかった。そして俺は過去の出来事で起こった真相を理解することができた。そして俺は複雑な気持ちになったがそのまま練習試合に混ざって対局をしていた。俺は彼女と対局していくうちに彼女の様子がおかしい事に気づいた、彼女が昔のように戻っているように感じて俺は昔と変わらない本気の打ち方をした。その結果は対局後に彼女が倒れそしてそのショックで記憶を取り戻した。そしてお互いに話している時俺は彼女を抱き締めてそして彼女も俺を抱きしめていた。

俺は龍門渕であったことを夕陽を見ながら思い出していた。するとそこに一人の女子がやってくる、いつも見慣れている短髪の女の子だ。

咲「あつやつと見つめました」

風音「ん？宮永さんどうしたの？」

咲「もうそろそろご飯らしいから部長に呼んで来てと頼まれたんですよ」

風音「ありがと俺もそろそろ戻るら先に戻っていいよ」

咲「えっえつとそれは」

風音「どうしたの？」

咲「ここからどうやって帰ればいいのかわからなくてしばらく一緒にいてもいいですか？」

風音「なるほどね、じゃあ少し待ってて」

俺はすぐそこにある自販機で缶コーヒーとオレンジジュースを買ってベンチに戻り座っていた宮永さんにオレンジジュースを渡した

咲「あつありがとございます、いくらでしたか？」

風音「別にいいよ、宮永さんがここまで来れたご褒美みたいなものと読んできてくれたお礼だから」

咲「ごつご褒美って」

風音「これ飲んだら行こうか」

咲「はっはい、ここ夕陽綺麗ですね」

風音「中学の時、東京に来た時に見つけてんだそれからは全国大会で来る度にここで夕陽を見るんだ、お気に入りの場所だよ」

咲「そうなんですか、福路先輩はここで何を考えてたんですか？」

風音「秘密かな」

咲「秘密ですか、」

風音「まあ京太郎にも言ったけど近い内にわかるよ、じゃあ飲み終わつみたいだし戻ろうか」

咲「そうですね、あつもうこんな時間」

風音「こりや少し部長に怒られそうだね、少し急ごうか」

咲「はい！」

そして俺と宮永さんはホテルに急いだ。案の定俺と宮永さんは部長に怒られた。

## 第二局

抽選会当日、俺は京太郎を起こして支度をして女史部屋の前で待っていた。

京太郎「遅いですね部長達」

風音「まあ女子って言うのは何かと時間がかかるものだから」

京太郎「こればかりへ仕方ないですね」

15分ほど部屋の前で待っていると部長達が出てくる

久「待たせてごめんなさいね」

咲「ごめんなさい、私がゆっくり寝ちやつてて」

風音「別に待っていませんよ」

咲「あつありがとうございます」

少し離れたところで優希が京太郎に話しかける

優希「見たか京太郎、あれがモテる男の対応ってやつだよ」

京太郎「えっ先輩モテるのか！」

優希「何寝ほけつたこと言ってるんだお前は！風音先輩は2年生と3年生の先輩にモ

テモテだよ」

まこ「おんしらくだらなないこと話とらんで行くぞ」

まこが優希達をひっぱっていく。そして俺達は抽選会の会場に移動しはじめた。

優希「なんかやつと東京に来たって感じがするじえ」

咲「うん」

和「昨日は宿泊施設に直行でしたからね」

そんな話をしながら会場にたどり着く、会場につくと既に大勢の学校の選手達が集まっていた。

優希「おろ？咲ちゃんはどこだ？」

京太郎「え・・・まさか・・・」

和「また迷子ですか」

久「しかたないわね、風音君探してきてくれるかしら」

風音「わかりました」

俺は宮永さんを探しに行く、すこし離れたところで宮永さんを見つけて迷子の訳を聞くとトイレに行っていただけだった。部長達が居る席に戻ろうとした時前からある集団がこちらを通り過ぎた。知り合いだったので会釈しすれ違ふ

咲「今の」

風音「宮永さんどうしたの？」

咲「なんでもないです」

観客席の部長達の元に戻り咲は部長達と合流する。部長達は開会式する為に移動をはじめ、俺達は開会式には出ないので待っていることにしていた。

風音「それで？組み合わせはどうだった？」

京太郎「永水女子と姫松高校が居るブロックでした。この2校とは2回戦で当たります」

風音「なるほど最悪な所と当たらなくてよかったよ」

京太郎「最悪な所？」

風音「白糸台か臨海女子だよ、あれと2回戦で当たるとなると今の宮永さんじゃ大将戦でボコられて終わる。」

京太郎「そんな」

風音「今のままだったらの話だ！宮永さんが決勝までに覚醒してくれば話は変わるけどね」

京太郎「そうですか」

風音「それに京太郎は女子のことばかり考えてる暇もないぞ、俺達は個人だ、同じ学校だからといって味方でもない。俺はお前と当たった時は容赦なく潰す」

俺はオーラを出して威圧する



京太郎「っ！」

風音「お前の気持ちもわからなくは無いけど、自分の事もしつかりやっておくことを勧めるよ」

京太郎「・・・はい」

風音「さてとそろそろ開会式も終わる頃だな、迎えに行くぞ」

京太郎「はっはい」

俺達は部長達を迎えに行きそのままホテルに戻った。部長はこれからの予定を伝えて試合まで各自自由行動となった。

風音「部長、2回戦の当日は練習試合に行つてきます」

久「どっちのかしら？」

風音「両方です、午前は千里山、午後は白糸台に行きます。」

久「分かったわ」

風音「それと決勝までに当たりそうな他校のデータです、目を通すように言つておいてください」

俺はUSBを部長に渡す

久「さすがね準備がいいわ」

風音「じゃあ俺は少し外歩いてますんで」

久「それはいいけど夕食の時間までには戻ってくるのよ」

風音「気をつけます」

俺は昨日行った公園にむかう、日はかなり傾いてきており夕日が綺麗だった。公園につくと見知った顔がその公園にいた

## 第三局

俺は公園のベンチに知った顔が座っているのを発見した。その子は俺にとって大切な人だった為無視する気にはなれなかった。

風音「久しぶりに久美子」

久美子「えっ？風音くん！どうしてここに？」

風音「いや俺も個人戦があるし団体でうちの女子が参加してるから」

久美子「いやそういう事じゃなくて、どうしてここに居るのってこと」

風音「ああそういう事か。風に当たりたくて散歩してたんだそしたら久美子がいたから声をかけたんだよ」

久美子「私と同じか」

風音「なんか悩み事？」

久美子「うん。私補欠だったんだけど私準決勝から出ることになってあつ」

風音「別に部長達に言うような真似はしないよ、それで自分が出ていいのかって事で悩んでるのか」

久美子「うん」

風音「そんなこと気にしてたらキリがないぞ。久美子達の目標がどこかは知らないけど勝つためなら仕方の無いことだよそれに変わる子も全力でやってるなら久美子はそれに応える義務がある・・・団体戦嫌いの俺が言うことじゃないけど」

久美子「ありがとう風音くん」

風音「それに大会で活躍できれば国麻に奈良代表で選ばれるかもしれないだろ国麻は男女一緒だからな個人戦なら俺とも戦える・・・俺が選ばれればの話だけど」

そう言い風音はベンチを立つ

久美子「そっかなら選ばれる位の活躍を見せなきゃね・・・風音くん」

風音「ん？」

久美子「いやなんでもない。個人戦頑張ってるね」

風音「ああじゃあな」

久美子の話を聞いていただけなのに凄い時間が経っていたのでホテルに戻る、明日は白糸台との練習試合だから早めに寝た。翌日

白糸台高校へ向かう、着いた時にあちらに連絡を入れると青髪と赤髪の女子が迎えに来た

董「遠路はるばるありがとう福路君」

照「久しぶり」

風音「お久しぶりです、今日は呼んでもらってありがとうございます」

董「いえこちらこそ来て下さりありがとうございます」

風音「別に敬語じゃなくてもいいですよ、他校とはいえ先輩なんですし」

董「いやちゃんとしておかないと後輩に示しがつかないのでな」

照「暑いから早くいこ、風音も倒れちゃう」

董「確かにそうだな、では着いてきてくれ」

董先輩達に白糸台の校内へと連れられる、そして校舎内の部室まで案内された。

董「福路君を連れてきた、みんな挨拶を」

渋谷「今日はよろしくお願いします、お茶いれますね」

亦野「よろしくお願いします」

淡「久しぶりー、風音」

風音「清澄高校から来ました福路風音です、今日はよろしくお願いします」

淡「風音、さっそくやろ！今回こそ100回倒すから」

董「こら淡、知り合いとはいえ福路君はこちらに招いたお客だぞ！あまり失礼なこと

は

風音「構いませんよ董さん」

董「だが」

風音「時間がもつたいたないですし、大星さんには何言つても聞かなさそうですし」

董「すまない」

風音「じゃあさっそく始めましょう」

照「じゃあ私が入る」

淡「私も」

風音「最後は誰にしますか？」

董「私が入ろう」

風音「渋谷さんじゃなくていいんですか？」

董「なに時間は沢山ある、渋谷には次うつてもらおうさ。その時は君本来のうちかたで頼みたいがね」

風音「臨海の雀明華の対策ですね」

董「あああいつは君とかなり似ているからね」

風音「わかりました渋谷さんとうつつ時はそうします」

董「助かる」

淡「早く始めようよ！」

風音「待たせてごめんね、じゃあ始めようか」

そして日が暮れるまで白糸台と練習試合を行った

風音「ではそろそろ帰ります、今日は練習試合を組んでくれてありがとうございます」  
董「こちらこそありがとうございます」

照「次は負けない」

風音「俺もですよ、照さんと直接対決できるのは恐らく今年の国麻が最後でしょうし、  
そこで戦いましょう」

俺はそう言い残し白糸台を去った。

淡「風音、今日も凄かったな」

照「・・・そうだね」

淡「テルー？どうしたの？」

照「なんでもないよ」

照は部室から見える夕陽をみながら答えた